
喰らう霧

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喰らう霧

【Nコード】

N8572V

【作者名】

シン

【あらすじ】

梗概

フィランドへと訪れた大学時代の仲間、現在、画商の秋月魁と、グラフィック・デザイナーの仁龍生、売れない画家の小島克也、デザイナーの深見響子と、主婦の高橋真弓と、その夫の高橋修一の六人は、豪華客船でのクルーズの途中、蒼く光る、不気味な霧に遭遇する。

一方、スウェーデンでは、豪華クルーザーでのパーティに出席していたガラス王の孫、エリマス・ダールクビストと、その秘書のオ

ーギュストが、同じように、蒼く光る霧を前にしていた。

そして、双方の船で、同じ異変が起こり始める。それは、霧に濡れた人間が、異常な食欲を見せ始める、という奇怪な現象であった。蒼い霧に濡れた者たちは、己の感情や欲望を、全て食欲に変えてしまい、ついには人間を喰らうようになったのだ。

逃げ場のない海の上で、次々に犠牲者が増え、その恐怖が広がり始める中、フィンランドからの豪華客船と、スウェーデンからの豪華クルーザーが、衝突する。

逃げ場がない上に、船が沈没の危機にさらされ、その中、魁と龍生、エリアスとオーギュストは出逢い、共に、霧に喰らわれた人間たちと、戦い始める。

その霧は、ロシアの生物兵器なのか、海に沈んでいた何かが、化学変化を引き起こすような物質と結び付いて、何らかの毒素を発生させているのか、もしくは、科学では説明のつかない、未知の物質なのか、それとも、生物なのか……。

四人は、何とか助かる方法を見つけようとするが……。

ガラス王——そう呼ばれた人物が、この世を去ったのは、ちょうど一年くらい前になるだろうか。

もつとも、そう呼ばれていた人物は、決して、ガラスのような繊細な心の持ち主では、なかったが。

厳しく、プライドが高く、傲慢で、才気に満ち、所謂、野心家、と呼ばれる人物の典型であった。

その人物が、何故、ガラス王、と呼ばれていたのか。

答えは簡単である。

その人物が野心を向けたものが、ガラスであつたからだ。

もともとは製鉄所であつたものを、彼の代でガラス工場へと轉身させ、一代で、このスウェーデンのガラス産業を築いた、という。

さまざまな芸術家や、ガラス職人を、自分の元へと集め、たったの四〇年で、アメリカ、ドイツ、オーストラリアへと手を広げ、老舗ガラス・メーカーと肩を並べる——いや、それ以上の地位を持った。

そして、彼は、ガラス王、となつたのだ。

夏——。

「クソっ！ 人を一体、何だと思つてるんだ、あのこうつくババアが！」

ストックホルムの郊外に建つ、城のような——いや、事実、城たる屋敷の廊下を歩きながら、シグルド・ワーレンは、腹立ちのままに、悪態づいた。

ここは、亡きガラス王が君臨していた、人々が言うところの《ガラスの城》である。もちろん、建物自体はガラスではないが、それでも、趣のある、かつては貴族が所有していた、というその城は、

優雅な気品に充ち溢れていた。

部屋数は――数えたことはないが、軽く数十はあるだろう。

今、この城に住んでいるのは、白髪の老婦人――亡きガラス王の細君、エイラ・ダールクビストと、その孫であるエリアス、そして十数名の使用人だけであつた。

「何が『まともな商売をなさい』だつ。貿易のどこが、まともじゃない？　どの商売だつて、いい時もあれば、悪い時だつてあるんだ。それを……。血の繋がった甥にまであの態度とは――。伯父様が伯父様なら、伯母様も伯母様だ。人間の血なんて通つてもいいない」

シグルドはまだ、ブツブツと悪態つきながら、広く豪華な廊下を、歩いていった。玄関までが遠いせいもあつて、その間に、いくらでも悪態づける時間があるのだ。

シグルドは、もう四十歳になるが、もともとが幼児性の強い――自分に甘いタイプの人間で、自分にも他人にも厳しいガラス王の細君とは、以前から反りが合わなかったのだ。

今日も、いつものことで、少し事業に穴を空けて、その穴埋めをするために、借金の申し込みに来たのだが、すげなく断られてしまった、という訳である。

金など有り余っているくせに、亡きガラス王の細君、エイラ・ダールクビストは、ビター文用立ててはくれなかったのだ。

もちろん、シグルドの方も、貿易とはいっても、密輸まがいの、法律スレスレのことをやっているのだが。

「クソっ！」

また悪態づいて、シグルドが床を蹴った時だつた。

「また、おばあさまに、借金の申し込みを断られたのかい？」

庭を臨むことが出来る、廊下のガラス窓の脇から、澄んだボーイ・ソプラノが、響き渡った。本当に、響く、という言葉が相応しい、少年らしい声であつたのだ。

見れば、そこには、十一、二歳の少年が、その窓に細工されたレリーフのように、皮肉げな眼差しで、立っていた。

床から、ほぼ天上まで、大きく切り取られたその窓には、実際、ガラス王の名に相応しく、美しい細工が施されている。それも、足を止めて、注意深く見てみなければ判らないほどの、ほんの隅っこの方に。

それを見ただけでも、亡きガラス王が、華燭さをひけらかすような人物ではなく、本当に美しいものを知る――そして、人にひけらかすようなものではなく、人が気づかない部分に、さりげない注意を注ぐ人物である、ということが解ってもらえるだろう。

少年は、その隅っこの細工を知るように、その場を選んで、立っていた。

もちろん、シグルドは、何回この屋敷に出入りしようとして、そんな細工には、全く気づいていなかっただろうが。

「やあ、エリアスじゃないか。久しぶりだな」

と、今も、全く気づいていない様子で、さっきまでの仏頂面を、愛想よく切り替え、その少年の前に、両手を広げる。といって、シグルドがその少年を気に入っている、という訳では、ない。むしろ、その逆であった。

シグルドは、その少年が嫌いなのだ。何よりも苦手、という言葉を使ってもいい。

何しろ、その少年ときたら、気に入ることが出来ないほどに、生意気で、無愛想な子供なのだから。

まあ、それが、このダールクビストの家系なのかも、知れないが見た目は、クリスタル・グラス以上に美しく、おとなしそうな少年である。北欧人らしい金髪も、透き通るような碧い瞳も、愛らしい、としか呼べない雰囲気を彩っている。

だが、性格の方は、その限りに非ず。一向に可愛くもなければ、子供らしくもない。

しかし、亡きガラス王の細君、エイラに可愛がられている、唯一の人間であるから、シグルドとしては、手なずけておかない訳には、いかない。

何しろ、亡きガラス王の遺産を継ぎ、今、このガラス王国のトッブに立っているのは、その十一、二歳の少年なのだ。そして、その少年が二十歳になるまでは、エイラが後見人として立つことになっている。

シグルドは、満面の笑みで、その子供を腕に抱き上げ——ようとしたが、

「触るなよ、ゲス」

冷ややか、とすら呼べるほどの、鋭い眼差しが、突き刺さった。エリアスは、大人のような面貌で、シグルドをきつく、見据えて

いる。

「どこの子供が、それほどに冷たい眼差しで、大人を睨みつけることが出来る、というのだろうか。」

シグルドは、刹那、面を強ばらせ、広げた腕を、凍りつかせた。

「今度、おばあさまに、つまらない話を持ち出したりしたら、承知しない。これは、ガラス王、エリアス・ダールクビストの命令だ」
命令――。

わずか十一、二歳の少年が、大の大人に、本気でそんな命令している、というのだろうか。まるで、誇り高き戦士のように、或いは、伝説と謳われた王のように。

何よりも気高く、何よりも神々しく。

シグルドの面は、カツ、と屈辱の色に、染まっていた。

「では、ぼくはこれで、シグルドおじさま」

幼き稀代のガラス王は、亡きガラス王の血を誇るように、悠然と廊下の向こうへと、消えて行った。

「あのクソガキ……」

シグルドの肩は、怒りに細かく、震えていた……。

act 3

この国の人々は、自らの国を「湖の国」^{スオミ}という。

六万とも、十数万ともいわれる湖が存在し、三万もの小島が、撒き散らされたように、浮かんでいるのだ。

フィンランド――。

北欧四力国の中で、最も北極圏寄りに位置し、その山奥には、サントクロースが住む、とされている。

「この水の澄み方は、怖いくらいだな……」

フィンランド湾の複雑な入り江の縁に立ち、^{あきづきかい}秋月魁は、心のままの感嘆を、零した。

果てしなく広がる針葉樹林や、北部の広漠たるラップランドはもとより、古バルト海に散在する島々のそこかしこに、人間の手垢に塗れていない、太古の自然が残っている国なのだ、ここは。

人々は、歌のような美しい響きの言葉を話し、隣国のどの国とも異なった歴史や、特質を持っている。

その首都、ヘルシンキに、秋月魁は、いた。

夏の今、この国は、暑い。――いや、夏だから、暑いのは当たり前なのだが、これくらい北にある国であれば、もっと涼しくても良さそうなものなのだ。まあ、もっと北の方へ行けば、また状況も違うのだろうが。

ここは、温和な大陸性気候の街であった。

「魁！ 女どもが昼メシにしよう、ってさ。もう行くぜ」

背後から、魁を海に突き落とそうとするかのような――いや、もちろん、そんなことはないのだが、それでも、思いつきの日本語が、耳に届いた。

「……恥ずかしい奴」

もう、みんな三十歳を迎えよう、とする年なのだから、子供のようにデカイ声で呼ぶのはやめてほしい、と思うのだが、海外に出る、

ということとは、誰もが解放感に流されるものらしく、日本では絶対にしないような、そんな恥ずかしい真似までしてみせる。

何より、集まっている連中が、皆、大学時代の身内、となれば、若返ったような気分にも、なるのだろう。もちろん、今でもまだ充分に、若い、のだが。

魁は、澄み切った海の側から腰を上げ、恥ずかしい身内の元へと、歩き始めた。

皆、同じ大学の仲間である。といっても、卒業後、ずっと付き合いがあった、という訳ではない。

第一、進んだ道もそれぞれで、コンピューター・グラフィックスの方へ進んだ者もいれば、画家、などという、食っていけそうになりことをやっている者もいる。大手メーカーのデザイナーになって活躍している者もいれば、美術とは全く関係のないサラリーマンになった者もいるし、普通の主婦になった者もいる。

一応、絵は、趣味で続けているようだが、それでも、もう、昔のような夢は、持って、いなかった。

魁もまた、画商、などというものをやってはいるが、描く方はやめてしまった、という人間である。

今年、三十歳になる。

性格は多少——いや、他人に言わせると、かなり無愛想なところがあるらしいが、それでも、それが、怜悯な面貌に似合っているから、周りも文句はないようである。特に、女性陣に言わせると、その寡黙なところがいいらしい。もちろん、仲間と一緒になれば、ワイワイと騒ぐこともあるのだが——まあ、それは、当たり前か。

とにかく、大学時代から、女性なら一度は、魁を描きたくなる、と言われたほどの魅力の持ち主で、現在は、大人の魅力も加わっているため、どこへ行っても、女性の視線を惹きつける。

画廊に訪れる有閑マダムたちが、絵よりも彼を買いたがる、という話も、案外、本当であったかも、知れない。後腐れのない、大人の関係、というものが似合う男、なのである。

「あまりの水の透明さに、また絵筆を握る気にもなったの？」

レンタカーの前まで来ると、大学時代から、少しも華やかさの消えない女性、ふかみきょうこ深見響子が、皮肉げに言った。

デザイナーとしてのセンスの良さを示すようなショート・カットも、シンプルなスタイルも、男に媚びることのない、気の強さを映している。

魁は、苦笑のように、唇を歪めた。

ここにいる六人は、皆、同じ美大の身内で――いや、一人は、身内の夫となった後輩ではあるが、存在感が薄いので、身内の中に入っている、毒にはならず、邪魔にもならない。年上の女房の尻に敷かれて、荷物持ちに連れて来られた、というのが、正直なところであつただろう。

六人が揃うと、二台借りたレンタカーは、手軽なランチの取れる店へと、走り出した。

魁の運転するレンタカーには、何故か——いや、当然かも知れないが、女性二人が、乗っている。

男四人、女二人の旅なのだから、当然、もう一台の車には、男ばかりが乗っている、ということになる。

女性陣に言わせると（女性は二人でも、充分、陣、である）、久しぶりの目の保養らしい。

人妻まで、そう言っ、て、魁の車に乗り込んでいるのだから、旦那の方は、あまりいい気はしないだろう。もっとも、それを口に出して言うような亭主ではないのだが。

紅二点の内の人妻、高橋真弓の夫、高橋修一は、魁たちよりも二つ、年下で、詳しいことはよく知らないが、真弓に言わせると、夫にしておくには、ちょうどいい人物であるらしい。

美大を出て、さしたる才能もなかった修一は、今、文具メーカーに務めるサラリーマンであり、一応、何の波風もなく過ごしているという。

まあ、修一の方が、真弓に夢中になって、結婚を迫っただけに、多少、真弓に邪険に扱われることがあつても、黙っているしかないのだろう。真弓も、そのところをよく心得ているらしく、

『泣いて頼むから、結婚してあげたのよ。——でも、やっぱり早まったわよねえ……。諦めないで、魁くんを口説けばよかったわ』

などと、平然と皆の前で言ったりするから、魁としては、どんな顔をしているのか、判らない。

夫たる修一が、それを笑い話にしてしまえるような人間なら良かったのだが、何も言えずに黙ってしまっているものだから、魁も余計に、気を遣ってしまうのだ。

もっとも、学生時代は、修一も、真弓に果敢に迫ったくらいだから、若さと希望に満ち溢れていたはずなのだが……社会、というも

のは、人一人、本当に呆気なく変えてしまつらしい。

それにしても、女というのは、時々——いや、いつも、どういう神経をしているのか、全く解らなくなってしまう。

今も、二人は、後部座席で、途切れることのない男の悪口を、言い合っている。もちろん、その度に、

『魁くんは別よ』

と、但し書きがつくのだが……。

自分のことを褒められるのは、本来、嬉しいことであるのだろうが、それが、他人のことを貶した上での言葉、となると、ちよつと喜ぶ気には、なれない。

まあ、女の話など、その場その場で変わる、半分冗談、半分本気の、憂さ晴らしのようなものであるのだろうが。

ともかく、魁には、聞いているだけで疲れるものであつた。もちろん、疲れていようと、女二人は、話しかけて来るのであるが。

「ねエ、魁くん」

三十を前にして、『魁くん』もないと思つのだが、これも、大学時代からの呼び方である。

「克也くんの絵、買わなかつたんですって？」

「え、ああ……」

「買う必要ないわよ。克也くんの絵って、魁くんの絵と、全然イメージが違つし、あの画廊に置いても、浮くだけだわ。せつかく、センス良くまとまつてるのに、克也くんの絵一枚で、ぶち壊しになるなんて、大損よ」

「……」

当人がいないと、その悪口も、どんどんエスカレートして行くのだから、聞いている方は、たまらない。

小島克也は、昔の志のまま、画家として頑張っている一人なのだが、さっきの響子の言葉にもあつたように、魁の好みに合うような絵ではないのだ。もちろん、批評家のように、何かと粗を見つけて突つ突くような真似はしないが、パツと見て、合う合わないの印象

は、大切である。

それに、その違いは、学生時代から解っていたことでもあるし、人の持つものは、そう簡単に変わりはない。変わらないだけなら、まだいいのだろうが、新鮮さもない、ときには、魁も、克也の絵を好きになれる見込みは、なかった。

大学時代の仲間なのだから、もっと融通を利かせてもいいのではないか、と言われるかも知れないが、それをやり出したら限がないのだ。

車は、賑やかな女たちのお喋りの中、カフェテリアに着いた。

「やめてちょうだい！」

深見響子は、目の前に立つ小島克也を、気の強い眼差しで、睨みつけた。

「だけど、この間は考えておいてくれると——」

「お酒の席での話でしょ！ それとも、大勢の前で、『あなたと結婚する積もりなんてないわ』って言って、あなたに恥をかかせれば良かった、っていうの？ 私は、あなたに恥をかかせちゃ悪い、と思つて、目一杯、気を遣つてあげた積もりよ」

その響子の言葉に、小島克也の顔が、カッ、と染まった。

自ら、芸術家、という名に酔いしれるように、長く伸ばしている髪やヒゲも、怒りに小刻みに震えている。

場所は、カフェテリアの化粧室の前であつた。

簡単なランチ・メニューを置く店で、他のメンバーも、今は注文を済ませて、それぞれ席についているはずである。

「それなら、どうして、一緒にフィンランドまで——」

「魁くんが行く、って言つたからに決まつてるでしょ。あなたのためじゃないわ」

「——」

「せっかくの旅行なのに、場をシラケさせないでちょうだい」

そう言つて、響子は、ツカツカと、皆の待つテーブルの方へと、戻り始めた。

克也は、それを止めることも出来ない様子で——また、収まりきらない怒りと屈辱のためか、長くそこに立ち尽くしていた。

そもそも、この旅の始まり、というのが、克也と響子の酒の席から始まっていたのだ。

大学時代の身内が、飲み屋で偶然、再会すれば、近況報告や、他の仲間の噂話にもなる。

デザイナーとして、満足できる地位についていた響子は、大学時代の友人のことなど、さして気にしていた訳ではないのだが、克也の方は、驚くほどに、皆の所在や活躍をよく知っていて、そんなことから、話は一気に、花開いた。

当然、今度、皆で集まらないか、という話にも、なる。

そして、魁の名前が出たことで、響子が、

「一度、会いたいわね」

と、という言葉の口にするのにも、そう時間はかからなかった。

その結果が、今回の、この旅行である。

これは、克也と響子が、中心になって仕切った旅行であつたはずなのだ。二人が意気投合したからこそ、適つた……。

「あんな女……」

克也は、震えるこぶしを、握り締めた……。

「おい、克也はどうしたんだ？」

ランチも半分ほどになろうとした時、まだ手付かずで残っているランチを見て、仁龍生じんりゅうせいが、眉を寄せた。

「さあ。自称、芸術家さまだもの、ここでも芸術に目醒めて、どこかで時間を忘れているんじゃないかしら」

そう言ったのは、響子である。

龍生は溜め息のように、肩を竦め、

「結婚しない女は、これだから」

と、言いたいことを、はつきりと言った。

「何ですって——」

「結婚しない男も、始末が悪いよなア、魁？」

と、さつさと矛先を、魁へと向ける。

何かにつけて、要領が良い男なのである、この仁龍生という青年。

フィンランド湾の入り江で、子供のように魁に呼びかけたのも、この青年で、仕事場では、クールな面貌を保ちつつ、コンピュータ・グラフィックスなるものを手掛けている。のだが、何かにつけて、次男坊気質が見え隠れする。

まあ、そんなところが、魁には割りと、ほつ、と出来る存在であり――大学時代から付き合いがなかったことは、他のメンバーと同じではあるのだが、まだ、幾分、気が楽な相手であった。

喋らずにいれば、この仁龍生、もっとモテるはずなのだが、何でも口に出して正直に言ってしまうため、さっきのように、女性を怒らせてしまうことになるのである。

それでも、性格を知らない女性には、その切れ長の瞳と、どこか周囲に漂う子供っぽさで、魁と張るほどに、よくモテる。

「社長令嬢との結婚を控えて、こんなところに遊びに来ている男も、どうかと思うが」

魁は——これも、龍生に劣らず大人気ない言葉で、仕返しのように——いや、事実、仕返しとして、言い返した。

女たちが、この仁龍生を口説こうとしないのも、その社長令嬢との結婚が決まっているせいでも、ある。

それぞれの近況報告は、女二人のお喋りによって、訊くまでもなく、知れ渡っているのだ。

「羨ましいクセに。嫉くなよ」
「ムッ」

言葉を遠慮しない、というか、見かけだけは大人の、やんちゃな子供、というか、何となく憎めない青年である。

「魁くんは、そんなこと羨ましがっていないわよっ」

いや、男としては、やはり、少しは羨ましい——と、魁は思ったが、もちろん、口には出さなかった。

女の言葉を早く終わらせるには、黙っていることが一番、である。

「だいたい、結婚なんて、ままごと遊びの延長じゃない」

響子はそう言いながら、長い煙草を指に挟んでいる。

「陽が暮れたら家に帰る、って？」

「そうよ。——結婚する積もりなんてないんでしょ、魁くん？」

また、こういうフリが、魁へと回る。

響子の口調は、結婚しない自分を、魁と同種の人間として、誇っているようで、それは皆にも解っていただろうが、魁にも、もちろん、解っていて、こういう場所で、つまらない波風も立てたくなかったのだが、

「別に、独身主義、という訳じゃないさ。今は、仕事の方が手一杯で、そっちの方に手が回らないだけで」

その言葉に、響子の表情が、裏切られたかのように、きつく変わった。

龍生が必要以上に、からかったせいも、あるのだろうが、すぐに、

「そういうのを、世間では、独身主義、って言うのよ」

自らの負けを認めず、響子は言った。

ランチ・タイムは、その後も、そんな子供じみた話で、過ぎて行った。

真弓の夫、高橋修一は、ずっと黙ったままであったが、もともと存在感が薄いので、誰も気に止めることはしなかった。

そして、食事も終わり、後は支払いを済ませるだけ、となった時、
「結局、克也の奴、戻って来なかったな」

と、龍生が言った。

「子供じゃあるまいし、船の出航時間は知ってるんだから、それま
では戻って来るわよ」

どこか愉しげに、響子は言った。

傍らでは、

「ねエ、あなた、捜して来たら？」

と、真弓が、夫の修一を、突っ突いている。

「え、でも、ぼくは……その、道もよく知らないし……」

「何のために地図があるのよ。あなたが一番、若いんだから、体力
だつてあるし、捜しに行くのが当然でしょ」

女はこういう時だけ、年寄りになつても構わないらしい。

「それはそうだけど……」

「あ、そうだ。途中、イッタラに拠つて、アールトの花瓶を買つて
来てちょうだい」

どうやら、当初の目的、人捜しの方は、薄れつつあるようである。
「でも、君の好みもあるだろうし……」

困り果てて、オロオロしている修一を横目に、魁と龍生は、肩を
竦めて、互いに顔を見合わせていた。

そして、

「克也は、俺たちが捜して来るよ」

龍生が言った。

「そ、そんな、先輩っ。ぼくが捜して来ますっ」

さすがに、年上の人間をこき使うのは気が咎めるのか、道も判らず、土地勘も方向感覚も全くない、というのに、修一が慌てて口を開いた。

「それが当然よ」

と、真弓は、言っている。

「勝手にフラついて、皆に迷惑をかけるような人間なんて、放っておけばいいんだわ」

は、響子である。

どうやら、これ以上の話し合いは、無駄らしい。

それは、魁にも、龍生にも、判っていた。

何しろ、響子と真弓の二人は、学生時代から、男顔負けのバイタリテイ溢れる存在、だったのだ。

そして、学生時代は、男に媚びようとしない、そんな二人と付き合い合つのが気楽で、魁も龍生も、男同士、という感覚で、その二人と付き合っていた。克也は——彼は、女として、響子を見ていたかも知れないが。

「ほら、早く行きなさいよ」

と、真弓は相変わらず、夫の修一を突っ突いている。

その様子に、龍生がこう言ったのは、当然のことであつただろう。

「迷子は一人で充分だ。——いつまで煙草を吸ってるんだよ、魁。」

ここは禁煙だぜ。ほら、行くぞ」

と、魁の吸いかけの煙草を押し潰して、席を立つ。

こういう奴なのである、こいつは。

魁は、仏頂面で、席を立った。

「え、先輩——っ」

と、修一も同時に、席を立つ。

「ホテルまでなら判るだろ。君は、ホテルの方を捜してくれ。克也が見つかったも、見つからなくても、六時の出航に間に合うように、客船埠頭に集合だ。高い金払って、予約してあるんだからな」

社長令嬢との結婚が決まっている、というのに、結構、セコイ。婚約者の令嬢に、財布のヒモを握られてるんだろ？」

魁の目一杯の、皮肉であった。

そして、魁と龍生は、車で街を流すことに、修一は、響子と真弓をホテルへ連れ戻り、そのホテル内を捜すことに、なった……。

「おばあさま」

ガラス王の名を受け継いだ少年、エリ阿斯・ダールクビストは、老いて尚、気品高い老婦人の部屋に来て、優しい口調で、呼びかけた。

窓からは、夏の——思ったよりも強い陽差しが、差し込んでいる。ここ、ストックホルムは、メーラレン湖と、バルト海に囲まれた、二〇余りの島を橋で結ぶ街で、水の都に浮かぶ島、または、北欧のヴェネツィア、と呼ばれている。

その街の、短い夏を謳歌するため、人々は、大型帆船やヨットを操り、紺碧の海へと繰り出して行くのだ。

「おばあさま、陽差しの中に長くいらつしやると、お体に触ります」
幼き当主、エリ阿斯は、窓の側に腰掛ける老婦人へと、声をかけた。

「そうね……。あなたが成人するまで、倒れる訳にはいきませんものね」

老婦人——フリユ・エイラは、その言葉に逆らわず、窓の側を離れて、陽差しの届かない、奥の椅子へと、場所を変えた。

「パーティの支度は、まだいいのですか、エリ阿斯？」

と、大きな背凭れ椅子に掛けて、問いかける。

「夕方ですから——。それに、おばあさまの気分が優れないのなら、今日は断っても」

「私は大丈夫ですよ。シグルドの言葉に、少しカッカしただけで」
「……」

「もう本当に年ね。以前は、カツカするあの人を宥めるのが、私の仕事だったのに……」

「おばあさま……」

エリ阿斯は、皺深い——それでも暖かい手を、両手で包んだ。

「ええ、大丈夫。解っているわ。あなたは安心して、パーティに出席してちょうだい。お祖父様のお力になってくださった方々も、大勢、見えるのですから。私が一緒に行ければいいのだけど――」

そう言つて、フリユ・エイラは、ドアの前に立つ男へと視線を向け、

「エリ阿斯を頼みますよ、オーギュスト。今日の天候なら、海も大丈夫でしょうが、船上でのパーティは、エリ阿斯の気分が悪くなつても、すぐに戻る、という訳にはいかないのですから」

「かしこまりました、大奥様」

オーギュスト、と呼ばれた、秘書然とした男は、畏まつて、頭を下げた。

年齢はよく解らないが、五十歳前後であろう。知らない人間が、初めて彼を目にすれば、四十歳前後、と言つたかも知れない。それほどに、年、というものを感じさせない、男なのだ。

かつては、亡きガラス王の片腕として、働いていた男でも、ある側にいても気にならないし――存在感がない、というのは違うが、言うなれば、気配というものを立てない、有能な部類の男、なのだ。今は、エリ阿斯の秘書として、働いている。

「あまり心配をなさつては、皺が増えますよ、おばあさま」

「まあ」

フリユ・エイラは、クスクスと笑い、

「……あなたは本当に、優しい子ね、エリ阿斯」

「……」

「あなたは、エーリックに――あなたのお父様に、そっくりだね。本当に、どんなに似て……」

と、エリ阿斯の金の髪を、優しく撫でる。

エリ阿斯自身は、写真でしか、両親の顔を知らないのだが、まだ、物心もつかないころに、船の事故で死んだ、と聞かされている。

両親も、祖父も、呆気なく事故で失ってしまったのだ。

もちろん、エリ阿斯の両親も祖父も、仕事で世界中を飛び回り、

さまざまな場所へ出掛けることが多かったのだから、普通の人間より、事故に遭う確立も高かったのだろうが—— 本当に事故だったのだろうか、という疑問も、祖父たるガラス王の死から、エリアスの胸には、過っていた。

両親の死は、覚えていないから、疑問にもならなかったのだが、一年前の祖父の死は、あまりに突然で、あまりに衝撃的で、そのショックが収まりだした頃から、そんな疑問が生れるようになっていたのだ。

もちろん、事故でない、という証拠など何もなく、あれば警察が調べているだろうが。

亡きガラス王は、ヘリでの移動の最中に、事故に遭い、恐らく、気流の悪いところに入って、コントロールが効かなくなったために墜落したのではないか、ということになっている。

ヘリコプターは、渋滞に巻き込まれることもなく、時間を有効に使えるから、と言って、亡きガラス王は、いつもヘリで、各地の工場を移動していたのだ。

それは、誰もが知っている。

だから、誰もが、そのガラス王の死に、疑問を抱かなかった。空を飛ぶ乗り物は、いつ落ちても不思議ではない、という思い込みがあったのだろう。あれだけヘリを乗り回していれば、今まで落ちなかったのが不思議なくらいだ、と。

だが、こうは考えられないだろうか。誰もが、ガラス王がヘリを愛用していたことを知っていたのなら、誰でも、そのヘリに何らかの細工をすることが出来た、と——。

大破炎上したヘリからは、その痕跡も見つからなかったが、もともと、証拠を消すために、大破炎上させたのではないか、と——。

もちろん、それは、証拠のない仮定に過ぎないのだが。

それに、両親の事故に関しては、大破炎上した訳ではないのだから、何か不審があれば、当局の調べで判っているはずだ。

ヘリの事故はともかく、船が沈んだその事故の方は、本当にただ

の事故であつたのかも、知れない。

そう思うと、ヘリの事故も、やはりただの事故であつたようにも、
思えて来る。

それでも――。

それでも……。

「ぼくはこれで失礼します、おばあさま。そろそろ、パーティの支度を始めますので」

エリ阿斯は、老婦人の頬にキスを重ね、オーギュストと共に、部屋を出た。

他人から見れば、可愛げのない、妙に大人びた子供であっただろう。恐ろしくなるほどに、子供らしさの破片かけらもない――。

だが、彼は、早く大人にならなくては、ならなかったのだ。ガラス王の名を継ぐ者として、そして、残された大切な人を守るために――シグルドじゃないのか、オーギュスト？」

広い廊下を渡りながら、何とも言わず、エリ阿斯は言った。

だが、オーギュストは、その言葉の意味を理解したらしく、
「あの気の小さな御方に、事故を装うような真似が出来るとは思えません。カッとなって、手を挙げるくらいのことは、なさるでしょうが」

「……そうだな」

一番、疑わしい人物が、そんなことの出来る人間では、ないのだ。
「もう危険な真似は、おやめください、坊っちゃん――エリ阿斯様。大奥様に内緒で出席されている、他のパーティだけでも――」

「それは、パーティの間に、ぼくも事故に遭う確立が高い、ということかい、オーギュスト？」

「……」

「ぼくは、シグルドよりも、おまえのことを疑っているんだ。いつも、おじいさまの側にいたはずのおまえが、あの日に限って――おじいさまが事故に遭われたあの時に限って、一緒にいなかった。おまえなら、ヘリの細工も出来ただろう。そのおまえを、おばあさまの元に残して行くことはしない。おまえは必ず、ぼくの側にいるん

だ。——いいな、オーギュスト？」

何という少年なのであろうか、彼は。

これが、わずか十一、二歳の子供が口にする言葉である、というのだろうか。

「……はい、エリ阿斯様」

陽差しには、少し陰が、差し始めて、いた……。

「見つかったか？」

車の中から降りて来る秋月魁を見て、仁龍生は訊いた。

「いや」

とだけ、魁は首を振る。

国際免許を持つこの二人が、二台のレンタカーをそれぞれに運転して、街を流して捜してみても、カフェから姿を消した、小島克也の姿を見つけることは出来なかったのだ。

あとは、タクシーでホテルに戻った三人だが、まだ埠頭には姿を見せていない。

「来るんじゃないかった、って顔だな」

煙草を銜える魁を見て、皮肉な口調で、龍生は言った。

「愛煙家が肩身の狭い思いをする北欧は、懲り懲りだよ」

「ノルウェーに比べれば、マシさ。それに――。話をすぐ別の方向に持って行って、煙に巻こうとするおまえの態度も、気にいらない口数が少なけりゃ、女にはモテるんだろうが、男にはモテないぜ」

「……かもな」

苦笑のように唇を歪め、魁は、煙草の煙を、吐き出した。

何でもはつきりと言ってくれる友人を持つのは、いいこと、なのだろうが、龍生の場合、いつも、一番痛いところを突いて来るから、魁としては、黙るしかない。

「俺が一番、残念だったのは、自信家のおまえが、自分の才能に見切りをつけて、絵筆をを折った時の顔を、見ることが出来なかったことだよ。――挫折したくせに、逢ってみれば、それなりに成功している青年画商だ」

「それなり、は余計だ」

今でも、自信家なところは、変わっていない。

「何で、おまえが、こんなくだらない旅行に参加したか、当ててや

ろうか？」

「——遠慮しとくよ」

「そうか。なら、言ってやる」

結局、言うのである。

こちらの方も、学生時代から、ほとんど変わっていないらしい。

「おまえは、ただ一人、筆を折らずに画家なんて酔狂なことをやってる克也に、勝ちたかったのさ。画商として成功している自分の方が上だ、と見せつけてやりたかった。——そうだろ？」

「……」

「俺も同じだよ。挫折して、筆を折って——。それでも、別の分野で成功して、社長令嬢との結婚も決まってる。そんな自分を、克也に見せつけてやりたくて来たんだ。俺になかった才能が、克也になんかあるはずがない、ってな。あいつに、自分の才能のなさを気づかせてやりたかった。自分の才能が、どんなにちっぽけなものなのかにも気づかず、まだ絵筆を握っている、あいつに——。天才は、そうそう生まれて来るもんじゃない、さっさと筆を折って、おまえも挫折しろ、ってな」

「……かもな」

多分、龍生の言葉は、正しいものであったのだろう。そして、誰もが口に出せない、正直な心であったに、違いない。

どんなに描こうとしても描けず、技術ばかりが先走って、自分の絵が描けなくなってしまった時の、あの苦しさ。

描くことが、ただ楽しかった昔とは違って、段々、苦痛になっていった、あの頃。

うまい絵なら、いくらでも描くことが、出来た。誰もが知る有名美大で、期待されていた腕だったのだ。技術だけなら、いくらでも持っていた。それこそ、人が羨むほどに。

だが——。

だが、ただ楽しいだけで、絵を描いていた日々のことが、思い出せなくなってしまうていたのだ。

うまくなれば、うまくなるほどに。

期待されれば、期待されるほどに。

それは、魁だけでなく、龍生もまた、同じであっただろう。だからこそ、仕事も成功し、忙しい時期でも、こうして休みを取って、こんな旅行に加わっているのだ。

他人にも、自分と同じ挫折感を味あわせてやりたくて……。

あの苦しさを、克也にも味あわせてやりたくて……。

「あの時、克也がテーブルに戻って来ないのを知っても、誰も席を立たなかった。すぐに、克也の話題から話を逸らし、目の前のランチを平らげた。だから、解ったのさ。皆、同じことを考えてるんだ、ってな」

誰もが、まだ絵筆を握っている男を、疎んじていたのだ。——いや、嫉妬していた。

「おまえは精神分析医になるべきだよ。コンピュータより、性に合っていそうだ」

車の灰皿に煙草を潰して、魁は言った。

「まあ、俺の場合は、色々と才能があり過ぎるからな」

結構、本気で言ってるから、この青年、可愛い。

「……色々な才能より、一つの才能が欲しかったさ、俺は」

この魁の言葉こそ、誰もが思っている本音、ではなかっただろうか。

「まあ、適当なところで、我慢しとくんだな。俺だって、そうしてるんだから」

フツ、と魁は、鼻を鳴らした。

そうする内に、タクシーが止まり、ホテルに戻っていた三人が、姿を見せた。

「魁くん、克也くん見つかった？」

第一声にその言葉が出て来たのは、幾分、安堵できるものであっただろう。それでも、それは、本心から、克也を心配してのもではなかったに、違いはない。

見つからなかった、と知るや否や、話は、これから始まるクルーズのことへと、移り変わった。

これから、十数時間かけて、このヘルシンキから、海を隔てたスウェーデン——ストックホルムに、そして、そのストックホルムとフィンランドの古都を、巡ることになっているのだ。

十八時に出発して、翌朝九時に到着する、バルト海クルーズである。

客船埠頭には、その豪華客船が、碇泊している。

三万トン級の大型客船で、船底から、最上階のデッキまで、九層になっており、レストラン、クラブ、サウナ、プール、カジノ、免税ショップ……と、これからのクルーズを退屈させない施設が、整っている。

「もう行きましようよ。船が出てしまいわ」

まだ時間的な余裕はあるはずだが、女二人は、そう言って、これからの船旅へと、魁を急かせた。

「克也くんだって、子供じゃないんだから、心配ないわよ」

「ん、ああ……」

結局、一人欠けたまま、五人は、豪華客船に乗り込んだ。

龍生の視線を感じて、魁は、また心を見透かされたような気がしたが、今は、欠けた一人を捜している時より、ずっと気分は楽であった。

多分、それは、誰もが同じ思いである、ということ、龍生の言葉から知ったせいでもあっただろう。

克也が何故いなくなったのかは判らなかったが——いや、恐らく、仲間の成功を見せつけられて、我慢できなくなって姿を消したのだろつ、と思っていたが、そのことへの罪悪感は、あまり、なかった。自分たちは、絵筆を折った地点で、すでに克也に負けているのだ、ということをし、認めてしまったせいだったかも知れない。

勝った人間が、負かした人間に罪悪感を感じるのは当然だが、負けた人間である魁や龍生が、そんな罪悪感を、克也に持つ必要などない、と思っていたのだ。

何より、今も昔も変わらず、好きな絵だけを描いて暮らしている克也を、これ以上、心配してやる必要もない、と思っていた。

そして、船は、バルト海へと、出港した。

二〇〇〇人から、二五〇〇人を収容できる、という大型客船の片隅には、五人を見つめる一人の男の影が、あった……。

同じ頃、バルト海を隔てたストックホルムから、政財界の要人たちを乗せた、超豪華クルーザーが、波足も優雅に、出港していた。収容人数、四五〇名ほどのクルーザーだが、金持ちだけを乗せるクルーザーとあって、その豪華さも、並のクルーザーとは、ケタが違ふ。

出港と同時に始まったパーティも、これから夜通し続くであろうと思わせるように、まずは、握手と談笑から、始まっていた。

「何をしてるんだっ、マルセ！ 早く来ないかつ」

タキシードに身を包む、六十歳前後の紳士が、まだ三十代半ばと思える貴婦人を、咎めるように、急き立てた。

「ですが、あなた……。私、昨夜から気分が……」

弱々しい声で、マルセ、と呼ばれた貴婦人は言った。

「各界の要人が集まっている場だぞ！ その中、私に体裁悪く、一人で挨拶をして回れ、とでもいう積もりか？ 私の妻なら、少々気分が悪くても、這ってでもついて来るのが当然だろう」

「……」

「早くするんだっ。このパーティが終わってからなら、倒れようと寝込もうと構わん」

紳士は、蒼白い顔をした妻を労るでもなく、パーティの輪の中へと、入って行った。

マルセも唇を噛み締めるようにしながら——いや、もうそれさえも忘れてしまったかのように、無気力な表情で、紳士の後に続いている。

不幸な女性であることは、一目で知れた。まだ若いというのに、その華やかな時代を謳歌しよう、とする生気が、全くないのだ。

もし、別の人物の元へと嫁いでいたのなら、彼女は、美しく優雅な貴婦人として、もっと生き生きとしていたのではないだろうか。

そんな貴婦人を従え、紳士の方は、薄ら笑いさえ、浮かべている。愉しんでいる、のかも、知れない。何でも言う通りに動かすことが出来る、その妻の存在を。

彼らが、まず最初に向かったのは、要人たちの中でも、もう表向きは引退した——それでも、彼らの一声で、国さえ動かすことが出来る、と言われている人物たちの元であった。

だが、その時、会場の入り口近くで、おおつ、という、低いどよめきが、響き渡った。

見れば、まだほんの小さな子供が、少し生意気にも、タキシードに身を包んで、会場へと入って来ている。

小さな子供でありながら、傍らには、大の大人を従え、政財界の大物を前にしても、少しも怯まず、堂々たる態度で、入って来たのだ。そして、そんな、不思議な子供の雰囲気は、周囲の大人たちを、圧倒させるに充分なものであった。

彼の傍らに控える男は、彼の父親、という訳ではなく、部下か何かであろう。そんなことが一目で判るほど、その子供は堂々とし、上に立つものの力を見せつけていたのだ。

閣僚クラスのお偉方さえ、その子供の元へと、自ら足を向け、孫と接するように、親しみを込めて話しかけている。

「お祖母様はお元気かね、エリ阿斯君？」

「はい、お陰様で……」

「そうか。私も、君のお祖父様には、随分、世話になった人間だ。何か力になれることがあれば、いつでも声をかけてくれたまえ」

「ありがとうございます」

ガラス王——。彼は、その名を受け継いだ少年なのだ。

お偉方の元へと向かおうとしていた紳士は、憎しみにも似た眼差しで、そのガラス細工のような子供を、見据えていた。

周囲で、ひそひそと声が、飛び交い始める。

「先代のガラス王が亡くなって、ダールクビストのガラスの城も、もう終わりかと思っていたが、あんな小さい子供が、あっさりとガ

ラス王を継いでしまうのだからな。バーレンにしてみれば、思惑違
いだっただろう」

と、チラチラと、紳士の方を、垣間見ている。

幼きガラス王と、老舗ガラス・メーカーの会長、バーレンとの鉢
合わせは、人々の注目の的であったのだ。

もちろん、閣僚クラスのお偉方が、どっちにつくか、ということ
も含めて。

「クソっ」

紳士——バーレンは、その人々の囁き合いの中で、悪態づいた。
そんなことが、また、周りの人間を喜ばせることになる、とも知ら
ずに。

バーレンにしてみれば、わずか十一、二歳の子供が継いだガラス
王国など、ほんの数カ月で、崩れ落ちてしまいうだろう、と思ってい
たのだ。そして、その時には、老舗ガラス・メーカーたるバーレン
のブランドが、再びトップに返り咲くであろう、と。

だが、現実にはそうはならず、幼い子供が継いだガラス王国は、
それだけでも業界の注目を集め、亡きガラス王の人脈もあって、一
向に衰えもしていないのだ。

バーレンには、何よりも面白くないことであった。

「あなた……。少しだけ、風に当たって来てもよろしいかしら……
？ 気分が悪くて……。もう立っていられなくて……」

妻のマルセが、弱々しく言った。

もちろん、バーレンには、そんな妻の体を気遣ってやる積もりも、
休ませてやる積もりも、なかった。

特に、今は、幼きガラス王の出現で、さらに機嫌を損ねていたの
だ。

その妻の言葉を、キツ、と睨み、

「まだそんなことを言っているのか、おまえは！ このパーティの
顔触れを見てみるっ。妻は気分が悪くて休んでいる、など、そんな
みつともないことが言えると——」

と、言いかけたのだが、バーレンは、何かを思いついたように、言葉を切り、唇の端を持ち上げた。

「そうだな、少し休んで来い。ここで倒れられても、迷惑だ」

と、狡猾な面貌で、ニヤリ、と言う。

そんな許しをもらえるとは、思ってもいなかったのだろう。マルセの表情が、戸惑いに変わった。それでも、ホツとしたように頬を緩め、会場の出口へと、歩き出す。

バーレンは、その姿を黙って、見送っていた。カツ、となることはあっても、策を練れないほどに、間の抜けた人間では、ないのだ。そこが、シグルドとバーレンの違い、でもあっただろう。

「美しい妻には、それなりに役に立ってもらわんとな……」

マルセは、血の気の引くような気分の悪さを押し堪えながら、パーティ会場の外へと、向かっていった。

体が弱い、という訳では、ない。恐らく、精神的な疲労の方が、大きいのだろう。

会場を出るまでに足がフラつき、マルセは、前のめりに床へと倒れ込んだ。——いや、倒れようとした時、誰かが、腕を伸ばして、マルセの体を支えてくれた。

力強い——それだけで安心できるような、腕である。

厚い胸板も、大きな手も、その一瞬で信頼できる、という温もりが、籠もっていた。

もちろん、それが、夫たるバーレンの腕でないことは、確かであったが。

「大丈夫ですか、フリユ？」

マルセの耳に届いたのは、愛らしい、ボーイ・ソプラノであった。小さな男の子が、マルセの顔を見上げている。

もちろん、その小さな子供が、マルセの体を支えてくれる訳では、ないだろうが。

マルセの体を支えてくれているのは、その少年の傍らに立つ、年齢のよく判らない男であった。

「あ……ごめんなさい。——ええ、大丈夫。少し、目眩がしただけで……」

マルセは、少し慌てながら、それでも、何故かその少年の優しい言葉に救われたような気分になって、忘れていた笑みさえ、返していた。

「オーギュスト、ご夫人を部屋までお送りして。バーグマン氏なら、快く部屋を貸してくださる」

「かしこまりました、エリアス様。——どうぞこちらへ、フリユ」

「え？ あの……」

マルセは、慣れない親切に、戸惑った。
バーレンの家に嫁いだから、こんな風に優しくしてもらったことなど、一度もないのだ。

「ダールクビストの秘書の身ではございますが、私が支えさせていただきます。——どうぞ」

「ダールクビスト……」

ダールクビスト、といえば、夫を不機嫌にさせている、ガラス王の名前である。夫の事業の邪魔をし、我が物顔でのさばっている、という……。

だが、それでも——。

それでも、マルセは、オーギュスト、と呼ばれたその男の手を、振り払う気には、なれなかった。それどころか、夫には感じたことのない、暖かさ、というもののまで、感じていたのだ。

幸せな結婚でないことは、マルセの視点からだけでなく、周りの人間から見ても判ることだろうが、もうそれが当前、と諦めかけていた頃に、こうして差し出された優しさは、何よりも心が暖まるものであった。

「どうぞ、こちらです」

オーギュストが、一つの部屋のドアを、開いた。

一流ホテルのロイヤル・スイートにも劣らない、豪華な部屋である。多分、このクルーザーの中でも、一際立派な一室ではないだろうか。

「あの——」

「エリアス様は——ダールクビストは、優しい方です。——ですが、あなたは拘わり合いにならない方がいい、フリー。どんな些細なことでも、利用しよう、という人間はいるものです。ダールクビストへの礼も、ご遠慮いたします」

そう言っ、オーギュストは、パーティ会場へと、戻って行った。
マルセにとっては、束の間の夢のような出来事で、あった。自分

が人間らしさを取り戻して行くような、そんな気さえ、していた。
どれほど秘書然とした事務的な言葉であつても、それは決して、
冷たいものではなかったのだ。

「……ありがとう」

マルセは、部屋に入って、心地よい弾力を持つ、豪華なソファへと腰を下ろした。

疲れ切っていた体が、心の奥底の氷が解けるのにも似て、痺れるように、和らいで行く。

マルセは、その安らぎに浸るよう、薄茶色の瞳を、そつと閉じた。もう何年も、こんな落ち着ける時間を持ったことなど、なかったのだ。父親の事業が、多額の負債を抱えて追い詰められ、その負債を肩代わりしてもらったバーレンの元に、嫁いでは。

老舗ガラス・メーカーの会長たるバーレンにとっては、その出資の代わりに、何でも思い通りに動かせる——そして、格好の憂さ晴らしになる妻を手に入れたのだから、それなりに満足できる生活であつただろう。

バーレンが方々に女を囲っていることは、マルセも承知しているし、それに文句を言う積もりも、全くない。そんなところが、バーレンの気に入る妻でもあつたのだ。離婚、などという体裁の悪いことにもならず、好き勝手をして何もないわい妻の存在は。

どれくらいそうしていただろうか。

カチャ、とドアの開く音がした。

さっきのダークビストの秘書、オーギュストが様子を見に来てくれたのか、と思い、マルセは、出来るだけ疲れた顔をしないように、閉じていた瞳を開いて、顔を上げた。本当は、もう少しこうして目を閉じていたかったのだが、あの二人のためなら、少々無理をすることも、決して厭な気分では、なかった。

足音が部屋へと、入って来た。

だが、それは一人の足音ではなく、少なくとも、四、五人はいるように、思えた。

マルセは少し戸惑いながら、ドアの方へと視線を向けた。

そこには、顔半分を隠す仮面をつけた男たちが、五人もいた。

仮面舞踏会でも始めるのかしら、とマルセは思ったが、すぐに普

通ではない雰囲気を感じ取り、ハッ、としてソファの上から、腰を上げた。

「あ、あなたたちは何なの……っ。人を呼びますよ」

と、震える声で、言葉を放つ。

「ほう。五人ではまだ足りんかね。よほど、好きとみえる」

狡猾げな唇が、ニヤリ、と歪んだ。

「何の話を……」

「我々を楽しませてくれるそうではないか。何でもしてくれる、と聞いているよ、あなたのご主人からね、フリユ」

「え……？」

それは、マルセの聞き間違い、ではなかったのだろうか。いくら、思い通りに動かせる妻とはいえ、自分の妻を、そんな見知らぬ男たちに差し出すなど……。いや、仮面を取れば、誰もが知っている顔であるのかも、知れない。

そして、バーレンが、今日に限って、休んで来い、と言ってくれたのも、このためであつたのかも。

「さあ、楽しませてもらうよ、フリユ。バーレンにはもったいない、若い奥方だ」

男たちが、厭らしい笑いを浮かべて、足を進めた。

「や……やめて……」

マルセは、震える足で、後ずさった。

「ヘル・バーグマンのパーティは、真面目過ぎるのがたまにきずだ。こういうことにかけては、あなたのご主人の方が、楽しみ方を知っている」

タキシードの黒い塊が、目前に迫った。

「いやあああ——っ！」

果たして、そのマルセの叫びは、声になっていたのだろうか。

男たちの欲望は、それすら掻き消してしまうものであつたに、違いない……。

「イッタラの花瓶を買いに行かなかった、ですって？ あなた、ホテルに戻ってから、何をしていたのよ！ 買って来て、って言ったじゃないの！」

船がバルト海へと漕ぎ出してから、一時間、まだこれから、ほとんど華やかになって行く夜のために、着替えに戻った部屋の中で、真弓は、夫の修一を怒鳴りつけた。

ここは、真弓の部屋ではなく、修一と龍生が取っているツイン・ルームであり、真弓は、響子と別のツインを取っている。

デラックスから、エコノミーまで、キャビンには五つのカテゴリがあるが、ここは皆、平等に、《Lux Room》を取っている。

真弓と響子は、《Suite》にしよう、と言い張ったのだが……。 「ご、ごめん。つい、うっかりして……。それに、小島さんも捜さなきゃならなかったし——」

「克也くんを捜すのに、何時間かかるって言うのよ！ 街を捜し回っていた魁くんや龍生くんならともかく、あなたは、ホテルの中を捜しただけじゃない！」

「……」

「もう本当にイヤになるわ。どうして、あなたなんかと結婚したのかしら」

そんな真弓の物言いは、もう今では珍しくもないことであつたが、このフィンランドに来てから、修一には、たまらないものになつていた。

家の中にいるのなら、他に比べられる対象があるわけでもなく、それほど腹も立たないのだが——いや、腹は立っても、結局、真弓も、修一以外に話相手がいないために、いつまでもプンプンとはしていないのだが、ここには、他に話相手が、一杯いるのだ。それも、

修一より、ずっといい男と思える、二人の身内が。

どちらも独身で——龍生の方は、婚約者がいるようだが、魁の方は決まった相手もおらず——となると、真弓が結婚を悔やむのも無理はない。

そして、修一には、今までにない腹立ちが込み上げて来るものであった。

愛して結婚した妻であった、はずなのだ。あの頃は、そんな偉そうな口調も、年上女性の包容力とさえ思えて、ただ愛しただけのものであった。心の全てを奪われるほどに、魅力的な存在であったのだ。

それが——。

それが、結婚という枠の中に収まってみると、この結果である。何故、こんな女に、あれほど夢中になっていたのだろ、と思わずにいられないほどに。

人はよく、男は女の尻に敷かれているくらいが丁度いい、というのが、実際、そうなってみれば、決して、そんなことは言わないだろう。

女はやはり、慎ましく——とまではいかなくても、ある程度は夫を立ててくれ、互いに陰ひなたになり、共に支え合って生きて行けるような関係が、一番いいのだ。

「聞いているの、あなた！」

また、キーキーと煩い声が、飛んだ。

殺してやりたい——と、ふと修一が思ったのも、その時であった。そして、それほどはつきりとした殺意を感じたのは、初めてであった。

だが、慣れない社会に出て、すっかり臆病になってしまった修一に、そんなことが出来るはずもなかった。せいぜい、物に八つ当たりするのがいいところで——いや、それも真弓に文句を言われるかと思うと、ためらって、出来ない。家の中のものを壊したりしたら、それこそ、何を言われるか判ったものではないのだ。

だが、ここは家ではないのではなかったか。そして、壊しても真弓に文句を言われるようなものは、それほどなかったのでは……。やはり、臆病である。

「もういいわ。私、みんなとバーに行ってくるから。あなた、その間に免税店で、このメモに書いたものを買って来てちょうだい」

買い物好きな女性から見れば、この真弓の言葉は納得できないかも知れないが、この豪華客船の中の免税店、といえば、ウォッカやウイスキー、煙草を買う人の群れで、凄まじい混み方になっているのだ。それというのも、それらのものには、高い税金がかけられているため、北欧の人々は、このクルーズを、船旅、というよりも免税店でのショッピングや社交の場、として楽しんでいるのである。そんな免税店に、うっかり買いに行こうものなら、遊ぶ前に、へたつてしまう。それに、せっかくセットした髪も、バーへ行くために着替えた服も、クシャクシャになってしまふに違いない。

まだ買い物よりも、男の視線の方が気になる、女、なのである、真弓は。

真弓は、修一にメモを手渡すと、さつさと部屋を後にしていた。

今、修一の手の中には、そのメモだけが、残されている。

そして、消えることのない、はつきりとした殺意も……。

ギョッ、とメモを握り潰し、修一は、それを、ゴミ箱の中へと、投げ捨てた。……が、十分と経たない内に、

「ぼくに、人殺しなんか出来るはずないよな……」

と、ゴミ箱の中からメモを拾い、それをきれいに広げ始める。

こういう性格だから、真弓に馬鹿にされるのだ、ということも解っているのだが、人間の性格など、そう急激に変わりはないものだ。絵ばかりを描いていた学生時代から、いきなり右も左も判らない社会に放り出された時なら、ともかく、もう言われ慣れている悪態、となれば。

それに、殺し損なって、一生そのことをチクチクと言われ続けるくらいなら——その上、莫大な慰謝料を請求されるくらいなら、素

直に免税店に行つて、少しでも真弓に機嫌を直してもらつた方が、いい。たとえ、他人からは、どんなにみつともなく見えようと……。

そして、日本に戻つたら、離婚届を突き出してやればいいのだ。会社での体裁は悪くなるし、慰謝料もがっぽりとふんだくられるだろうが、殺し損なつてふんだくられる額より、遥かに少ないはずである。それに、あんな女のために、一生を棒に振る必要もない。

そこまで考え、修一は、メモを片手に、部屋を出た……。

外は、まだ明るいままである。

夏の今、バルト海の日没は、やがて——本当に「やがて」というのんびりとした形で訪れる。

白く仄かな白夜の太陽の下、少し感傷的な気分にもさせてくれるような形で、陽はゆるりと沈んで行くのだ。

そんな白い夜を、部屋の窓から眺めながら、魁は一人、静かな時間浸っていた。

ここは、魁と克也が取っているツイン・ルームであり——いや、であるのだが、克也があれつきり行方不明であるため、魁一人の部屋となっている。

そして、それは、魁にとって、最も気楽なことであった。

もちろん、克也の心配をしていない訳では、ない。

だが、もういい年をした三十男なのだ。暗い夜に、突如としていなくなった、というのなら、心配もするだろうが、昼間のカフェで姿を消した、となると、自分から、フラフラと出歩いている、とは思えない。事故や事件に巻き込まれた、ということではないはずなのだ。もちろん、警察にも、それらしき通報は、一件もなかった。今は、北欧の人々が、一年の中で、一番人生を謳歌する夏である。そんな暗い事件は、似合わない。

そんなことを考えていると、コンコン、とドアにノックが届いた。魁はもちろん、居留守を使った。

やっと、騒々しいバーから逃れて、自分の部屋へと戻って来たところなのだ。少しくらい静かな時間に浸っていても、バチは当たらないだろう。

だが、ノックの主は、そう思っていないらしく、

「おい、魁、開けるよ！ いるのは判ってるんだっ。出て来なきゃ、女どもに、おまえがここにいることをバラすぞ。目の色変えて、お

まえを捜し回っているんだからな」

声の主は、本当にいつも、痛いところを突いて来る。

魁は、仕方なく腰を上げ、ドアの鍵を解除した。

目の前に立っているのは、言わずと知れた、龍生である。

「相変わらず、腹の立つ奴だな、おまえは。いつも俺より先に逃げやがる」

開口一番、龍生は、そんな悪態について、ツカツカと部屋に入り込んだ。

もちろん、魁は止めなかった。ドアの前で、長話をされるより、マシである。

「三十にもなると、騒ぐのはきついのだ」

と、肩を竦める。

「きついのは、そっちの方じゃないだろ。おまえの建前なんか、すぐに判るんだよ。俺だって、女どもの元氣さに疲れてるんだから」

「なら、自分の部屋に戻ったらどうだ？」

飽くまでも、素っ気ない口調である。

「おとなしい後輩と」にらめっこも疲れるのだ。バーに来てなかったんだから、部屋で羽根を休めてるに決まってる。そんなところに先輩の俺が戻ってみろ。向こうだって、息抜きも出来やしない」

「おまえが一番、後輩に気を遣わせないタイプじゃないか。俺や克也が同室だったら、もっと気疲れしているに決まってる」

今回の部屋割も、それを考慮してのものなのだ。

「まあ、おまえと同室にはなりたくないだろうな。考えただけで息が詰まる。それに、真弓のこともあるし」

「……」

魁は、黙って窓へと視線を向けた。

窓の外には、幻想的な、明るい色の海が、広がっている。

二万ともいわれる群島の合間を縫って進む、このクルーズは、船からの眺めも素晴らしく、いくつもの群島や岩礁をくぐり抜けて進むスリルも、味わえるのだ。

岸边には、北欧の人々の日常を垣間見ること、出来る。

「まあ、おまえに厭味を言いに来た訳じゃないけど――」
龍生はそう言い、

「克也が船に乗ってるぜ」

と、唐突にその言葉を持ち出した。

「え？」

「さつき、バーの中で見たんだ。暗かったけど、あれは確かに克也だった。すぐに消えちまったけどな」

龍生の話では、克也の姿を見つけ、声をかけようとする、と、克也は、逃げるように人混みの中に消えて行った、という。

もちろん、何故、逃げてしまったのかまでは、解らない。

「まあ、バツが悪かったんだろうけどな」

龍生は言った。

だが、魁の胸には、何となくすつきりしないものが、燻っていた。確かに、龍生の言葉通り、突然、行方を暗まして、皆に黙って船に乗っているところを見られて、バツも悪かったのだろう。

だが、それだけではない、という気もしていた。

「響子や真弓には話したのか？」

魁は訊いた。

「話してたら、今頃、大騒ぎさ」

龍生は天を仰いで、肩を竦める。

男にとって、出逢ったばかりの女は可愛いものだが、長く付き合い合っている女は、喧しいものでしかあり得ないのだ。特に、学生時代からの知り合い、となると、気分も学生時代に戻ったような気になるのか、その女たちの賑やかさときたら、一時間と付き合っではいられない。

「あの喧しさを見てたら、本当に、沙織と同じ女なのかと疑いたくなるよ。——あ、沙織、っていうのは、俺の婚約者の名前だけ——」。きれいな名前だろ？ 写真を見せてやろうか？ 信じられないくらいの美人だぜ」

「……幸せな奴」

魁は、頭痛を堪えるように、眉間を押さえた。

龍生の方は、

「つまらない奴」

と、そつばを向いている。

この二人、結構、気が合っているのかも、知れない。

性格の方は、似ている、とはいえないが。

「まあ、克也が無事、船に乗っているのなら心配もないじゃないか。響子や真弓に知れて、酒の肴にされるのは、たまらないが」

「同感」

やっと、意見が一致した。

それから、どれくらの時間が経ったであろうか。急に、窓の外が暗くなった。それは本当に「急に」という言葉が相応しい、陽の暮れ方であつたのだ。

これが「やがて」の日没なのだろう。

だが、何か、おかしくはないだろうか。

この辺りには、完全な白夜はないとはいえ、こんな風な暮れ方を
するものなのだろうか。

「静かだな」

龍生が言った。

確かに、暗い海は、ゾツとするほどの静けさに包まれていた。

場所が場所なら、そして、相手が女性であつたのなら、その龍生の言葉も、ロマンティックなものになつていたのかも知れないが、
今は、違ふ。

その「静かだな」は、明らかに、気味の悪さを示す言葉であつた。
話をやめたから、というのではなく、急に、何もかもが息をひそめるように、一斉に静まり返ってしまったのだ。——いや、人々は
相変わらず騒いでいるだろう。

だが、風も波も、急に吹き、自然の奏でる音の全てが、いきなり、
黙り込んでしまったのだ。

もちろん、それは、二人の勘違いであつたのかも、知れない。
部屋を出て、デッキに上がってみれば、風も波も、さっきまでと

同じようにあるのかも、知れない。

急激に沈んだ太陽のせいで、そんな風に思うのかも、知れない。だが、何かが違う、と思わずにはいられなかった。

「海の上では、風が凧いだら、波も静かになるんだらう。朝凧とか、夕凧とか、色々あるからな」

何かが違う、と思いつながらも、魁は、軽い口調で、そう言った。

「今は、朝でも夕方でもないぜ。それに、海が静まり返るのは、嵐の前触れ、とか言うじゃないか」

龍生は、納得しない、とでも言うかのように、食いついて来る。

「嵐が来る、なんて予報は出ていなかったさ」

「本当に来るとは言っていないさ。だけど、この大型客船は、群島や岩礁を縫うように航海してるんだぜ。もし、嵐が来て、岩礁にでも打付かったら、どうなると思う？ 船底をやられたら、一巻の終わり、だぜ」

海の中に隠れている大岩は、その言葉が冗談でないほど、恐ろしいものなのだ。特に、大型船の場合、沈む時に渦を起こすため、泳げるものでも、その渦に飲み込まれて、まず助からない。

「ちゃんと、婚約者を保険の受取人にしてあるのか？」

飽くまでも冗談で済ませようとするかのように、魁は言った。

ここで、そんな心配をしても、どうにもならないのだ。それに、二〇〇〇人を越える乗客がパニックを起こせば、どうなるかは、目に見えている。

「何かあれば、船員の方が早く察して手を打つさ。俺たちがオロオロと考えている間に、な」

窓の外の眺めが変わったのは、その時であった。

「何だ、あれは？」

窓の外が、ほんのりと明るくなっている。

そして――。

そして、龍生の視線の先には、蒼く仄光る霧が、厚い壁のように押し寄せて来ていた。本当に、押し寄せる、という迫力で、船の方へと近づきつつあったのだ。

まるで、空を飛んでいる中、雲の中に入ろうとしているのではないか、という錯覚を起こさせるほどに――それほどに、一寸先も覗けない、深く分厚い、霧の塊が。

霧の塊が――。

恐ろしい化け物のように、とてつもない圧迫感を持って、押し寄せて来る。――いや、この辺りの人々には――海をよく知る人々には、何の変哲もない、ただの霧なのかも知れない。

だが、普段、東京という味気無い都会に住み、霧といっても、一〇メートル先まで充分、見渡せるようなものしか見たことのない二人にとって、突如、海に現れたその霧は、とてつもなく恐ろしいものであった。

「海の霧って……こんなに蒼く光るのか……？」

呆然と目を見開きながら、龍生が言った。

その思いは、魁も同じであった。

その霧は、確かに、光っていたのだ。蒼く、仄かに――もっと言うなら、薄気味悪く。

背筋に、震えが走るのを、感じていた。

全身が、いつの間にか、鳥肌立っている。

寒いのだ。キャビンは、空調も整えられている、というのに、それでも、寒い。

もちろん、気分的なものも、あるのだろう。

だが、何となく、この寒さは、その霧のせいではないのか、というような気も、していた。

霧は、今やすっぱりと、船を蒼く包んでいる。

船内アナウンスは、その霧について、何も言わない。だから、不安になる必要もないのだろう。

だが――。

だが、それでも……。

シャツ、と龍生が、カーテンを引いた。

顔色は、どことなく蒼冷めている。

「都会の人間には、こんな霧は心臓に悪いぜ」

と、気を紛らわすように、口を開く。

キャビンにいてさえ、息が詰まりそうになるような霧なのだ。

とてつもない――恐怖と呼べるようなものが、体中を這っているのも、解っていた。

「風がないのに、何で霧が流れて来るんだ？」

龍生が、黙っていたられない、とでもいうように、魁を見上げた。

「……風はちゃんとあるのさ。きつと、この霧を確認して、船員が船の速度を落としたから、風が止まって、波が凪いだように思えたんだろう」

それが気休めであることは、魁自身、解っていた。

あの霧は、確かにどこか変であったのだ。人に言くと笑われてしまいかも知れないが、異質のものだ、という気がしてならなかった。風がないのに、あつという間に船を飲み込んでしまったスピードも、数センチ先も見えてとれない、あの厚さも。そして、何より、蒼く仄光る、あの不気味さ……。

海は相変わらず、静かなままである。

船内スピーカーも、ただ沈黙を守っている。

黙っていると、気が狂いそうになるような時間であった。

「あの霧、随分早く流れてたよな」

龍生が言った。

「ああ。きつとすぐに晴れるさ」

本当に、そうなのだろうか。

あの霧は、すぐに晴れるのだろうか。

蒼く光る、薄気味悪いあの霧は。

「音楽聴こうぜ、音楽」

魁の携帯に、小型のスピーカーを取り付け、龍生が言った。

その手が震えていることは、魁にも見えていたが、見ていないフリをして、黙っていた。

スピーカーを通して、魁の好みであるジャズ・ピアノの音が、部屋に広がる。

音のある世界が、これほど安心できるものである、と、二人が心の底から実感したのは、この時であった。

どちらも、カーテンを開けて、窓の外の様子を確かめてみようとは、思わなかった。ただ、時間が流れるのに、任せていた。

霧は——流れているだろうか。

それともまだ、この船を包んでいるだろうか。

互いに、その話題を口にするのは、避けていた。

見た者でなければ解らないだろうが、本当に、薄気味悪い霧であつたのだ。

不意に、スピーカーから流れていた音楽が、止まった。

二人は、ハッと息を止めて、互いの顔を見合わせた。

「バッテリーが……切れたみたいだぜ、魁」

多分、そうなのだろう。ただ電池が切れてしまっただけのことなのだろう。

だが、普通、少し音が小さくなったりしてから、音楽が聞こえなくなるものではないのか。

どちらともなく、そんなことを考えていた時、不意に、コンコン、とノックが届いた。

それは、今の二人にとって、とてつもなく高い響きを持つ音のように、聞こえた。

顔を見合わせ、それから、ドアの方へと、視線を向ける。

ノックは、さらに大きくなって、二人の耳へと飛び込んで来た。

その向こうに、化け物がいるのだ——そんな気さえ、していた。

——いや、間違いなく化け物だ、と思っていた。さっきの霧に運ばれて来た、とてつもなく恐ろしい化け物が、ドアの向こうにいるのだ。だから、決してそのドアを開けてはならないのだと。

二人は、じつと息を殺していた。

ノックは、諦める様子もなく、続いている。それも、段々、大きくなっている。

そして——。

「魁くん！ いるんでしょ、魁くん！ 居留守を使っても無駄よ。」

さつき、魁くんの好きなジャズが聴こえたんだから」

ドアの向こうから聞こえたのは、すっかり酒でいい気分になっているらしい、響子の声であった。

「……やっぱり、化け物だ」

そう呟いたのは、果たして、どっちであつただろうか。

とにかく、相手が響子であると解つて、二人は心の底から、ホッとしていた。そして、仕方なくドアを開けた。

居留守がバレしてしまった以上、本当に仕方なく、である。

音楽を聴こう、と言つた龍生を、魁が睨みつけていたことは、言うまでもない。もっとも、あの場合は、音楽で聴かけなければ、本当に耐えていられない状況であつたのだが。

「あーっ！ 龍生くんまで、こんなところにつ。いつの間にか二人していなくなつて——。せつかく豪華客船でクルーズを楽しんでる、つていうのに、遊ばなくちゃ意味がないじゃないの」

ドアが開いた途端、響子が——真弓も、目を吊り上げて——それでも甘えるように、目の前の魁にしがみついた。酒の勢いも、あつたのだろう。——いや、素面しやうめんでも同じことをしていただろうか。

酔つ払つた女、というのは、色っぽいところもあるのだが、さっきのあの霧を見た後では、そんな気分にもなりようがなかった。

「おまえら、あの霧を見なかったのかよ」

龍生が言つた。

「霧？ 何、それ？ 霧が出たの？ 夜の霧つて、ロマンティックで、素敵だわア……」

女二人は、そう言つて、またキャッキヤツとはしゃいでいる。

どうやら、バーにいた彼女たちの目には、あの霧が映つていなかったらしい。

龍生は、シャットカーテンを引いた。

「これがロマンティックな霧かよ」

と、窓の外を、二人に示す。が、そこにはもう、霧など破片かけらも残つていなかった。

響子と真弓は、ポカン、と暗い海を見つめている。

きつと、それで良かったのだろつ。あんな霧など、見ずに済んで良かったのだ。

もちろん、霧を見せようとしていた龍生には、あってくれた方が、まだ格好がつくものであっただろうが。

「大間拔けだな、龍生」

魁の軽口も、霧が消えていたからこそ、口に出来たものであった……。

「さつきの夫人、どうだったんだ？」

人いきれで疲れ、用意してもらった部屋のベッドに寝転がりながら、エリ阿斯は訊いた。

そのゴロゴロとした姿は、間違いなく十一、二歳の子供のものである。

「ただの疲労か何かでしょう。ご主人から離れて、少しお休みになれば、気分の悪さも収まるかと」

皮肉な視線で、オーギュストは言った。

「へエ。——で、その主人って？」

「ヘル・バーレンです」

「……なるほど。おじいさまも、その男のことは嫌っていた。

夫人の話までは聞いたことがないけど——。随分、年の離れた夫婦じゃないか。どう見てもあの夫人は、三十代だ」

バーレンは六十歳前後の年であるはずなのだから、ざっと計算しただけでも、かなりの年齢差がある。

「他所のご家庭のことに興味を持たれるのは、どうかと思いますが

——」

「おまえは、秘書の身分で、ぼくに指図までするのか、オーギュスト？」

冷たい眼差しで、エリ阿斯は言った。

「……。申し訳ございません。——あの夫人は、両親の借金の代わりに、バーレン氏に嫁がれたようなもので、バーレン氏にとっては世間体のために必要な細君でもあったのでしょう。バーレン氏は一度、離婚なさっていますし、もうそんな体裁の悪いことも出来ないでしょうし——かといって、いつまでも離婚された（・・・）夫のままでは、業界でも形見が狭いでしょうから」

普通なら、十一、二歳の子供に聞かせるような話ではなかっただ

ろつが、オーギュストは、主人たる少年の命令のままに、そう言った。

「ふーん」

と、エリアスは、変わらずベッドに寝転がっている。

何を考えているのか解らない少年かも知れないが、それでも、今この場に限っては、オーギュストにも、エリアスの考えていることは、解っていたに違いない。

「……あなたのお母様の方が、美しいブロンドだったと記憶していますが」

オーギュストは言った。

エリアスの碧い瞳が、持ち上がった。ある意味では、少年らしい瞳であつたのかも、知れない。

「余計なことばかり言う奴」

フツ、とオーギュストは、鼻を鳴らした。

わずか十一、二歳の子供が、母親を恋しがつたところで不思議はないのだ。たとえ、何一つ想い出がない母親であろうと――。いや、何一つ想い出がないからこそ。

「お召しものがシワになります。お休みになられるのなら、上着を――」

「さあつ、起きよ」

どこまでも、人に逆らう少年である。普通なら、殴りつけたくなるほど憎らしい子供であるのかも知れないが、オーギュストは何も言わなかった。

フツ、と窓の外が暗くなったのは、その時であつた。

「え？」

と、本当に声を上げてしまうほどに、急激に陽が暮れたのだ。――いや、きつと徐々に暗くなり始めていたのだろつが、話をしていたせいで、それに気づいていなかったのだ。

だが、もうそんな時間であつただろつか。

奇妙なほどの静けさが、その暗闇の中には、渦巻いていた。

海がすっかり、凧いでしまっている。

風も、あるようには、思えない。

「嵐でも来るのかな」

いつもと違う海の様子に、エリアスは、少し小さな声で、呟いた。以前にも一度、これと似たような海を見たことがあるのだ。多分、あれは、祖父——亡きガラス王に連れられて行った、イギリス海峡イングリッシュ・チャンネルのことではなかっただろうか。

静かに凧いだ海を見て、亡きガラス王は、

『嵐が来るな』

と、呟いたのだ。

そして、その言葉の通りに、嵐は、来た。

幼いエリアスには、その言葉を呟いた祖父が、とてつもなく偉大な人物に思え、尊敬したものである。

だが、今のこの静けさは、あの時のものとも、どこか違っているような気が、していた。

どこか、と言われたところで解らないが、ふと、そんな気がしたのだ。

「予報では、何も言っていないんですけど……」

言っていれば、今日のパーティも、取りやめになっていたはずである。海の天候は気まぐれ、とはいえ、嵐が来る、という予報を見逃すはずもないだろう。

その霧は、いつの間に、と思うほど、気がついた時には、もうクルーザーの直前にまで、迫っていた。

分厚い——一寸先も見えないような、霧である。

そして、その霧は、不思議なほど蒼く光っていた。確かにその霧は、自らが発光体であるかのように、ぼう、と蒼白く光っていたのだ。

不気味な霧であった。

突然、現れたようでもあるし、足音を忍ばせて、近づいて来たようでもある。

「霧が……光ってる……」

エリアスがそう言った頃には、もう霧は、クーラーをすっぽりと包んでいた。

濃く、厚く、息が詰まりそうなほどの圧迫感を持って。

「クーラーの光の加減で、そう見えるのでしょうか」

オーギュストは言った。

だが、その肌には、隙間なく鳥肌が立っている。

「——大人には、そう見えるのかい、オーギュスト？」

「——」

「少なくとも、子供のぼくには、そうは見えない。この霧は、確かに自分で発光している。——もっとも、大人になれば、そんなことは恥ずかしくて口に出来ないのかも知れないが」

冷ややかな視線で——それでも、身震いをするように体を縮めて、エリアスは言った。

その身を駆け抜けているものは、確かに、恐怖、と呼べるものであった。それも、とてつもない類いの、言いようのない。

息が詰まる、のだ。

霧など入り込んで来るはずのないキャビンにいても、胸を圧迫されているように、息が詰まる。

だが、たかが霧に、そんな風に怯える必要などないはずなのだ。

本当に？

本当に、そうなのだろうか。この霧に怯えなくてもいい、というのだろうか。この霧から逃げなくてもいい、と。

少なくともエリアスは、この霧が漂う中、デッキには上がらない方がいい、と思っていた。一寸先も見えない霧の中で、海に落ちる危険性があるから、というのではなく、もっと他の——訳の解らない恐怖のために。

「これだけ深い霧なら、デッキにいる人間が、一人くらい誤って海に落ちて、不思議じゃないな。全く前が見えないんだから、慌てて動けば、落ちもする。特に、ぼくみたいな子供なら、誰もがそう思っただけで納得するだろう。大人のように、落ち着いて行動が出来なかったのだと——。ぼくをデッキに連れて行って、突き落としてみるかい、オーギュスト？　今なら、おじいさまの時と同じように、事故死で片付けられる」

エリアスは、強かな眼差しで、オーギュストを見上げた。

オーギュストは、フツ、と瞳を細め、

「あなたが、霧の中で盲滅法、動き回られる方とは、思えませんので——。誰も事故だとは思ってくだらないでしょう」

「じゃあ、今回はやめる？」

これが、わずか十一、二歳の子供の言葉である、というのだろうか。

オーギュストには、ただ苦笑を零すしか出来ないものであった。

「おじいさまの孫だから、って、おまえは、ぼくにまで支える必要なんかないんだ」

「……ダールクビスト様は——大旦那様は、生前、こう言っておいででした。『おまえが共に死ぬべき相手は、この私ではない。おまえは、私が死んだ後も生き残り、エリアスを——あなたを守る努めがあるのだ』と——。私が死ぬ時は、あなたを守り切れなかった時なのだ」

「ぼくは、おじいさまから、そんな言葉を聞いたことはない」

「承知しております。——冷えて参りました。もう少し室温を上げますか？」

ゾクゾクとする寒気を、気温の変化のせいにするかのように、オーギュストは訊いた。

「おまえみたいな年寄りでもないのに、寒いもんか」

エリアスは、つん、と鼻を持ち上げて、そっぽを向いた。
憎らしい限りの、対応である。

それでも――。

それでも、オーギュストは、

「……お言葉ではございますが、私はまだ、四九歳です」

その男にも、やはり、年齢はあるのだ。それも何だか、妙な気がした。――いや、今なら、そう妙ではないかも知れない。この気味の悪い霧の中では。

「何歳であろうと、おまえが第一容疑者であることに変わりはないさ」

霧は、晴れる様子もなく、立ち込めていた……。

口の中に、男たちの精液の味が、残って、いる。

体中に汚液を塗りたくられ、何度も醜い欲望を突き立てられ、下肢の狭間から大腿部まで、白濁した液が伝っている。

涙は、いつ止まったのか、解らない。——いや、今も止まっていないのかも、知れない。

乳房は、唾液と精液で濡れ光り、余すところなく、男たちの欲望の色に、染め変えられている。

口の中で、何度、欲望を受け止めたことだろう。

柔らかい葩の中で、何度、欲望を受け止めたことだろう。

結い上げた髪は乱れ、打たれた頬は、まだ熱く痺れている。

これが、妻への仕打ち、だというのだろうか。ただ、気分が悪くて休みたい、と言ったことへの仕打ちだと……。

マルセ・バーレン夫人は、ベッドを降りて、ただ無気力に、立ち上がった。

鏡の中に、惨めな貴夫人の姿が映っている。もちろん、それが自分の姿である、ということは、マルセには最初から、解っていた。

そして、死にたい、と思ったのも、その鏡の中に映る、自分の姿を見た時であった。

こんな惨めな思いをして生きるよりも、死んだ方が、ずっとマシだ、と思ったのだ。

今、マルセが死を選んだところで、慈悲深い神々は、きっとお怒りにはならないだろう。そして、夫のバーレンは、気に留めもしないに違いない。

マルセは、ガウンを羽織ることもせずに部屋を出て、男たちの欲望に塗れた姿のまま、静かなデッキへと、足を向けた。——そう、静かであった。陽も、いつの間に暮れたのか、と思うほど、何の前触れもなく、沈んでいる。

もちろん、あの部屋で男たちに凌辱を受けていたマルセには、いつ陽が暮れたのかなど、知りようもないことであつたのだが。

デッキは、不思議なほどに、静かであつた。風は少しも流れず、海は湖のように、静まり返っている。

そして、突然、目の前が明るくなった。

陽が顔を出したのだろうか——マルセはそう思つて、顔を上げた。だが、そこには、白夜のもたらす白い光ではなく、蒼く仄光る霧が、あつた。

霧が——光っているのだ。しかも、奇妙なほどに、蒼白く。

急に、寒さが肌を犯した。

その寒さが、目の前にある霧がもたらしているものであることは、容易に知れた。

だが、今のマルセには、それも、どうでもいいことであつた。この惨めな姿を隠してくれる霧は、心地よいものでさえあつたのだ。

蒼く仄光る不気味な霧は、すぐに、マルセの体をすっぽりと飲み込み、ただ蒼白い世界だけを、見せていた。

男たちの生臭い精液の匂いよりも、ずっと楽に呼吸が出来る空間であつた。

何故、蒼く光っているのかも、海がこれほど静まり返っているのかも、さして気にはならなかった。

マルセは、霧に包まれるまま、長くその場に立ち尽くしていた。声が、聞こえた。

「クソッ！　何なんだ、この霧はっ。自分の手も見えないじゃないか！」

他にも、デッキに出て来ている人物がいるのだ。声からしても、男であろう。

その男も海に落ちてしまえばいい、とマルセは、思った。

この霧が、そんなことを思わせた訳では、ない。あの男たちが、今のマルセに、そう思わせたのだ、多分。

「……関係ないわ。私はもう死ぬんだから」

マルセは、口の中で、呟いた。

死ぬ、と決めてしまうと、心は意外なほどに、楽だった。この薄気味悪い霧のことも、きれい、と思うことさえ出来ていた。たとえば、それが狂人の持つ心であろうと。

もう少し、この霧に包まれていたい——マルセはそう、思っていた……。

「あーん、また負けちゃったわ」

高級感溢れるカジノの中で、深見響子は、引き上げられて行くチップを前に、天を仰いだ。

他社と豪華さを競い合う大型客船の中のカジノといえど、賭け金はそう高くもないのだが、勝負ごと、というのは、勝つ積もりでやっているため、負けた、となると、カッ力するもので、響子の場合も例外ではなく、そのカッ力に任せて、賭け金は、あつと言つ間に数万に上っていた。

「ちよつと頭を冷やして来るわ」

それが賢明な判断であつただろう。

響子は、傍らにいる真弓にそう告げ、外の空気を吸いに、デッキへ上がった。

夜の短い今の季節、すぐにも陽が昇り始めるはずなのだが、まだ外は、暗いままに沈んでいる。

仄明るい白夜の中、最上階のデッキから眺める海や群島の姿は、幻想的なほどに美しいはずであつた。――はずであつた、というのは、船に乗った当初は、ワクワクとして、デッキにも上っていたのだが、その後は、プールやサウナ、クラブ、バー、カジノ……と、船内での遊びが中心になり、一步も外へ出ていないためである。

「もつと風があつて気持ちいい、と思つてたのに、何だか肌寒いだけで、すっきりしないのね……」

人気がないデッキを見渡しながら、響子は独り、呟いた。

陽のない時間は、景色が見えないために、好き好んでデッキに上がつて来る人間もいないのか、それとも皆、遊びに夢中になって、自然に浸ろう、という気もなくなっているのか、辺りに人影は見当たらなかった。――いや、広いために、全てを見渡せる訳ではないが、少なくとも、目につく範囲には、誰もいない。もつとも、物陰

では、恋人たちが、ロマンティックなムードに浸っているのかも知れないが。

「恋人、か……。やっぱり、大学時代から、魁くんが一番、素敵よねエ……」

龍生は、どちらかというところ、年増のマダムや、キャリア・ウーマンに可愛がられるタイプで、同性にも人気があったのだが、魁は、そういうタイプではなく、正当な——と喋っているのかどうかは解らないが、女生徒の憧れの的であり、同性には、一目置かれるタイプであった。早く言つと、龍生は「おねーさま」たちに遊ばれるタイプで、魁は、真剣な恋愛を求められるタイプである。

その怜悧に整った面貌もさることながら、いつも何らかの賞に選んでいた絵の才能も、女生徒が魁に憧れる所以であったのだ。仲間内では、砕けたところもあり——いや、それでも、はた目には、近寄りがたい冷たい人間、という印象が強かっただろうが、話をしてみると、それが正しいと——いや、ただ無愛想なだけだと解つたに、違いない。まあ、どっちにしても、いい性格ではないのだが。

普通の女なら、その魁の無愛想さに、自信を失くして、

「本当に私のことを愛してくれているの？」

と、詰め寄つて、魁をうんざりさせていたに違いない。

そして、響子と真弓は、そういうタイプではなかった。自分に自信があった、ということもあるし、何より、あの頃、魁は、響子や真弓の一番のライバルであったのだ。だから、魁も、響子や真弓とは気楽に付き合つてくれていたのだろう。

龍生は、昔から誰にでも可愛がられるタイプであったから、魁も龍生を気に入っていたに違いない。

克也は——。

克也は……そう。言うなれば、自信家の四人を、満足させてくれる存在であつたのかも、知れない。こいつには勝つてゐる、と思わせてくれるタイプの——。だからこそ、プライドの高い四人が集まつていても、大きな揉め事にもならず、卒業まで気楽に付き合つて

来れたのだ。

学生時代は、誰もが自分の才能を信じていたし、自分こそ、天才と呼ばれるべき人物なのだ、と思い込んでいた。

だが、結局、誰一人として、その名声を手に入れることは、出来なかったのだ……。

「馬鹿よねエ……。一番、才能がなかった克也くんだけが、今も絵筆を握っているんですもの。さつさと自分の才能のなさに気づいて、絵筆を折ればいいんだわ。学生時代だって、一度も賞を取ったことがないクセに」

響子は、忌ま忌ましさを露に、吐き捨てた。

「それにしても……。生臭いわねエ……。景色が見えないと、海ってこんなに、魚臭さが鼻につくものなのかしら」

コト、っと背後で物音がしたのは、その時であった。

響子は、ハツとして後ろを、振り返った。暗く人気のないデッキで、女が襲われる、ということは、珍しくもない筋書きなのだ。

だが、そこには――。

そこには、

「克也くん……」

そこには、克也が、立っていた。

行方不明だった克也が、何故、ここにいるのか、という疑問よりも、さっきの悪口を聞かれてしまったのではないか、という心配の方が、響子の胸には過っていた。だから、

「ずっと、そこにいたの？」

と、無理に笑顔を作って、問いかけたのだ。

だが、克也は、無表情の見本のように、気味が悪いほど表情を変えず、ただその場に突っ立っていた。——いや、表情が変わらなかったのではなく、響子が勝手に、変わらないだろう、と思っていたのだ。何故、と訊かれたところで解らないが、今の克也には、そんな雰囲気は漂っていたのだ。

だが、実際は、克也は、笑った。まるで、響子の作り笑いに合わせるかのように、どこか冷めた眼差しで。

それでも、愉しそうな笑みであった。

不気味——そう呼ぶことも出来たかも、知れない。安心できるような類いの笑みでは、なかったのだ。

「……克也くん？」

響子は、少し引きつるようにして、呼びかけた。

克也の長い髪は、まるで、海を泳いで来たかのように、じつりと濡れて、湿っている。——いや、サウナの蒸気に当たったように、と言っべきだろうか。

だが、何となく生臭い匂いが漂い、海で泳いでいたのか、という印象を持ったのだ。首筋や顔に張り付く髪も、肌には張り付く洋服も。だが、克也が海で泳ぐはずもなく、服を来たまま、サウナへ入るはずもない。

そういえば、さつき、魁と龍生が、霧が出た、と言っていないかっただろうか。もちろん、たかが霧で、そんな風に髪や服が湿ったりすることなど、あり得ないだろうが。

「な……何を黙ってるのよ！ 言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ。私は、思ったことを言っただけだわ。あなたと付き合う積もりも、結婚する積もりも——」

「解ってるさ」

克也は、優しい表情で、笑みを返し、

「ああ、お腹が空いた。何か食べて来よう」

と、キャビンの方へと翻って行った。

確かに、優しい表情でそう言い、別段、傷ついた風もなく、あっさりとキャビンへ入って行ったのだ。

背筋が凍りつくほどに優しい表情で、身震いが出るほど、平坦な口調で。

「何なのよ……あれ……」

響子は訳が解らず、呆然とその場に立ち尽くしていた。

克也が行方不明だったことを思い出したのも、その時であった。

もちろん、それを思い出した響子が、すぐに皆の元へ伝えに走ったことは、言うまでもない。

魁と龍生が、重たげに頭を抱えていたことも——いや、抱えるであろつことも……。

その頃、船内のレストランでは、何枚もの皿を、あつと言つ間に平らげて行く、奇妙な客の姿に、他の客やスタッフたちが、目を丸くしていた。

鳥肉、羊肉、牛肉、トナカイの肉はもちろん、魚も甲殻類も、どんな胃袋をしているのか、と思うほどに、口の中へと詰め込んで行く。

「……もっと新鮮でうまい肉が喰いたいな」
客は、ぽつりと呟いた……。

ガタン、と冷凍庫の方から音が聞こえ、調理場のコックは、その不審に、眉を寄せた。

この超豪華クルーザーの中では、集まっている要人に、何一つ失礼がないように、と、ネズミ一匹、見逃してはいないはずなのだ。ディナーの時間も過ぎて、やっと落ち着いた今、肉や魚を入れてある冷凍庫に用がある者など、いはしない。——いや、そこにいるのが人間なら、まだ構わない。ネズミやゴキブリでもいようなものなら、このクルーザーの持ち主、バークマンに、解雇されても文句は言えないのだ。

どうかネズミでありませんように、と祈るような思いで、コックは、音のした方へと、足を向けた。

何かが動いている気配を、感じる。

クチャクチャと、肉を咀嚼して飲み込む音も、聞こえて来る。

ネズミではないのだ。

コックは、ホッ、と胸を撫でおろした。

だが、こんなところで、誰が食事をしている、というのだろうか。各界の要人しか乗っておらず、スタッフも、厳しく躰られた人員ばかりである、というのに。

新たな不審を胸に抱き、コックは、その人物を隠している大きな調理台を回り、冷凍庫の前を、覗き込んだ。同時に、瞳を見開いた。「な……っ」

こんなことがある、というのだろうか。

冷凍庫の前には、全裸の——下着すら身につけていない、貴婦人がいた。しかも、その貴婦人は、冷凍庫から出した生肉を——カチカチに凍りついて、岩のように堅くなっているその肉を、容易く咬みちぎっては、咀嚼して喉に通しているのだ。

信じられる光景では、なかった。それでも、コックはまだ、ネズ

ミでなくて良かった、と思っていた。

貴婦人は、味の品定めをするように、色々な肉を齧っては、存分に舌の上で味わって、キロ単位の肉を、見る見る小さく変えている。まるで、厚く覆う深い霧が、あつと言う間に船を飲み込んで行くように。

コックの足は、その異様な光景を前に、もはや動かしようもなく凍っていた。

冷凍肉をそんな風に喰らう全裸の貴婦人を見て、声をかけることの出来る者など、いはしなかっただろう。

「……もつと新鮮なお肉が食べたいわ」
貴婦人は言った。

ゾクツ、とするような、生暖かい——血臭すら漂うような、言葉であった。感情もなく、ただ食欲だけが残っているような——いや、全ての感情が、食欲のためだけに使われているような。

異常、としか呼べない眩きであった。

コックは、全身が総毛立つような気味の悪さと、堪えようもなく込み上げて来る吐き気に、口を押さえて、一步後ろに、退いた。刹那、調理台に足が当たり、ガタン、と大きな音を立てた。

全裸の貴婦人が、その音を聞いて、振り返った。

血がついていないのが不思議なほどの、表情、であった。

笑っていた。心底愉しそうに——それだけに、不気味でしかない、どこか冷めた表情で。

彼女を知る者なら、きつとこう言っただろう。

これほど愉しそうに笑う彼女を見るのは、初めてだ、と……。

「こつ……ここで何をしているんだっ」

コックは、やっと喉の言葉を、振り絞った。

何故、そんな問いかけが出て来たのかも、不思議だった。

逃げれば、良かったのだ。もちろん、逃げなくては、とも思っていた。

だが、相手はか細い貴婦人で、何か危害を加えられる、とは、す

ぐに思いもしなかったのだ。それに、足が竦んで、動けなかった。

「男……。そうね。男の肉がおいしそうだわ……。人間の男の肉が……」

貴婦人が、ゆっくりとした動きで、立ち上がった。全裸の自分を恥ずかしがるでもなく、舌舐めずりさえ、して。

湿った髪が首筋から胸に張り付き、余計に、その姿を恐ろしく見せている。

だが、何故、湿っているのだろうか。——いや、全裸でいるのだから、シャワーでも浴びていたのかも、知れない。それにしては、やけに生臭い匂いが漂っているが——いや、生肉を喰らっていたのだから、当然か。

そんなどうでもいいことを考えている場合ではないのだろうか、コツクの頭の中は、すでに混乱しきっていた。

「あなた、とてもおいしそうだわ……」

貴婦人が、言った。

生臭い匂いが、強くなった。

食べられてしまうのだろうか、あの冷凍肉のように——と、そんなことも、考えていた。

貴婦人の口からは、糸を引くような涎が、垂れている。

その口が、カッ、と限界以上に、大きく開いた。本当に、顔中が口になってしまったのではないか、と思えるほど、一気に大きく開いたのだ。

コツクは、ハッと我に返り、その「食欲」から逃れるように、翻った。確かに、足は逃げようとしていたのだ。

だが、翻ったそこには、調理台があった。

「うわあっ！」

強かにその調理台に体を打付け、コツクは、突っ伏すようにして、前のめりに倒れた。

頬に、生暖かいものが、落ちた。
涎、である。

「男をみんな食べてしまえば、この世界に男なんていなくなるわ…」

…」

コックの目には、大きく開かれた、赤い口だけが映っていた……。

「船が全く動かないそうです。原因はまだ判っていませんが、ただ潮に流されているだけの状態だとか」

明かりの消えた、ロウソクだけの暗い部屋の中で、オーギュストは、たった今、バーグマンから聞いて来た船の異常を、エリアスに告げた。

「なら、ヘリを呼べばいいだろ。パーティは終わったし、子供は寝る時間だし——。頭を使って考えろよ」

相変わらず、生意気な限りの返答である。

「無線も使えないそうで、ヘリの手配も適いません。発煙筒や、照明弾の類いも、全て駄目になっているそうで、救援を呼ぶ手段もないとか。——ボートでお帰りになるのなら、頼んで参りますが——。正し、モーター・ボートの方は使えず、ゴム・ボートしかないそうです」

その言葉に、冷たい一瞥が、持ち上がった。

「すぐにカツとなつて、大人げない奴」

エリアスは、言った。

すぐに、ではなく、オーギュストはよく耐えている方だと思えるのだが。

「ゴムボートがあるなら、おまえ一人で戻つて、ヘリを手配して来くれればいいだろ」

「……。私が一人で戻つても宜しいのですか？」

「構わないさ。ストックホルムまで、ゴムボートで戻れやしないだろうからな」

「私は、あなたをお守りすることが役目ですので、必ず帰り着き、迎えに——」

「それ以上付け上がって、ぼくを怒らせるなよ、オーギュスト。意地を張りたければ、他でやれ。ゴムボートで何十時間もかけて帰る、

なんて馬鹿馬鹿しいことを口にする前に、な」

エリアスは、子供のものではない眼差しで、冷たく言った。ある意味では、彼は、可哀想な子供であるのかも、知れない。

「……申し訳ございません。食料は、余分に積んであるそうですから、当分は困らない、ということです。私は、何か信号弾を作れるような薬品がないか、医務室の方を見て参ります」

オーギュストは、一礼を残して、部屋を出た。

あの霧が消えた後、しばらくして、船内の照明が全て消え、クルーザーも動かなくなってしまったのだ。まさか、霧のせい、ということもないだろうが、こんな故障の仕方は初めてだ、と船員たちは零していた。

今は、各所にロウソクが灯され、船内も明かりを取り戻しているが、それは、暗闇でない、という程度の明かりに過ぎず、近代化の照明に慣れた現代人には、自由に歩き回れる、というほどの明かりでは、なかった。

オーギュストは一応、懐中電灯を持っているが、それも、行く手の全てを照らしてくれる訳では、ない。

そして、何かが違う——そう思える静けさが、クルーザーの周囲を、取り巻いていた。もちろん、この暗闇のせいで、そう思えるのかも知れないし、船に異常が生じる前に見た、あの薄気味の悪い霧のせいで、そう思えるのかも、知れない。

人間というのは、精神的なことに、大きく左右されてしまうものなのだ。

蒼く仄光る霧と、突然止まった船、消えた照明——奇妙なものと、身動きの出来ない不安、先の知れない闇——そんなものが、人を恐怖に追い立てるのだ。

だが――。

だが、本当にそうなのだろうか。肌に感じる、この得体の知れない恐怖は、本当に、人間の心理的恐怖から生み出されているものなのだろうか。

どこかで何かが起こっている——そんな気は、しないか。それも、すぐ近くで……。

妙に生臭い匂いが、した。潮の匂い、とか、魚の匂い、というものにも似ているが、それらとはどこか、違っている。

オーギュストは、鼻をつくその匂いに、眉を寄せた。

懐中電灯の光を、少し広く動かしてみよう。

影が、あった。——いや、姿も、廊下の先に見て取れる。

全裸の貴婦人が、壁に凭れかかるようにして、倒れているのだ。

そして、オーギュストは、その貴婦人に見覚えが、あった。

「フリユ・バーレン！」

あの時、パーティ会場で、気分を悪くして倒れた、バーレンの夫人、マルセである。

「どうかなさいましたか、フリユ・バーレン？ この姿は、一体——」

オーギュストは、マルセの傍らに膝をつき、意識を確認するように、肩をつかんだ。

マルセの結い上げてあった髪は、乱れて解け、そして——何故か冷たく湿っていた。もちろん、今はそんなことを気にしている時ではないのだが。

「フリユ？ 大丈夫ですか、フリユ？」

その呼びかけに、マルセがゆっくりと、顔を上げた。

妙に、蒼白い面であった。それに、異様に生臭い匂いが、鼻をついた。

血臭、ではないだろうか。唾液が凝固していくような、そんな、血独特の匂いが、混じっている。

だが、マルセが怪我を負っている様子は、どこにもなく、白い裸体には、血の一滴すら、ついてはいなかった。

「男……」

マルセが言った。

生臭い匂いは、その口の中から生じていた。

「男？」

オーギュストは、その言葉に——いや、マルセの面に尋常でないものを感じて、眉を寄せた。——いや、尋常でないことは、全裸でこんなところに倒れていたことからしても、容易に知り得る。

だが、そんなことではなく、もっと異様な——普通の人間ではない、というような恐怖を感じていたのだ。

「男……なんて……みんな喰い尽くしてやるわ！」

突然、マルセが牙を剥き、カツ、と大きく口を開いた。——いや、牙などなかったかも知れないが、オーギュストの目には、そう見えただのだ。

オーギュストは、反射的に飛びのいた。

秘書として、そして、ボディ・ガードとして、日頃から鍛えている体である。危険の前では、体も、考えるより先に、動いてくれる。だが、マルセの動きも、早かった。獣のように跳躍し、オーギュストを上から押さえ付ける。

「く……っ！」

凄まじいほどの力であった。

馬乗り、肩を押さえ付けられる中、オーギュストは、涎を垂らして口を開くマルセを押しつけようと、マルセの肩にかける手に、力を込めた。

吐き気を催すような生臭い涎が、ダラダラと糸を引いて、零れている。

正気では、ないのだ。

彼女は確かに、狂っている。人間を喰らおうとするなど、正気の人間が思いつくような考えでは、あり得ない。

それに、女とも思えないこの力は、あの気の弱そうな、しかも、顔色の悪い貴婦人の姿からは、想像も出来ないものであった。

だが、誰が彼女こんな風に狂わせた、というのだろうか。

もしくは、何が。

オーギュストは、身動きの取れない上半身を諦め、片膝を立てて、馬乗りになるマルセの背中に、蹴りを入れた。

膝蹴りを喰らったマルセが、前のめりに床へと、投げ出される。

もちろん、オーギュストは手加減をしたが——いや、しない方が良かったのかも、知れない。マルセは、大きなダメージを受けた様子もなく、立ち上がった。

彼女はもう、人間ではない、のだ——そんな気が、した。

少し手荒なことをしても、動きを封じてしまわなければ、喰い殺されてしまっだろう——そんなことも、思っていた。

「フリユ……。あなたは、人殺しなどしない方がいい」

オーギュストは、蒼黒い艶を放つ、ロイヤル・ブルーのコルト・パイソンを、脇のホルスターから、抜き取った。

その銃口を、マルセへと向ける。

だが、マルセは怯みもせず、食欲だけしかない獣のように、オーギュストへと襲い掛かって来た。

オーギュストは、ためらうことなく、トリガー引金を引いた。

だが——。

だが、銃は、カチ、っと小さな音を立てただけで、銃弾を噴く様

子は、全くなかった。

弾が一発も入っていないのだ。——いや、確かに入れておいたはずである。このクルーザーでのパーティに出席する前、ちゃんと確認しておいたのだ。こういう、要人ばかりが集まる、閉鎖された船上でのパーティは、それを狙った強盗に襲われる危険もあるために。

「まさか……」

オーギュストの目前には、大きく開いた口が、迫っていた……。

ロウソクの明かりに照らし出されるベッドの上で、エリ阿斯は、手のひらに握る、淡金の銃弾を見つめていた。

オーギュストの銃から、抜き取っておいたものである。

それを、一つずつ枕に並べ、

「オーギュストが殺した……殺してない……殺した……殺してない……」

と、花占いのように、呟きを、落とす。

実際、エリ阿斯は、オーギュストのことなど何も知らないのだ。生まれた時には、もう祖父の片腕として働いており、どこへ行くのにも、常に側に控えていた。

祖父が、彼を『オーギュスト』と呼んでいたために、エリ阿斯も同じように、呼んでいる。その名前以外のことは、素性も、家族も、何一つ知らない。また、訊いたことも、一度もない。

気がつけば、いつも側にいるような、そんな不思議な存在であったのだ。

「ニューヨークでもないのに、銃なんか持ち歩いて……。こんなものの、照明弾の代わりにもなりはしない」

エリ阿斯は、枕の上に並べた銃弾を、再び手のひらの中に握り締めた。

ドアの外に足音が聞こえたのは、その時であった。

コツ、コツ、コツ——と、腹が立つほど単調な歩調で、誰かが静かな廊下を歩いて来る。

普通、暗い場所を歩く時、人間というのは、つい速足になったり、或いは、一步一步確かめながら歩いたりするものだが、その足音は、ひどく単調なリズムを刻んでいたのだ。妙に苛立ちを覚えるような、全く変わらない足取りで。

そして、その足音は、エリ阿斯がいる部屋の前で、止まった。

多分、船内の見回りをしている誰かなのだろうが、止まった割りには、声をかけて来る様子がない。部屋の前で足を止めたのだから、何か声をかけて来るのが普通だ、と思えるのだが。

カチャ、とドアのノブを回す音が、した。

それも、普通の行動ではあり得ない。普通、ノックを置き、声をかけ、部屋の中の人間の了解を得てから、ドアを開けるのが常識である。

となると、ドアの前にいる人物は、そんな常識の通用する相手ではないのだろうか。——いや、オーギュストが部屋に戻って来た、ということも考えられる。もちろん、オーギュストにしても、ノックもしない、というのは、おかしいものなのだが……。

「オーギュスト？」

エリアスは、ベッドの上から体を起こし、少し訝しい思いで、光の届かない場所に目を凝らした。

だが、返事は何も、返らない。——いや、

「ああ、いてくれて良かった」

と、その人物は、ドアを開けて勝手に入り込みながら、そう言った。

「バーグマン氏は、子供の君は寝かせておいてあげよう、とおっしゃっていたが、これからホールで、船の故障についての説明があるんだよ。皆、不安になっているからね。君が寝ているようなら、オーギュストに聞きの来てもらおう、と思っていたんだけど——。彼はどこにいたんだい？」

ドアから姿を見せた人物は、部屋を見渡すようにして、そう訊いた。

「……。バス・ルーム」

エリアスは言った。

「そうか。じゃあ、どうするかな。君が聞きに来るかい？」

「……あなたは何故、このクルーザーに、シグルドおじさま？」

ドアの前に立っているのは、エリアスの伯父、シグルドであった。

「何故、とは厳しいな。ぼくはこれでも、ダールクビスト家の一員だし、貿易会社の社長だよ。ガラス王ほどの身分でなくても、パーティの招待くらいは受けるさ」

「……」

確かに、シグルドがパーティに呼ばれていても、何の不思議もないだろう。

何百人、という客人たちの中、シグルドの姿を見かけなかったのも、不思議ではないかも知れない。それでなくてもエリ阿斯は、常時、亡きガラス王の孫として、さまざまな人物に取り囲まれていたのだから。

それに、オーギュストが言っていたように、シグルドは、エリ阿斯の祖父や両親を殺せるような人物でもなく、今、エリ阿斯を殺せるほど、度胸があるとも思えない。——いや、度胸はともかくとして、自分が疑われないように、こんなところでエリ阿斯を殺す計画を立てることは出来ないだろう。

だとすると、彼は本当に親切だけで呼びに来てくれた、というのだろうか。

「……ぼくが聞きに行くよ」

エリ阿斯は言った。

「オーギュストに伝言を残して行くかい？」

「別にいい」

そう言つて、ドアの方へと足を向ける。

妙に生臭い匂いが、した。廊下から漂う匂いなのだろうか。さっきまで何の匂いもしなかったのだから、ドアが開いたせいで流れ込んで来たとしたか、思えない。

「ほら、暗いから気をつけて」

シグルドが、懐中電灯で、足元を照らす。

その時、また、廊下の先に、足音が聞こえた。シグルドと違って、その人物は懐中電灯を持つておらず、時々、ロウソクの側を通る時だけ、その明かりで顔が見える。

血塗れ、であつた。ダーク・スーツの肩の辺りが、特に赤黒く変色している。

「オーギュスト！」

エリ阿斯は、その人物の姿を認めて、声を上げた。同時に、血塗れの秘書の元へと、足を踏み出す。

「危ない——。こんな暗い中を走つたら、転んで怪我をするじゃないか」

シグルドの腕が、エリアスの行く手を遮るように、背後から胸に巻き付いた。

服が少し濡れているのか、その腕に抱きすくめられた瞬間、ひんやりとしたものを、エリ阿斯は感じた。

「怪我なんかするもんかつ。放せつたら！」

と、胸に巻き付くシグルドの腕を振り解き、オーギュストの元へと駆けつける。

オーギュストの体は、服の上から何かに切り裂かれたのか、しとどに血で濡れ染まっていた。

「オーギュスト、この傷は一体――」

「大丈夫です……。お部屋にお戻りください、エリ阿斯様……。ここは危険です……」

「危険？」

「はい……。現実とは思えないことが、確かに現実起こっています……。私のような大人にも、現実と認めるしかないようなことが……」

オーギュストの言葉は、エリ阿斯にはすぐに理解できるものではなかったが、それでも、流れる血と、オーギュストの懸命さは、理解できた。確かに、何らかの危険が迫っているのだ。このオーギュストに、傷を負わせることが出来るような、そんなとてつもない危険が。

「解ったよ。――シグルドおじさまが、ホールで、船の故障についての説明会がある、って言ってたけど、そっちの方はどうする？」

「私が行って参ります。あなたは、部屋から決して出ないようにしてください。シグルド様と一緒に」

オーギュストはそう言い、

「シグルド様、エリ阿斯様をよろしくお願いいたします。私は、他の方々に、危険を伝えに行かなくてはなりませんので」

と、離れて立つシグルドに、声をかけた。

「ああ。ちゃんと部屋に鍵をかけておくよ」

平坦過ぎるそのシグルドの口調は、普段なら、おかしい、と思えるものであったのかも知れないが、今のオーギュストとエリ阿斯には、注意を払うことが出来なかった。

「おまえも、傷の手当をしてからの方が――」

「大丈夫です……。それと、この銃をお持ちください。弾の込め方も、扱い方も、ご存じですね？」

弾の抜き方を知っているくらいなのだから、当然、込め方の方も

知っている。

「ああ、だけど——」

「マルセ夫人は……もう人間ではありません」

「え？」

「もし、私が戻って来る前に何かありましたら、ためらわず、この銃をお使いください」

オーギュストは、真摯な眼差しで、そう言った。

「……ぼくが弾を抜いたから、やられたのか？」

「いえ……。銃に頼ろうとした私の失態です。——部屋に戻られたら、すぐに鍵をかけて、他の誰も入れないようにしてください。私の考えが間違っていないければ、マルセ夫人一人ではないかも知れません。——後は、戻ってからお話しいたします」

「……解った」

エリアスは、ギュっ、と手の中のコルト・パイソンを握り締めた。子供の手には、重すぎると思える武器である。重量だけのことでなく、その銃が果たすであろう、役目も。

オーギュストが、安心したように、廊下の向こうへと歩いて行く。「さあ、部屋に戻ろう、エリアス。オーギュストは有能な男だから、心配いらない」

シグルドの手が、肩に触れた。

どこか生臭い匂いのする、湿りを帯びた手のひらであつた……。

「もう、どうなってるのよ！ カジノへ戻った途端、停電なんて――。真弓がどこにいるのかも解らないじゃないの」

一向に明かりの戻らない船内で、響子は、怒りを打付ける相手もなく、吐き捨てた。

すぐに元通りに明かりが灯るだろう、と思っていたのに、船内は、相変わらず暗いままで、各カテゴリーに船員が明かりを点けに回っているが、三万トンプラスの客船となると、それも、すぐに、という訳にはいかないのだ。

そして、停電についての説明も、一向に埒が明かないままで、『まだ何も解っていない』という説明しか受けていない。しかも、船内の放送が使えないために、それも、船員たちが、一か所一か所回って伝えている。

結局、停電の原因も解らず、いつになったから回復するのも解らず、明かりが灯るまで動かないでください、ということだけが、説明の全てであった。

そして、今、やっと、船内にロウソクの明かりが灯り、船のスタッフたちが、乗客の誘導を始めたのだ。

もちろん、二〇〇〇人を越える乗客であるから、すんなり、とは行かなかったが、そう酷いパニックもなく――まあ、火事や嵐ならともかく、ただの停電なのだから当然だろうが――乗客たちは、文句を唱えこそすれ、駆け回ることなく、各自、自分の部屋へと戻っていた。

響子もまた、同じである。

「それにしても、真弓、まだ戻って来ないのかしら……」

ツイン・ルームの、もう一人の滞在者は、未だ、船員に誘導されて来るでもなく、部屋に戻って来ていないのだ。

「まさか、一人で魁くんのところに行ってるんじゃない――」

ハタ、と思いついたその考えに、響子は、ベッドの上から、腰を上げた。が、その思いつきは、すぐに否定されることになった。

コンコン、と部屋にノックが届いたのだ。

恐らく、真弓が戻って来たのだろう。

「遅いじゃない、真弓。何してたのよ」

響子は、ロウソクの明かりを持ち上げながら、ドアの方へと足を向けた。

鍵を解除して、ドアを開く。

暗い中、すぐに顔を見て取ることは、出来なかった。まさか、相手の顔の真ん前に、ロウソクを持って行くことも出来なかったのだ。だが、すでに目が暗闇に慣れていたこともあって、そう間を置かずに、相手の顔を見て取ることが出来た。

男であった。

体つきからしても、それは何となく判っていたのだが、顔を確認して、響子は訝しい思いで眉を寄せた。

「まだ私に何か用なの、克也くん？」

と、冷たい口調で問いかける。

「お腹が空いてるんだ……」

克也は言った。

その口からは、とてつもなく厭な匂いがしていた。生臭い——湿気と血臭が混じり合っているような。

それに何より、克也が口にした言葉は、響子には、戸惑うしかないものであった。

「お腹が空いた、ですって？」

からかっているのだろうか、と思えるような言葉であった。

「生憎、ここはレストランじゃないのよ。さっさと出て行ってちょうだい」

と、ドアを閉じる——いや、閉じようとしたが、

「レストランの肉では満足できないんだ」

と、克也が、閉じようとするドアに手をかけて、グイ、とまた、

開
け
放
つ
た。

響子は、その時、初めて、目の前の克也に、恐怖を感じた。
正常ではない——そんな印象を、覚えたのだ。

まず、眼の輝き。

異形の獣のように、爛々と薄気味悪く、輝いている。欲望、というか、純粹な食欲、というか、目の前の「食事」を食べたくて仕方がない、といった顔付きなのだ。

「……克也くん？」

響子の声も、震えていた。

「魁には、もう喰わせてやったのかい？」

克也が強引に、部屋の中へと入り込む。

「ちよつと——」

「この脂肪の塊の乳房も、淫乱なあそこも、全部喰わせてやったんだろ？」

ダン——つ、と壁に強く叩きつけられ、響子は刹那、声を失くした。

頭が割れたのではないか、と思うほどに強く叩きつけられ、全身が瞬く間に痺れ出していたのだ。

しかし、克也の口調は、少しも怒りを含んでいない平坦なものであり、それが余計に薄気味悪さを感じさせていた。

「く……」

ポタ、つと床に、赤いシミが落ちた。

それは、壁に叩きつけられると同時に、床に落としてしまった口ウソクの明かりで、かろうじて、見えた。

鼻血、だろつ。

しかし、口ウソクはもう、消えかかっている。

それでも、その鼻血は、響子をカツとさせるに充分なものであった。

「何をするのよ、このキチガイ！ 皆があなたのことを、何て言ってるか知っているの？ 才能もないくせに、まだ絵筆を折っていない馬鹿だ、って言うてるのよ！ そんな人間を、私が相手にするとも思っているの？ フラれたからって、女に暴力を奮う男なんて最低よ！ 今度、私に手を上げたら、警察に——」

言葉の途中、今度は平手が、頬を弾いた。
「キャッ！」

響子は、床の上に吹き飛ばされた。それほどに、凄まじい力を持つ一撃であつたのだ。

立つ間も、なかった。

克也の足が、響子の顔の前に、迫っていた。
だが、克也がそこまでするなど、何故、響子に知り得たであろうか。

ガツつ、と鈍い音が、部屋に響いた。克也の靴が、響子の顔を蹴り上げたのだ。

声を上げる間もなく、続いて、顔を踏みにじられる。

「ひつ……やめ……」

ガツつ、ガツつ、と何度も、靴が顔を踏み潰す。

痛いのか、痺れているのかさえも、今の響子には、判らなかった。ただ、鼻が熱く、顔が酷く歪んでいるような気がしていた。

とてつもない恐怖が、体中を支配していた。

「あーあ、ひどい顔だな。こんな女に惚れてたなんて、笑い話にもなりやしない」

グチャグチャに潰した響子の顔を覗き込みながら、克也が愉しもうに、唇を歪めた。

無表情なその笑いは、この部屋の壁が笑っているようにも、見えた。——いや、見えていたのだろうか。この暗い部屋の中で。

響子の顔は、血塗れであつた。鼻の骨は折れ、唇は、その血で真っ赤に染まっている。歯も、もちろん、折れていた。

「さあ、足を開けよ。魁に喰わせてやったものを、オレも喰ってやるからさ」

「や……やめ……おねが……」

これ以上、何をされるのかも解らず、響子は、もう思い通りに動かすことも出来ない口で、懇願した。

克也の手が、響子の足を、大きく開く。本当に大きく、両足が耳にくつつくほどに。

響子は、声にもならない悲鳴を、上げた。

ゴリ、っという音がして、凄まじい痛みが股関節を駆け抜けた刹那、響子の目の前は白くなっていた。

克也の手が、下着を剥ぎ取り、女の柔らかい部分を、露にする。そして、その部分に顔を近づけ、舌でピチャピチャと舐め始めた。裂けた部分から滲み出ている血を、舐めているのだ。

だが、もう響子には、何も解らなくなっていた。自分の体が、どんな形になっているのかも、これからどうなっていくのかも。

克也の口が、大きく開いた。

それも、もう響子には見えないものであった……。

「おい、魁。真弓の旦那、部屋に戻って来ないんだけど、こっちに間違えて運ばれて来てないか？」

少し乱暴にドアを叩き、龍生は、中にいる魁へと、問いかけた。
カチャ、とドアが開き、

「暗くて危ないから、部屋を出て歩き回るな、と言われただろ」と、冷たい返事が、返って来る。

「いつまで経つても、やな性格」

「人を見て話をするだけだ」

「ムッ」

この暗闇の中でも、以外に、緊張感のない会話である。

「いないのか？」

今さら、と思うような問いかけであった。

「そう言っただろ。あいつのことだから、どこかで迷子になってるか、海に落ちて鯨にでも喰われているか——。ああ、真弓に喰われているかも知れないな」

龍生の方も、まだそんな冗談を口に出来る余裕があったのだ——
少なくとも、魁はその時、そう思っていた。

だが——。

「本当は……怖いのだ。——情けないだろ？ あ霧のことが、どうしても頭から離れなくて……な」

龍生は言った。

正直な人間なのだ、彼は、学生時代から。

そして、魁も口にこそしないものの、龍生と同じ思いであった。
薄暗い部屋の中に一人でいると、どうしても、あの霧のことが頭にチラつき、じっとしていられなくなってしまうのだ。

一人なのは、修一が戻って来ていない龍生だけでなく、同室の克也がいない魁も、また、同じである。

それに、龍生の話では、克也もこの船に乗っているらしいが、一向に部屋には姿を見せず、未だ、行方も判っていないのだ。

「何か、気味悪くないか？ 外はいつまで経っても明るくならないし、船の中は静かなままだし——。この季節は、太陽もあつと言う間に昇るはずだろ？」

「……。雲がかかって暗いだけさ。三十にもなって、怪談はやめてくれ」

「……そうだな」

龍生は言った。

もちろん、心から納得した訳では、ないだろう。魁にしても、普通ではないものを感じていたのだ。

だが、それを口に出してしまふことが、怖かった。

「響子の部屋を見に行ってみよう。あの旦那、気が弱そうだったから、真弓のところに甘えに行っているかも知れない」

「もしくは、この機会に、真弓がおまえのところへ行かないか、見張りに？」

「——三十にもなったら、少しは考えてから喋るものだ。そうすれば、一言多いそのクセも直るだろう」

二人は、龍生がどこからかくすねて来た懐中電灯を手に、響子と真弓の部屋へと、足を向けた。

やる事が出来て安心したのか、龍生も、さっきの軽口と同じように、随分、表情を緩めている。

だが——。

「なあ、魁、あの霧……。いや、何でもない」

気分が軽くなっても、あの霧の話はしたくないのだろう。龍生は途中で、言葉を止めた。

そして、龍生が呑み込んでしまった言葉の先は、魁にも何となく解るような気が、していた。

多分、同じことを考えていたのだ。この船の停電も、あの霧のせいではないのか、と。

もちろん、そんな馬鹿げたことなど、あるはずがないだろう。第一、船が停電になったのは、あの霧が消えて、随分、経ってからのことなのだ。そして、たかが霧で、船が停電してしまうはずもない。——いや、魁も龍生も、霧に詳しい訳ではないが、霧が出たせいで停電した、などという話は、聞いたこともない。それでも——。

それでも、その馬鹿な考えを、どうしても否定することが出来なかったのだ。あの霧を見た者にしか解らないだろうが、蒼く仄光るあの霧には、何が起ころうとも不思議ではない、そんな恐怖が染み付いていた。

「真弓？」

部屋の前に来て、魁は、ノックと共に、声をかけた。

「誰もいないのかな」

龍生が言った。

部屋からは何の返事もなく、物音一つ、しない。

「響子？ 真弓？」

魁はもう一度、声をかけた。そして、ドアのノブに、手をかける。ロックされていなかったのか、ドアは、以外にもすんなりと、開いて来た。

だから、おかしい、と思ったのかも、知れない。——いや、おかしい、と思ったのは、ドアを開けた途端に鼻孔をついた、その匂いのせいであつた。妙に生臭い、厭な匂いがしたのだ。

「……何だ、この匂いは？」

鼻と口を押さえて、龍生が言った。

部屋の中には、口の中が錆びて行くような異臭が漂っている。まるで、沼の水に血を混ぜたような、そんな匂いが。

「さあな。少なくとも、響子や真弓が好みそうな匂いじゃない」

「解らないぜ。女、つてのは、訳の解らないものに大金を叩く生き物だからな。脂肪を取る薬とか、肌を白くするクリームとか……少々厭な匂いがしたって、使うに決まってるんだ」

多分、言っている龍生自身、その言葉を信じていた訳では、ないだろう。

魁は、大きくドアを、開け放った。

龍生が、懷中電灯で、部屋を照らす。

「血……？」

いきなり目に飛び込んで来たものは、床やベッド、辺りの壁を染める、赤黒い大きな染みであった。

「冗談……だろ？」

誰が、そんなことをすぐに信じられた、というのだろうか。たとえば、部屋の中に血の匂いが充満していようと、普段、そんなものと縁のない生活をしている人間にとって、目の前にあるものは、すぐに受け入れられるようなものではなかった。

「二人を捜そう。部屋にいないのなら、どこか別の場所にいるはずだ」

魁は、そう言って、翻った。

死体となつて、とは、言えなかった。あれだけの血が、一人の人間の体内から流れたものだとなれば、もうその人物が生きているはずもないのだ。

だが、その時――。

「おい、魁！」

と、龍生が、目を瞠つて、声を上げた。――いや、それは、思ったよりもずっと小さい声であつたかも、知れない。

そして、その龍生の視線の先には、懷中電灯の光があつた。また、何か別のものを照らしているのだ。

窓の下に置かれた、テーブルの上である。

そこには、赤黒い肉の塊が、乗っていた。それが、人間の頭部である、と気づくのに、少し時間がかつた。

女である。シヨート・カットの――今は、もう見る影もないが……。

「響子……なのか？」

疑問符がついたのも、信じられなかったからではなく、その顔が、グチャグチャに潰れていて、まだ確信が持てなかったせいであつた。鼻は潰れ、唇は剥がれ……とても正視できるような状態では、な

かったのだ。

「ぐうつ！」

龍生が口を押さえて、部屋の外へと飛び出した。
魁もまた、込み上げる吐き気に、部屋を出た。

「誰が……誰が、あんな……」

龍生が身を震わせて、眩きを零す。

口には出さなかったが、もしかして、真弓や修一も、どこかで同じ目に遭っているのではないか、という思いが、二人の胸には、あった。

そして、首から下が失くなっているのは、何故なのだろうか、という思いも。

「あれ……玩具じゃないよな？」

最近の玩具は、本当に趣味が悪く、しかも精巧に出来ているのだ。

「……玩具なら、血の匂いはしないさ」

「そうだな……」

これは、現実を起こっていることなのだ。誰が、何のためにしていることなのかは判らないが、イタズラでないことは、はっきりとしている。

「船のスタッフに知らせに行こう。真弓と修一のことと捜してもらった方がいい。克也のこと……」

二人は、懐中電灯の明かりを頼りに、スタッフ・ルームへと歩き始めた。

その背中を、暗い陰から、じつと見送る人物が、いた。

「残念だったな、魁。もうおまえに、響子を喰らうことは出来ない……。もちろん、他の女も……。おまえは、すぐにオレに喰われるんだからな……」

ホールには、人など一人も、いなかった。パーティの華やかさが消えた今、ただ沈黙だけが、息づいている。

だが、エリ阿斯は確かに、ホールで、船の故障についての説明会がある、と言っていたのだ。

それなのに、人は一人もいない。

また、オーギュストを困らせるために、そんな嘘をついた、というのだろうか。——いや、エリ阿斯はあの時、こう言っただけだったか。

シグルドおじさまが、と……。

嘘をついたのは、エリ阿斯ではないのだ。シグルドが、エリ阿斯に、そう言ったのだ。

なら、そんな嘘をついた、シグルドの目的とは——。

「まさか——」

オーギュストは、行き当たった考えに、目を瞠った。

シグルドも、すでに「あれ」に変わっているかも知れないのだ。

——いや、変わっていないにしても、嘘をつくからには、何らかの目的があったとしか、思えない。たとえば、エリ阿斯を殺して、ガラス王の地位を手に入れる、とか。

オーギュストは、自らの失態にこぶしを握り、すぐにホールを飛び出した。

こんな状況の時に、エリ阿斯を他の人間に預けたりしてはならなかったのだ。誰が「あれ」に変わっているかも知らない、というのに——。身内だから、ということだけで、シグルドには、疑いもかけていなかった。彼にしても、あの霧の中、デッキに出ていた可能性はあったのだ。

それに、パーティ会場では見かけなかったシグルドが、その間にこにいたのか、疑問を持って当然であった。いくら、思いがけない

ことが起こった後で、冷静さを欠いていたとはいえ――。

あの部屋は、ホールから一番、離れている。バーグマンが、エリアスがゆっくり休めるように、と気を遣ってくれたのだ。そこで何が起こつていようと、オーギュストの耳には入らなかっただろう。シグルドが、エリアスに襲い掛かっている……。

「エリアス様……」

彼を、最後のガラス王にしてはならないのだ。亡きガラス王の遺言、というだけでなく――。

もつとも、オーギュストも最初は、エリアスの秘書となったことを、後悔していた。いくらガラス王の遺言とはいえ、あんな年端もいかない少年の秘書になるなど、誰もが喜びはしなかっただろう。加えて、エリアスは、いつまで経っても、オーギュストに心を開くことはせず、あの調子なのだ。頑ななまでに心を閉ざし、誰一人として信用せず……。

だが――。

だが、彼をそんな少年にしてしまったのは、周りの大人たちではないのか。両親も祖父も、幼くして亡くし、その度に、遺産の話を持ち出す親戚たちや、事業経営のことを持ち出す取締役たち――。彼は、誰よりも哀しい少年なのだ。

早く大人になり過ぎてしまった子供は、何より、哀しい。見ている方が、辛くなるほどに……。

彼が、周囲の人間全てに、猜疑心を持つのは当然のことなのだ。そうしなければ、自分の身も、祖母の身も守れはしなかったのだから。

オーギュストにしても、亡きガラス王の死に、疑問を持っていなかった訳では、ない。あの事故のことも、いろいろと調べてみたが、どうしても、証拠と呼べるものが見つからなかったのだ。

犯人は――犯人ではないか、と思える人物は、いる。老舗の名を、あっさりと地に墮とされ、腹を立てている男なら、ダールクビストのガラス王国を崩壊させようと考えても、何の不思議もないだろう。

エリアスの両親の事故は、本当にただの事故であつたのかも知れないが、亡きガラス王の事故は、あっさりと片付けてしまふには、――あまりにも当たり前過ぎる事故であつたのだ。

へりをよく利用するダールクビストが、そのへりで死ぬなど……。たとえば、いつも車を利用してゐる人間が、たまたま利用したへりで事故に遭う、というのなら、不運な事故、として、片付けることが出来ただろう。

だが、いつも利用していたへりで事故に遭う、というのは、どうしても疑問が残るのだ。必ず利用する、と判つてゐるものになら、誰もが、それに、細工が出来たのではないか、と――。たまにしか利用しないものには、細工が出来なくても、いつも利用するものなら、容易く細工が出来たのでは、と……。

しかも、オーギュストが、ガラス業界の老舗、バーレンの不正を調べてゐる間に――ダールクビストの側を離れてゐる間に、起こるなど……。

不意に、目の前に人影が立った。

マルセ——ではない。今日のパーティに招かれていた、客人ゲストの一人である。

周囲には、生臭い匂いが、立ち込めていた。

半分、禿げ上がった頭に、申し訳程度に生えている毛が、じつとりと濡れるように、張り付いている。

オーギュストは、ハッ、と身を縮めた。

「やあ、オーギュスト。ガラス王国は、相変わらず、順調そうじゃないか。全く、羨ましい限りだよ。うちなど、業績不振が続いて、苦しい限りだからね。こうしてパーティに招よばれば、うちもパーティを開かない訳にはいかない。莫大な金がかかっても、ね。見栄というものがある。それに、あの会社は危ない、などとは言われたくないからね。——まあ、君のように、羽振りのいい企業の、会長秘書をしている人間には、解らんだろうが」

タキシード姿の、禿げ上がった紳士は、生暖かい笑顔で、愚痴を零した。

しかし、もうそんなことなど、どうでもいいような、平坦な口調である。

「……霧に濡れましたか？」

オーギュストは訊いた。

「霧？ ああ、あれは不気味だった。酔いを醒まそうと思ってデッキに出たら、あつと言う間に、あの霧に取り囲まれて——。身動きも取れなくなってしまったよ。——こう、ポウ、と蒼白く光る奇妙な霧で……。酒に酔っているせいで、そう見えるのかと思っていたが、あの霧は、確かに自分で発光していたよ」

やはり、あの霧が、人間を別のものへと変えているのだ。あつと言う間に、辺りの全てを喰い尽くしてしまった、あの霧が、人間をも、その霧のように変え、食欲だけを持つ生き物へと——他の欲望

や感情も、全て食欲に変える生き物に、変えている。

もちろん、そんなことを他人に話しても、笑い飛ばされるだけだろうが。

だが――。

だが、エリアスなら、笑わずに聞いてくれるのではないだろうか。あの霧を共に見ていた、エリアスなら。

「ガラス王国の人間を、全て喰い尽くしてしまったら、きっと、ガラスの城は崩壊するだろうねえ……。いや、順調な利益を上げている企業の人間を、全て喰い尽くしてしまえば――」

カツ、と紳士の口が、大きく開いた。

顔中が口になったのではないか、と思えるような、形相であった。そして、オーギュストは逃げなかった。もちろん、マルセ夫人の時のように、手加減をする積もりも、なかった。

早く、エリアスの元へと、戻らなくてはならないのだ……。

ベッドに腰掛け、エリアスは、コルト・パイソンのシリンダーに、抜き取った銃弾を、詰め直していた。

見様見真似で覚えたことではなく、オーギュストに対抗するために覚えたことであるから、その手つきも、手慣れている。

「そんなもの、君に扱えるのかい？」

シグルドが、からかうように、エリアスの手元を覗き込んだ。

生臭い息が、顔にかかる。

エリアスは、それに顔を顰めながら、

「○・五六秒あれば、三発撃てる」

と、小馬鹿にするように、言葉を返した。

だが、シグルドは、

「君が？ それとも、オーギュストが？」

「……」

「君には無理だよ。オーギュストも、こんなものを小さい子供に持たせるなんて、何を考えているんだか——。かしてごらん、ぼくが持っていてあげよう。君には危険過ぎる」

シグルドの手が、銃弾を詰め終えた銃へと、優しく伸びた。同時に、エリアスは、ベッドを飛び降り、壁の方へと翻った。

キッ、とシグルドを睨みつけ、パイソンのグリップを、握り締める。

シグルドの面が、きつく変わった。——いや、当然、きつく変わるだろう、と思っていたのだ。

だが、シグルドは、不機嫌な顔もせず、

「やれやれ、相変わらずだな。ぼくは君に、徹底的に嫌われているらしい」

と、平坦な口調で、肩を竦めた。

だが、怒りを見せない今のシグルドの方が、すぐにカツとなるシグルドよりも、ずっと恐ろしいものではなかっただろうか。

「……ぼくは、オーギュストのところへ行つて来る。あなたは、ここで待っているといい。——それに、暇なら、バス・ルームで歯でも磨いて来た方がいいんじゃないのか？ 死人だって、そんなに臭い口をしていない」

エリアスは、プイ、と顔を背け、ドアの方へと、足を向けた。

シグルドの表情が、見る間に変わった。

だが、それも怒りを表すものではなく、心底愉しげな——それについて、無表情としか言いようのない、不気味さを増幅させるものであった。

「本当に、気の強い子だ……。子供と年寄りとは、頑固で仕方がない」と、生臭い息を吐いて、クックツ、と笑う。

シグルドの足は、エリアスの背後へと、そろり、そろり、と近づいていた。

エリアスは、それを気にせず、ドアの鍵を、解除した。

刹那であった。

ドアが、何の前触れもなく、外からの力に、開け放たれた。

内開きのドアである。当然、ドアの前に立っていたエリアスも、その勢いと衝撃に、床の上へと跳ね飛ばされた。

「く——っ！」

一瞬、何が起こったのか、エリアスには、解らなかった。ただ、目の前が白くなるような痛みが走り、衝撃を受けた部分が、瞬く間に痺れ出したのだ。

手の中の銃が、床の上をカラカラと滑った。

もちろん、エリアスには、それを気にする余裕もなかった。

部屋へと、人影が、入って来た。

しかし、一体、いつの間に、部屋の前に立っていた、というのだろうか。廊下には、足音一つ響いていなかったというのに。

エリ阿斯は、痛みを堪えながら体を起こし、部屋へ入って来た人物を、茫と見上げた。

女性である。しかも、全裸で、胸や鳩尾部分には、殴られたようなアザが残っている。額も割れ、そこから血が滲み出していた。

足音が廊下に響かなかつたのも、その婦人が裸足で、靴を履いていなかったからなのだろう。

「フリユ・バーレン……？」

エリ阿斯は、あまりにも思いがけないマルセの姿に、呆然と瞳を見開いた。

今、目の前にいる婦人が、あのパーティ会場で見た貴婦人と同一人物であるとは、エリ阿斯にはとても思えなかった。

髪は乱れ、気味の悪い薄ら笑いすら、浮かべている。

「男……。男なんて……。いなくなればいいのよ……」
マルセは言った。

笑みのままの言葉であることが、さっきのシグルドと同様、新たな気味の悪さを、もたらしていた。

「フリユ——」

エリ阿斯が、体を起こそうとした時であつた。不意に、後ろから腕が巻き付き、がっしりと体を拘束された。

湿りを帯びた服が、エリ阿斯を羽交い締めにして、抱え上げる。

「何を……。放せ！ 放せよ！」

エリ阿斯は、手足をバタつかせて、抗った。

だが、シグルドの力は、異様なほどに強く、そんなことでは揺るぎもしなかった。もともと、大人の力と、子供の力、という違いがあつたのだ。そして、今は、また別の力も加わっている——そんな気がした。

「実に、うまそうな匂いがする……」

クン、とエリアスの匂いを嗅いで、シグルドが言った。

「え……？」

エリ阿斯は、そのシグルドの言葉に、戸惑った。

「フリユ、あんたも一緒に、食べるかい？ 見たところ、腹が減っているようだし」

シグルドは、変わらずマルセに、話しかけている。

マルセは、口から涎を垂らし、一步、足を踏み出した。

また、一步、一步、エリアスの前へと、近づいて来る。

シグルドの口からも涎が垂れているのか、エリアスの髪に、生臭い唾液が糸を引いて、伝い落ちた。

「や……やめ……」

エリアスは、目の前の夫人を、哀しく見つめた。

パーティ会場で見た時は、優しそうな夫人、だったのだ。あまり幸福そうではなかったが、こんな狂気は宿していなかった。写真でしか見たことのない母親と同じように、ブロンドの髪をきれいに結び上げ、エリアスに微笑み返してくれたのだ。

今、それと同じ瞳で、それでも違う笑みで、エリアスを喰らおうと近づいて来ている。

「フリユ・バーレン……」

「バーレン？ ああ、そうね。あの人も、食べに行かなくてはならないわ。この食事を片付けてから……」

マルセは、舌なめずりをしながら、愉しげに言った。

彼女は、もう、人間ではないのだ。オーギュストが言っていたように、もう別のものになっている。

だが、何故――。

何故、あの夫人が、こんな風が変わってしまった、というのだろうか。——いや、彼女だけでなく、シグルドの方も。

「あんたみたいないい女と食事が出来るなんて、最高だね。頭でも、足でも、好きな方から食べていいぜ」

ニタニタと笑いながら、シグルドが言った。

「ありがとう……」

カツ、とマルセの口が、大きく開いた。

凄まじい匂いが、エリアスの顔に、降りかかる。

エリアスは、ギョッ、と目を瞑った。

バキバキバキ——っ、と骨まで咬み砕くような、恐ろしい音が、響き渡った。

その音は、エリアスの耳にも、はっきりと聞こえていた。

「うわああああ——っ！」

絶叫、としか呼べない叫びが、上がった。

ポトポト——と、エリアスの髪に、大量の血が降りかかる。

輝かしいばかりの金髪は、あっと言う間に真紅の血に塗り替えられた。

同時に、エリアスの体は、床の上に落ちていた。シグルドの腕が、離れたのだ。

エリアスは、その衝撃に呻きを上げたが、傍らでは、もっと凄まじい悲鳴が上がっていた。

シグルドが床の上にのたうちながら、頭を抱えて転げ回っている。頭の右側は、齧り取られたように——いや、事実、齧り取られて、欠けていた。

マルセは、バリバリと口の中の肉骨を咀嚼し、ゴクリと喉に通している。

そして、再び、転げ回るシグルドへと、襲い掛かった。

「フリー……?」

エリ阿斯は、あまりに残酷な光景に——そして、哀しい光景に、動けないまま、呆然としていた。

人間を喰べている夫人を見ても、不思議と、気味の悪さは、感じなかった。

そんなことより、あの貴婦人が、こんな風が変わってしまったことに、言いようのない憫れみを感じていたのだ。

そんな時、また、ドアの外に足音が響き渡り、エリ阿斯は、ハッ、として音の方を振り返った。

「エリ阿斯様！」

部屋へと飛び込んで来たのは、オーギュストであった。

「エリ阿斯様……ご無事で……」

と、エリアスの側へと歩み寄り、床に転がるままの銃を、拾い上げる。

その手は、慣れた手つきで、シングルを喰らうマルセの方へと、狙いを定めた。

「撃つな——っ！」

何故、そんなことを言ってしまったのだろうか。気がついた時には、エリ阿斯はそう言っ、て、オーギュストの腕にしがみついていた。

「……エリ阿斯様？」

「か……さま……。かーさまが……」

「……」

「悪くない……。その人……悪く……」

碧い瞳には、祖父の死以来、見せたことのない涙まで、浮かんでいた。

オーギュストはゆっくりと、銃口を下げた。

「……参りましょう、エリ阿斯様。ここは危険です」

そう言っ、て、泣きじゃくるエリアスを抱え上げ、ドアの向こうへと翻る。

幼子のように抱き上げられるそのことに、エリ阿斯は何も言わ

なかった。ただ、オーギュストの肩に抱きついていた……。

デッキには、全く、と言っているほど、風がなかった。

船内の照明が消えてから、船も動いていないように、思える。――いや、事実、動いてはいないのだろう。

空は、一向に明ける様子もなく、黒い雲が、低く重たげに、のしかかっている。

「こんなところまで連れて来て、一体、何だと言っているのよ。話があるなら、部屋ですればいいじゃない」

真弓は、不機嫌を露に顔を顰め、夫の修一を睨みつけた。

停電のために遊べなくなつて、余計に気分が苛立っていたのだ。

修一の唇が、フツ、と歪んだ。嘲笑うかのような表情、である。

「用？　ぼくが、君に？　クツクツ……。食べ物に、どんな用がある、っていうんだい？」

と、生臭い息で笑いながら、皮肉げに言う。

「食べ物？」

真弓は、その言葉に、眉を寄せた。

「ああ。ぼくは今、君を喰べたくて仕方がないんだ……」

普通なら、甘い囁き、とも言える言葉であつただろう。愛の冷めていない学生時代に、零れ落ちた言葉なら。

「バツカじゃないの？　デッキでスリルを楽しみながらやろう、つてわけ？　アダルト・ビデオの見過ぎじゃないの」

「ビデオじゃ、こんなことはやらなかつたさ……」

修一の腕が、真弓を、デッキの隅へと押し付けた。

「やめ――っ」

「もう命令されるのは、たくさんだ。君にも、上司にも……。人を道具みたいにこき使つて、威張り散らして……」

その修一の言葉の意味は、真弓にもすぐに、理解できた。

怒っているのだ。表情は、不思議なほどに変わつてはいないが。

だが、修一が怒ったところで、真弓には怖くもない。少し甘えてやれば、今、自分が怒ったことさえ後悔して、逆に真弓に気を遣ってくれるような男、なのだ。

「いいわよ。ここでやりましょうよ。私、あなたがそう言ってくれるんじゃないかと思って、期待してついて来たのよ」

修一の首に腕を回し、真弓は、囁くような声で、そう言った。

修一は黙って、そこにいる。

もう、さっき怒ったことを、後悔し始めているのだろう。声も出せないほどに……。少なくとも、真弓は、そう思っていた。

「早くして……。お願い。もう待てないわ。体が疼いて……」

と、自分から、胸と腰を、すり寄せて行く。

修一の手が、真弓の髪を、ゆっくりと撫でた。

生臭い匂いが、した。

多分、海の潮の匂いだろう。

真弓は、唇を重ねるように、顎を高く持ち上げた。

髪を撫でる修一の手に、力が入ったのは、その時であった。グッ、と真弓の髪を握り締め、柵の向こう——海の方へと、引き倒す。

「キャア——っ！」

上半身から落ちる体に、真弓は、信じられない思いで、叫びを上げた。

だが、さらに信じられないことが、その後、起こった。真弓の体が全て落ちる前に、修一が足をつかんで、落下を止めたのだ。

もちろん、それだけのことなら、信じられただろう。夫が妻を助けるのは、当然なのだ。

だが、修一は、途中まで引き上げた膝を柵にかけただけで、真弓を引き上げようとは、しなかった。

「何してるのよ！ 早く助けなさいよ！」

真弓は、怒りを露に、怒鳴り散らした。

スカートが捲れ、足も、下着が丸見えの状態に、なっている。その太ももと、足首に、ロープのようなものが、巻き付いた。ま

るで、柵と足を固定するように、巻き付いたのだ。

「な……っ。やめて！ 何をするつもりよ！ 今すぐやめないと、承知しないわよ！」

そんな怒りが飛ぶ間も、修一は、細いロープで、真弓の足を縛っている。柵を挟んで、太ももと足首を一周くりに、普段の修一からは思いもかけない手際の良さで、真弓の体を固定して行く。

足を開く形で縛り付けられつけられた真弓は、体を持ち上げることも出来ず、恥ずかしさに唇を噛んでいた。

「豚の丸焼きみたいで、君にはお似合いだよ」

修一が言った。

真弓は、屈辱と怒りに、頬を染めた。

「あなたなんて、もう離婚よ！ 日本へ戻ったら、覚悟しておくといいわ！ 早くロープを解きなさいよ」

「いやだね」

「何ですって——」

「豚の丸焼きなら、内臓を取り出さなくちゃならない。体の中に、手を突っ込んでね」

言葉と共に、修一の手が、真弓の下着を剥ぎ取った。引き千切るようにして、肌から剥がし、柔らかい肉の部分を、露にする。

「何をするのよ！ やめて！ お願いだから、やめてちょうだい！ 謝るわ。離婚なんかしない。だから——」

「ごめんだね。ぼくはもう、君と別れたいんだ。今日が、永遠の別れの日だよ」

グッ、と修一の手が、下肢の狭間の、葩の中へと、入り込んだ。指ではなく、手、そのものが。葩を裂くのも構わずに、凄まじい力で入り込んだのだ。

「ギヤアア——っ！」

真弓は、その激痛に、叫びを上げた。

「よく鳴く豚だな。そんなに、突っ込まれるのが好きかい？ さんざん、他の男のモノをくわえ込んで来たんだろ？ ぼくが知らないとしても、思っていたのかい？」

「やめ——く……！ ひっ……苦し……。や……め……」

修一の手が、柔らかい肉を引き裂きながら、真弓の体の中へと、食い込んで行く。生暖かい肉の隙間に、湿った息を吐きながら。

「へエ。結構、入るもんだな。まあ、子供が産まれて来るんだから、

不思議じゃないけど」

もう手首も見えないほどに――肘の半ばまで腕を突っ込み、修一は面白そうに、唇を歪めた。

真弓は、白目を剥いて、言葉にならない声を上げていた。

「これが、そうかな」

修一が言った。そして、手のひらにつかんだ柔らかいものを、もぎ取るようにして、引き出した。

ゴボっ、と真弓が口から、血を吐いた。

叫びを上げたかも知れないが、それは、修一の耳には届かなかった。

「いただきます」

それも、真弓へ向けての言葉ではなく、もぎ取ったものへ向けての、言葉であった。

真弓は涙を零し、痛みと苦しみに血を吐きながら、その夫の言葉を――いつもと変わらない夫の言葉を、聞いていた……。

船の乗務員室には、誰もいなかった。

床は血の海で、凄まじい血臭が、漂っている。

死体は、なかった。今度は、首さえ――。

「これは……。これは、一体、どういうことなんだ……」

目の前の凄惨な光景に、龍生は、蒼冷めた面で、呟きを零した。

「……武器になるようなものを、探した方がいいかも知れない。この船の中には、何かがいるんだ」

「化け物かい？」

茶化すような龍生の言葉にも、魁は笑み一つ、零さなかった。

誰か、ではなく、何かが、と言った自分の言葉を、間違っているとは、思っていないかったのだ。

だが、龍生は――。

「何で、いつもそうやって澄ました顔をしてるんだよ！俺は、おまえのその顔が気に食わないんだ！コンクールで入賞した時も、有名な画家に褒められた時も、同じような顔をしゃがって！まるで自分だけは、そんなことで喜ぶようなレベルの人間じゃない、とでも言いたげに――っ」

「……」

「そうなんだろ？ おまえは何でも出来て、褒められることが当然で、賞を取るのも当然で――。いつだって、俺たちを見下して来ただ。その取り澄ました顔で――。何か言ってみろよ！ 言えよ、魁！」

龍生は、食いつくように、魁の胸倉につかみ掛かった。

苛立っているのだ。訳の解らないことが続き、恐怖が込み上げ――そんな中、魁が一向に取り乱さないことに。

「……そういう顔しか、出来ないのさ」

魁は言った。

「え？」

「入選しなくなった時が怖くて……。その時も、同じ顔でいられるように、と……。入選しなくても、俺には関係ないことなんだ、と思われるようにしようと……。そんなことを思いながら、絵を描き続けて……。ついに、描けなくなった」

「……魁？」

「絵を描くことが、苦痛でしかなかったんだ。いつも、他人の言葉が気になるようになって……。だから、人一倍、努力をして、技術だけは、最高になった。それでも……。いつの間にか、俺はノイローゼになっていた。もう、人の目を気にせずに描くことなど出来なくなっていた。いつも、人に褒めてもらえるか、貶されるか……。そればかりを考えていた。好きな絵を描けなくなっていたんだ。――〇〇点満点の絵なら、いつだって描けたさ。非の打ち所のないうまい絵なら……。だが、一二〇点の絵も、五〇点の絵も描けなくなっていたんだ。――そんな俺の苦しみが、おまえに解るというのか？ 入選しても、次の絵のことが気になって、喜べもしなかった俺の心が……。人に見向きもされなくなることに脅えていた、俺の気持ちだ！」

なまじ、人よりも少し、才能と技術があっただけに、その重みにいつも歪められて生きて来たのだ。

誰よりも脅えて、誰よりも臆病に。

その傷つきやすい心を守るものが、いつも変わらない顔であった。入選して当然、と誰からも思われている魁が、自分の心を守る方法は、それしか、なかった。

そして、魁が描きたいものは、人に褒めてもらえるような、一〇〇点満点の絵では、なかった。

だが、それに気づいた時、魁はもう、五〇点の絵など、描けなくなっていた……。

「……みつともないな」

龍生が言った。

魁は、フツ、と苦笑を零した。

「今のは、聞かなかったことにしてやるよ。おまえは、何でも軽くやっつてのける、秋月魁なんだからな」

「助かるよ」

二人は、もういつの顔に、戻っていた。

同情もしない龍生の言葉は、魁には、何より、ありがたいものであった。本当に、みつともない挫折であったのだから。

「クラブに、バンドが使う、スタンド・マイクがあったよな？ あれなんか、武器にどうだい？ 化け物が出て、長いから近づかずに殴れる」

「賢明な方法だな」

「なら、行こう」

二人は、クラブの方へと、翻った。

暗い中を、懐中電灯を照らしながら、慎重に進む。

「他の乗客、どうしてだと思う？」

「自分の部屋で寝てるさ」

少なくとも今は、そう思っている方が、気が楽だった。二〇〇〇人を越える乗客の誰かが、狂った殺人鬼なのだ、と考えるよりは。何しろ、その殺人鬼を見つけたところで、どうすればいいのかも、判らないのだ。

取り敢えず、今、はつきりとしていることは、姿の見当たらない三人——真弓と修一、克也を捜し、その無事を確認すること——。できれば、殺人鬼に出会うことなく。

「待て」

突然、魁が、隣を歩く龍生を、静かに制した。

「どうし——」

「足音だ。誰かが近づいて来る」

暗闇と、船内の静けさは、少し耳を澄ますだけで、その足音を容易に、聞き取らせた。——いや、相手が、足音を消すつもりがなかったのかも、知れない。

コツ……コツ……コツ……と、単調なリズムで、近づいて来る。
懐中電灯も何も持っていない、というのに、奇妙なほど、同じ歩調で歩いて来るのだ。もちろん、この大型客船の中、誰が出歩いていようと、不思議ではないのだが。

それでも、今の二人には、緊張せざるを得ない、状況であつた。
蒼い霧、停電、響子の首、血の海……と、そういったものを見た後でなければ、人が歩いていることの方が、当然、と思えたであろう。

だが、今は――。

何か、生臭い臭いがしていた。

龍生が、ゆつくりと懐中電灯を、持ち上げた。

そこには――。

「克也……」

龍生が、言った。

明かりに照らし出された人物は、確かに、ヘルシンキのカフェから行方不明になっていた、小島克也であった。

「やあ」

克也が、少し照れるような顔で、片手を上げた。

「おまえ…… やっぱり、船に乗ってたんだな。こうデカイ船じゃ、捜し回るのも一苦勞で、どうなることかと思ってたよ。——今までどこにいたんだ？」

龍生は、そう言つて、克也の前へと、足を進めた。

魁も、当然、後に続いた。

何しろ、懐中電灯の数は、一つ、である。

「なんとなく、出て行き辛くて……。響子にフラれたことは、聞いただろ？」

「え、あ、いや…… まあ……」

聞いた、というか、壊れたレコードのように、何度もその言葉が飛び交っていた、というか——言いくいところである。

「克也、その響子だが…… 殺されたんだ」

魁は、言った。

「…… 殺された？」

克也の両目が、大きく開いた。

「ああ。信じられないだろうが、俺たちが部屋に行った時には、もう死んでいた。首だけになって、な」

「首……」

「犯人は、この船内にいるはずなんだ。——それに、ふに落ちないこともある。部屋の中には、響子の首だけしかなかったのに、廊下には血の跡も残っていなかった。普通、担いで胴体を運び出すにし

ても、引きずって行くにしても、血の跡が残るものだろう？ 毛布にくるんで行ったのなら、部屋の毛布がなくなっているはずだ。それなのに、響子の部屋の毛布は、きちんとあった。自分の部屋の毛布を、わざわざ取りに戻ったのかも知れないが……そんな、自分が犯人だ、と疑われるようなことをするとは思えない。——解らないことばかりだ」

魁は、出来るだけ事務的な口調で、話を続けた。
そうした方がいい、と思ったのだ。

人は、悪い知らせほど、取り乱して詳しく聞きたがる。それなら、最初から事務的に、全てを話してやった方がいい、と。

「なら、犯人は、響子の胴体を喰べた、とでも言うのかい？」

克也が言った。

魁は——龍生も、あまりに思いがけないその言葉に、驚きを通り越して、戸惑った。

人間が、人間を喰らうなど——しかも、骨も残さず食べるなど、普通の人間には、考えられることではなかったのだ。何日もかけて、骨もすり潰して、というのなら、まだ解るが、たった数時間の内に、など。

「ば、馬鹿なことを言うなよつ。殺されたのは、響子だけじゃないんだ。船のスタッフも何人か、殺されてるんだ。こっちは、首もなかったけどな」

龍生が言った。

「スタッフ？」

克也の表情が、驚きとはまた違った、訝しむような形に、刹那、変わった。

恐らく、仲間の死だけでなく、関係のない人間まで殺されていることに、感情的な驚きよりも、殺人の動機の方が気になったのだろう、と、魁も龍生も思っていた。

もし、殺されていたのが、響子一人なら——そして、首だけが残っている、という異常な殺し方でなければ、魁も龍生も、克也が犯

人なのではないか、と思っていたに違いない。響子にフラれた怒りで、カッとなって、ということは、充分に考えられるのだ。

だが、実際には、響子以外の人間も殺され、その殺し方は、カッとなって、というような、突発的な殺意によるものとは、思えないものであった。

手近なもので殴る、とか、つい突き飛ばして、というのなら解るが、響子は酷く顔を潰され、その顔をさらすように、首だけが残されていたのだ。克也に出来る殺し方では、なかった。

「真弓と、その旦那が行方不明なんだ。それで、今、魁と捜しているところなんだけど……」

「オレも一緒に捜すよ。一人でいる気がしない」

克也は言った。

明かりに照らし出された克也の髪は、少し湿っているような感じがした。長髪だけに、濡れているのがよく判るのだ。

それに、さつきから漂っている、生臭い匂い——それは、どこから流れて来ているのだろうか。——いや、きっと、あの血の海で嗅いだ凄まじい匂いが、まだ鼻孔に染み付いているのだろう。

二人は、それ以上気にすることもなく、克也と共に、クラブの方へと翻った。

「あいつら、これだけ人に心配させて、夫婦でじゃれあってた、なんて言ったら、旅費を全部、持たせてやるからな」

相変わらず、社長令嬢との結婚が決まっている、とは思えないセコい台詞を、龍生は目一杯、不満げに、吐き出した……。

パーティの客は、所謂、ホールとは別の、いくつかのソファや椅子を並べた、サロンの方へと、集まっていた。

船が動き出さない限り、帰ることも出来ず、皆、一様に、苛立た様子を浮かべている。

文句を言う者、自分がどれほど忙しい身であるかを、まくし立てる者、周りの人間に当たり散らす者……じつと黙っている者は、数えるほどしか、いない。

見当たらない客は、他の部屋にいるのだろう。

「——で、ぼくを、こんなところに置いて行く、っていうのかい、オーギュスト？」

エリアスは、皮肉な口調で、秘書を見上げた。

「夫人も、大勢の人間を一度に喰い殺すことは出来ないでしょうから、ここが一番、安全だと思いますが——誰が、ああなっているか判らない以上、私と一緒にいていただいた方が……」

もう、二度と、目の届かないところに、エリアスを残して行く訳にはいかないのだ。

「なら、行こう、医務室に行つて、まず最初に、傷の手当だ」

二人は、医務室の方へと、足を向けた。

今は、クルーザーの機能が回復するまで、生き延びることの方が重要である。

そして、今、このクルーザーの中で起こっていることを、他の客たちに説明しても、余計な混乱を与えるだけだろう。それどころか、誰一人、そんなことなど信じようとしないかも、知れない。

「痛むか？」

無事、医務室まで辿り着き、エリアスは、上着とシャツを脱ぐ。オーギュストに、肩の咬み傷の具合を、問いかけた。

鍛え抜かれた体躯の肩を染める赤い血は、今も、傷口をじわじわ

と濡らしている。

「大丈夫です」

オーギュストは、言った。そして、エリ阿斯が懐中電灯で照らす中、器用な手つきで、処置を始めた。

傷口を消毒し、血止めの包帯をきつく巻くだけの、応急処置である。

「それは？」

オーギュストが手にするアンプルを見て、エリ阿斯は訊いた。

「モルヒネです」

「痛まないんじゃないのか？」

苦笑のような笑みが、零れ落ちた。

「ぼくに嘘をつくとは、いい秘書だな」

それは、非難ではなく、からかいにも似た言葉であっただろう。

そんな会話の中、オーギュストは痛み止めのモルヒネを打ち、処置を終えた。

「——で、あれは、どういうことなんだ？」

エリ阿斯は訊いた。

オーギュストには、何か心当たりがあるようであっただが、エリ阿斯には、マルセやシグルドがあんな風になってしまった理由など、知りようもなかったのだ。

「霧です」

オーギュストは言った。

「霧？ ああ、蒼く光ってた、気味の悪い霧のことか？」

「はい。あの霧のせいで、フリー・マルセや、シグルド様が、おかしくなれたのではないかと……」

誰に笑い飛ばされようと、もうそれを否定することなど、オーギュストには、出来なかった。

そして、あの霧なら、人間をあんな風に変えてしまっても、おかしくはなかったのだ。

あの三人は、霧が出ている時に、デッキに出たか何かして、霧に

濡れたに違いないのだ。あの、ゾツとするような、蒼く仄光る霧に……。

「あの霧を実際に見ていなければ、おまえの言葉なんか信じなかっただろうな」

話を聞き終え、エリアスは言った。

いくら子供といっても、もうとつくに、サentakクロースも信じていない年なのだ。たかが霧が、人間を化け物に変えてしまう、など、普通なら信じもしなかっただろう。

幼いエリアスでさえ、そうなのだから、あの霧を見ていない大人なら、絶対に信じはしなかったに、違いない。

「恐らく、船の故障も、あの霧のせいかと――。詳しいことは判りませんが、あの霧に濡れた人間は、食欲だけが残る化け物に――いえ、全ての感情や欲望が、食欲という形に変わって現れる化け物になるのではないかと」

まるで、貪欲な霧が、辺りのものを全てを、喰い尽くして行ってしまうように。

「あれは本当に、霧だったのか？ ロシアが開発した生物兵器とか、海に沈んでる何かが、化学反応を引き起こすような物質と結び付いて、霧状の毒素を発生させた、とか――。そう考えた方が、納得できるんじゃないのか？」

子供のものとは思えない言葉を、エリアスは、大人の眼差しで、口にした。

「我々はそれで納得できても、国のお偉方は納得しないでしょう。バルト海に有害物質が沈んでいる、となれば、バルト海を囲む各国には、大きな問題です。バルト海に船を出して、海外からの客をつかんでいる企業も、少なくともありませんから」

「……なら、無事に帰れたとしても、誰も相手にしてくれそうにないな」

「以後、船上パーティには、出席なさらない方が宜しいかと」

「出席する気もしないよ」

それは、紛れもない本心であつただろう。

「何か役に立ちそうなものは？」

医務室を見渡して、エリアスは訊いた。

「機械類は確かめてみないと判りませんが、器具を消毒する時に使う硝酸がありますから、ダイナマイトくらいなら作れるかと――」。

問題は――」

「その爆発音が届く範囲に、人がいるかどうか、か」

「はい」

「一応、試せるものは、試してみよう。松明たいまつもいる。デツキを明るくしておけば、誰かがその明かりに気づいてくれるかも知れない。

懐中電灯の電池だつて、いつまで持つか判らないからな」

「かしこまりました」

二人は、孤立した、船、という世界の中で、生き残るための準備を、始めた。

その頃には、もう、船内のロウソクも切れていた。

そして、凄まじい悲鳴が響き渡つたのは、船内のロウソクが切れて、十分と経たない内であつた。

「オーギュスト――」

「様子を見て参ります」

銃を片手に、オーギュストは、ドアの方へと翻つた。

もちろん、エリアスも、後に続く。

「あの夫人……殺すのか？」

「……。いえ。急所を狙うことはしません」

ホッ、としたような空気が、流れた。

それでも、

「ぼくは、ここに残つた方がいいか？」

エリアスは訊いた。

「大旦那様の時と、同じ轍を踏むつもりはありません。あなたがお残りになるのなら、私もここへ留まるでしょう」

「なら、行こう」

二人は、悲鳴の聞こえた方へと、駆け出した……。

そこには、もう、ざわざわと人が集まり始めていた。

サロンと医務室の間の、女性用の化粧室の中である。

そこは、真つ赤な鮮血に染まっていた。

その光景を見た一人の夫人が、さっきの悲鳴を上げたのだ。

しかし、そこには血があるだけで、死体はなく、化け物の姿も、見当たらない。

「これは……。これは一体、どういうことなんだ」

今日のパーティの主催者、バーグマンが、声を震わせて、呆然と言った。

あまりに凄惨な光景に、血の気を失くして、蒼冷めている。

それでも、パーティの主催者として、しなくてはならないことも、心得ているのだろう。スタッフを呼び付け、客たちを宥めながら、サロンへの誘導を始めている。

エリアスと、オーギュストは、そのサロンの入り口近くに立ち、客の髪と服を観察していた。そして、匂いも……。いや、匂いは、これほどの客が犇めいていては、正確には誰が放っているのか判らないため、もっぱら、服や髪の湿り具合を、観察していた。

一人、二人——どんどん客たちが、前を横切る。

整髪剤で髪が湿っているように見えたり、空調も止まってしまっているため、その湿気で汗をかいていたりする者もいたことで、何度か眉を寄せたが、霧に濡れた、と思えるような人物は、いなかった。

「ヘル・バーグマン」

エリアスは、今日の船上パーティの主催者へと、声をかけた。

「ああ、エリアス君。こんなことになって申し訳ない。船の故障に続いて、また、こんな訳の解らないことが——」

「そのことで、少しお話しが。——今、よろしいですか？」

「今はちよつと——」

「大事なことです」

オーギュストを見上げて、エリ阿斯は言った。

バーグマンの視線も、オーギュストへと移る。そして、

「その血は……」

と、オーギュストのダーク・スーツの肩を染める赤黒い染みを見て、目を瞠った。

「騒ぎにたくありません。懐中電灯を向けなくてください」

オーギュストは、言った。

「え、あ、ああ、すまない」

光が遠のき、オーギュストの姿も、影だけになる。

「この部屋は安全です。多分、この暗闇の中、一人でおられる方もないでしょう。——いえ、決して一人で行動しないよう、伝えてください」

「あ、ああ、それは、もちろん——」

「それと、これが一番、大事なことです。髪や服の湿っている人物、生臭い匂いのする人物には、決して近づかないでください」

「え？」

オーギュストの言葉に、バーグマンの眉が、訝しげに寄った。

「気にかけてもらっただけで結構です。——船の現在地は判りますか？」

オーギュストは訊いた。

「い、いや、それが、計器も全て狂ってしまったて……」

船がどこに流されているのかすら、判らないのだ。あの霧は、人間だけでなく、船さえも容易く狂わせている。

「ですが、海流に流されているのなら、見当くらいは」

「私には詳しいことは……。こんなことは初めてで、もうどうしていいのか……」

「……そうですか」

位置も判らず、どこへ流されているのかも判らないのでは、手の

打ちようもない。また誰かが喰い殺されてしまう前に、霧に濡れた人間を見つけて、倒してしまうしか方法はないのだ。

すでに客たちは、パニックを起こし始めている。苛立ちが募ってケンカを始めれば、余計な怪我人も出るだろう。

もちろん、そこまでは、エリ阿斯やオーギュストが構ってやるようなことではなく、もういい年をした大人ばかりなのだから、当人の良識に任せていればいいのだろうが。

「行くぞ、オーギュスト。どっちにしても、火がいる」

二人は、医務室の方へと、翻った。

バタバタと騒がしい足音が近づいて来たのは、その時であった。

「船です！ 船籍はまだ確認できていませんが、大型の客船が近づいて来ます！」

その声に、おおつ、と波のような声が、上がった。

これで助かる——誰もが、そう安堵して、声を上げたのだ。

一人がサロンを飛び出し、デッキへ上がるうとするのを皮切りに、皆が、先を競うようにして、走り出した。

「待ってください！ 落ち着いて——。走っては危険です！」

「止まってください！」

その制止の声は、何の役にも立たなかった。

一人として、足を止める者はなく、また、止めようとすれば、後ろから突き飛ばされて、怪我を負った。

「押すなよ！」

「痛い！ 打付かって来ないでよ！」

「キャアッ！」

倒れる者、踏み付けられる者、その上に覆い被さって倒れる者——キャビンの中は、人間の醜さを見せつけるように、次々に、自滅の図を書き上げていった。

「エリ阿斯様、こちらへ！」

オーギュストは、小さなエリ阿斯をかばうように腕に抱え、壁沿いに、人並みの中を擦り抜けた。

「……人間っていうのは、たった数時間の暗闇にも耐えられない生き物なんだな」

やっと、人並みの中を脱出すると、エリ阿斯は、冷やかな眼差しで、吐き捨てた。

だが、それは厭味ではなく、人を憫れむ言葉であっただろう。

二人は医務室に戻り、その窓から、海の方こうに目を凝らした。
「見えるか？」

「いえ……。船らしきものは、何も……」

位置が悪いのか、客船の明かりは、医務室の窓からは、覗けなかった。

「どっちにしろ、これで助か——」

そう言つて、部屋の中を振り返つた時であつた。カツ、と赤く開く口が見え、エリ阿斯は、碧い瞳を見開いた。

「オーギュスト、後ろ！」

生臭い息が、顔にかかった。

人間の頭さえ丸呑みに出来そうな口が、貪欲に食料を求めて、襲い掛かる。

刹那、一発の銃声が、駆け抜けた。

赤い口が、涎を撒き散らしながら、後ろに吹き飛ぶ。

その腹には、真紅の血が、滲んでいた。急所ではないが、放つておけば、出血多量で死ぬだろう。

「……後ろに目でもついているのか、おまえは？」

「いえ。条件反射で、体の方が先に……」

「軍で特種訓練でも受けていたような物言いだな。ロシアから脱出して来て、名前も身分も全て変えてる、って言われても信じられるよ」

フツ、と目を伏せるだけの笑みが、落ちた。

床に倒れているのは、船のスタッフ——航海士であろう。二人が出て行つた隙に、この医務室へと入り込み、ベッドの下かどこかに隠れていたのだ。凄まじい形相で、涎を垂らしながら、悶えている。

「足を狙う余裕が……」

「そんなことをしていれば、ぼくかおまえが食べられていたさ。それに……こんな姿で、人を食べながら生きて行くくらいなら、死なせてやった方がいいのかも知れない……」

あの夫人も……。

何より今は、人を殺すことさえためらつてはいられない、異常な状況の中なのだ……。

「ほら、下の足が外せた。いい鉄パイプの出来上がりだ」

クラブのステージの上のスタンド・マイクを手に、龍生は、邪魔な部分を取り外し、得意げな面貌でそう言った。

もう三十にもなるというのに、男というのは、武器を持つことが楽しいらしい。

「……やっぱり、こいつ、ガキのままかも知れない」

ブンブン、とスタンド・マイクを振り回す龍生を見て、魁は重い頭痛に、頭を抱えた。

その傍らでは、克也が、自分の分のスタンド・マイクを用意し終え、

「魁、オレが懐中電灯を持っていてやるよ。おまえも、自分の分を用意するといい」

と、魁の方へと、手を伸ばした。

魁は、二人がスタンド・マイクを確保する間、ずっと懐中電灯で照らしていたのだ。

「ああ」

と、うなずき、克也の手に、懐中電灯を渡す。

生臭い匂いが鼻孔に触れたが、それを口に出して言うことは、しなかった。まだ、さっきの血の匂いが染み付いているのだ、と思っていたのだ。

スタンド・マイクを逆さにして、床に立たせておくための、足の部分を外し始める。

明かりが消えたのは、その時であった。

「あ、懐中電灯の電池が切れたみたいだ」

暗闇の中で、克也が言った。

その声が、どこか愉しげに聞こえたのは、魁にとってだけ、であつただろうか。

辺りは、自分の手さえ見えない闇に、包まれている。

「少し振ってみたら、しばらく点くんじゃないのか？」

龍生が言った。

普段、コンピューターを相手にしている、とは思えない大雑把な台詞である。

「無理みたいだ」

二、三度、風を切る音を立てて、克也が言った。

足は、魁の背後へと、回っている。

暗闇に目が利かないのは、克也も同じだが、魁のいた場所は、明かりが消える前に、はっきりと確認してあったのだ。もちろん、暗闇の中では、多少、目測も狂うかも知れないが、歩いて数歩のところ、となると、大きく狂うことは、あり得ない。

克也は、魁の後ろに立って、鉄パイプと化した、スタンド・マイクを振り上げた。

ニヤリ、と笑みを浮かべ、同時に腕を、振り下ろす。

ブン、と鉄パイプが、風を切った。

ガツッ、という手応えと共に、

「うあッ！」

と、痛みを告げる呻きが、上がった。

「魁？　どうかしたのか、魁？」

龍生の心配そうな——不安を露にする声が、闇に響いた。

「誰か……誰かが……」

左肩に走った凄まじい痛み、に、魁は、訳が解らず、そう言った。

あと少しのズレで、頭を碎かれていたところなのだ。

再び、ブンッ、と風を切る音が、駆け抜けた。

「ぐッ！」

「魁——！」

一体、何が起こっている、というのだろうか。闇しかないステージの上には、恐怖と戸惑いだけが、存在していた。

ブン、ブン——と何度も、鉄パイプを走らせる音が、闇に響く。

もし、まともに頭に喰らおうものなら、それだけで、呆気なく死を迎えていたに、違いない。

「魁！ どうしたんだ？ 返事をしろ、魁！」

龍生の声が、広いホールに、訝した。

魁は、手に持つスタンド・マイクを両手で翳し、降りかかる攻撃を、受け止めた。

キーン、と高い音が、跳ね返った。

すでに何力所も殴られている魁にとっては、その響きさえ、手を痺れさせるものであった。——いや、何力所にも渡る傷痕を。

背中や足、肩——不意に喰らった攻撃は、痛み、というより、じわじわと腫れ上がって行くような そんな痺れを、纏っている。

骨にヒビが入っているのかも、知れない。

攻撃は止まずに、続いていた。

生臭い匂いが、鼻をついた。

その匂いに、魁は戸惑いながら、瞳を揺らした。それは、確かに、今、魁を襲っている人物の息遣いの中から、漂っているのだ。

海の中で腐食した肉のような――それに、血の匂いを混ぜ合わせたような、そんな、何とも言えない、悍ましい匂いが。

だが、一体、誰が、魁を襲っている、というのだろうか。――いや、魁には、その人物が誰であるか、判っていた。今、鉄パイプを振り回しているのが、誰であるのか――。

この暗闇の中、懐中電灯が消えてから、クラブに入って来た人間に、これほど速く、魁を襲えたはずもない。

そして、懐中電灯の電池が切れた、と言ったのは、魁のすぐ側にいた、克也、である。

自分の手の中にあるものなら、スイッチ一つで、いくらでも消してしまうことが出来ただろう。

今、魁を襲っているのは、克也、なのだ。

鉄パイプの攻撃が、不意に、止んだ。

魁は、体を起こそうとしたが、その意志に反して、手足には全く力が入らなかった。思ったよりも、傷の痛みが激しいのだ。

「魁？ 大丈夫なのか、魁？」

龍生が、手探りで、魁の方へと進んで来る。――いや、方向が合っているのかどうかは判らないが、それでも、足を進めていた。

「気を……つけ……。克也が……」

そう言いかけた刹那であった。目の前で、カツ、と赤く、口が開いた。

その口は、不思議なほどに、暗闇の中でも、よく見えた。

生臭い息が、顔にかかった。

赤い口が、魁の顔面を狙って、襲い掛かる。

刹那、地鳴りのような振動が、船を揺らした。

船が跳ね上がったのか、と思えるほどの、衝撃であつた。

「うわっ！」

その衝撃に、体のバランスを崩したのか、克也が前のめりに、空を舞った。

楽器や照明器具が、派手に転がり、あちこちで機材の壊れる音がした。

床に横たわっていた魁はともかく、立っていた龍生は、その大きな揺れに、床の上へと放り出された。

揺れは、随分、長く続いていた。

海の上で地鳴りもないだろうが、そうとしか思えない、凄まじい衝撃であつたのだ。

船が座礁したのかも、知れない。

それが、地鳴りの次に思い当たった、考えであつた。

もし、暗礁にでも乗り上げたのなら、船体が無傷であるとは思えない。船に穴でも空いていれば、数時間後には、確実な死が待っているのだ。

三万トクラスの船ともなれば、そう簡単には沈まないが、それでも、二〇〇〇人を越える乗客が、全て無傷で逃げ出せるとは思えない。

十分近くも、そうしていただろうか。——いや、暗闇の中での時間が、一体、どれくらいのものであつたのかは、判らない。長かつたのか、短かつたのかさえも。

不意に、懐中電灯の明かりが灯り、魁は、ハッとして瞳を見開いた。

「大丈夫か、魁？」

そこには、龍生が立っていた。手には、懐中電灯を持ち、事態を理解できていないように、訝しげに首を傾げている

「龍生……」

「どうしたんだ、その傷は？ 懐中電灯が目の前に転がって来たか

ら、スイッチを入れたら、明かりがついて——」

「スイッチは、オフになっていたんだな？」

魁は訊いた。

「え……？ あ、そういえば、押したら点いて……。スイッチはオフになっていた」

やはり、克也が自分で、懐中電灯のスイッチを切っていたのだ。

「どういうことなんだ、魁？ さっき、暗闇の中で、何が起こっていたんだ？ おまえのこの傷は？」

「……克也だ。響子を殺したのも、多分……」

魁は、暗闇の中で起こったことを、龍生に簡単に話して聞かせた。今の魁の容体を見れば、龍生も信じない訳にはいかなかったのだろう。

「なら、克也は今もここで——」

と、懐中電灯を巡らせる。

ステージの下にいる克也の姿が視界に入ったのは、その時であった。

「……いたよ。克也だ」

その龍生の言葉に、魁は、明かりの方へと、視線を向けた。

そこには、首を曲がらぬ方向へと曲げて、白目を剥いて倒れる、克也の姿があった。

恐らく、さっきの衝撃でステージから落ち、首の骨を折ったのだろつ。

「……俺が克也を突き落として殺した、としか見えない状況だな。誰かに襲われているような一人芝居をして、その隙に」

「その怪我で、か？ それに、ステージの高さは、一メートル程しかないんだぜ。突き落としたくらいで殺せる、なんて思う人間はいないさ。——首の骨を折ってから突き落とした、っていうのなら、別だけど」

「なら、まだ俺の容疑は晴れない訳だ」

「死人に口なし、だからな。——傷を見せてみるよ。それで容疑が晴れる」

龍生は言いながら、魁の服を捲り上げた。

肩や腕、腰、足、背中……至るところに、スタンド・マイクで殴られた後が、残っている。

「……頭に当たってたなら、終わりだったな」

「俺が自分で殴ったのなら、頭は避けるさ」

「自分の背中も、これだけの力で殴れる、ってか？ もう真っ赤に腫れてるぜ。骨にも異常があるかも知れない。——普通の人間に、自分の背中を、これほどの力で殴れる奴はいないさ」

「……実際、殺される、と思ったよ、克也が大きな口を空けて、襲い掛かって来るのを見た時は……。顔のすぐ近く——明かりがなくても、はっきりと見えた。まるで、俺を食べようとしているかのように、襲い掛かって来たんだ……」

「食べる？」

魁の言葉に、龍生は訝しげに、眉を寄せた。

「笑っても構わない。本当に、食べられる、と思ったんだ……」

人間の口が、あれほど間近に迫って来るなど、誰が想像し得たであろうか。しかも、骨の限界を超えて、顔全体が、口と化したように開くなど。

これは、悪い夢なのではないだろうか。

そんな思いが過つたのも、現実逃避、というより、この現実が、あまりにも悪夢に近かったせいであつたかも、知らない。

「とにかく、これで全部、終わったんだな」

龍生が言った。

「ああ。克也の口からは何も聞けなかったが――。もう正気ではなかっただろうからな」

人間を食べようとするなど、正気のままでは出来ることではないのだ。

「それはそうと、さっきのあの衝撃は、何だったんだ？」

デッキの上は、我先に、と駆け上がって来た有閑人種たちで、すでに一杯になっていた。

船が近づいて来ている、と聞いて、皆、救出されることだけを信じて、駆け上がって来たのだ。

もちろん、その間には怪我人も続出し、悲惨な光景が、多々見られた。

しかし、それも、自業自得で片付けられることであり、少なくとも、同情する気にはなれなかった。

そして、誰もが、その異変に気づくのに、そう時間はかからなかった。

船の明かりが、見えないのだ。——いや、船は確かに存在している。大きな影となつて、もう、すぐそこまで近づいて来ている。

だが、それでいて、明かりが一つも、見えないのだ。あれだけの大型客船なら、必ず明かりが灯っているであらうに。

「何だ、あの船は？ 明かりが一つも点いていないじゃないか」

「あれ、本当に船なの？ 岩か何かが、海面に突き出しているんじゃない……」

その囁きの通り、目の前の影は、船というより、大きな岩の塊、というように、見えた。

「どう思う、オーギュスト？」

人の少ない一角に立ち、エリアスは、目の前の影のことを、問いかけた。

「三万トンクラスの大型客船でしょう。近くに見えるのは、船自体が大きいので、実際には、衝突するまで、まだ少し余裕があります」

「衝突？」

エリアスは、その言葉に、目を瞠った。

「……考えたくはありませんが、このクルーザーは操舵が利かず、向こうの船も、普通とは思えません。明かりの灯っていない客船など、見たこともありませんから。人がいるのなら、明かりは必ず灯っているでしょうし——。あの大型客船に打付かつては、このクルーザーも無事では済みません」

オーギュストは、難しい顔で、それだけを告げた。

操作の利かない船同士では、避けることも出来ないのだ。

見たところ、このクルーザーは、あの大型客船に向けて、真っすぐ、進み、あの大型客船も、このクルーザーの方へ、避ける様子もなく、近づいて来る。

それは、影が大きくなっていることでも、容易に知れた。

「——幽霊船かな？」

「今なら、何でも信じられますが」

そのオーギュストの返答に、エリアスは、クスっ、と笑みを零した。

「ボートで非難しようとしても、衝突の煽りを受けて、転覆するのがオチだな」

「皆が、あなたのように思ってくださいといいのですが」

オーギュストが言った時であった。

「おいつ、このまま進んだら、あの船に打付かるんじゃないのか！——
一人が、大きな声を、張り上げた。

それを皮切りに、そこかしこで、どよめきが起こり始める。

「あの船は何をしているんだ！ 何故、もう少し進路を切らない！」

「あんな船に打付かったら、このクルーザーはおしまいだぞ！」

「ボートがあるわ！ それに乗って逃げれば——」

最早、エリアスやオーギュストが何を言っても、止められるような状況では、なかった。

「ボートには全員、乗れないぞ！　どうやって、乗る人間を決めるんだ？」

「女性が優先されるべきよ！　男の人は後から——」

「そんな決め方があるものか！　私は、大切な仕事をいくつも抱えているんだ。その私が死んだら、どれほどの損害が出るか——」

「弱い女性を優先するのが、当然じゃないの！」

「何だと！　普段、男女同権だの、フリー・セックスだの言っておくせに、こういう時だけ、女という言葉を使いおって——」

これが、スウェーデンの要人、として通っている人物たちの言葉なのであるうか。——いや、もちろん、こんな状況では、落着く対処できる人間の方が珍しいのだから、それにしても、部下やマスコミには、見せられない姿であったに、違いない。

避難ボートの周りには、どつと紳士淑女の群れが、押し寄せていた。

「……こういうのを見ると、生き残りたくなるな」

エリアスは、侮蔑の言葉を、吐き捨てた。

「大奥様を、お一人になさる積もりですか？」

「……そうだったな。ぼくには、おばあさまがいる」

「参りましょう。救命胴衣を付けておいた方が、良さそうです」

船の影は、もう随分、大きくなっていた。

どう足掻いても、衝突を避けることは、出来ないのだ。

「ダイナマイトで、向こうの船を吹き飛ばす、つのは、どう？」

皮肉な口調で、エリアスは言った。

「硝酸が、あと一〇〇倍もあれば」

「残念」

本気なのか、冗談なのか、二人は、のんびりとしている、としか思えない会話を交わしながら、救命胴衣を取りに戻った。——いや、その前に、船のスタッフに、救命胴衣の装着を呼びかけてもらったが、その言葉に耳を貸す者は、数人しかいなかった。皆、救命胴衣を取りに戻っている間に、ボートに乗り遅れるのではないかと、

そんな猜疑心に凝り固まっていたのだ。

結果、海に落ちる者、殴り合いのケンカを始める者——と、デッキは、収集のつかないパニックに、襲われていた。

もしかしたら、救命胴衣をつけていれば、全員が助かったかも知れない、というのに。

ボートに乗り込もうとしていた者たちは、その場で何人かが海に落ち、定員オーバーで、目前の大型客船と衝突する前に、最早、危ない状態になっていた。

「三万トンクラス的大型客船とはいえ、このクルーザーと打付かつては、無傷で済まないでしょう。向こうの船に乗り移ることが出来たとしても、樂觀は出来ません。それに——。明かりが灯っていないのが、気になります」

エリアスの救命胴衣のベルトを嵌めながら、オーギュストは言った。

「向こうの船でも、このクルーザーと同じことが起こってる、ってか？」

「その可能性はあります」

あの蒼く仄光る不気味な霧が、向こうの船の前にも現れていた、という可能性が。

「……厄介だな。三万トシクラスの客船なら、一〇〇〇人——いや、二〇〇〇人は乗っている。その内、何人が霧に濡れているか、想像もつかない」

「かなりの広さがあるだけに、死体も——血の跡も、すぐには発見されないでしょう。化け物と化した人間がいることを知らない者も、大勢いるはずです」

危険に気づいていない、ということとは、用心していない、ということに外ならないのだ。しかも、客のほとんどが自室に戻っている、とすれば、その中で、発見されずに喰い殺されている人間が、何人もいるはずである。

特に、シングル・ルーム——。

部屋割を知ることが出来る立場の人間が、あの霧に濡れていた、とすれば、まず、客を自室へ戻らせて、それから、シングル・ルームを襲おう、とするだろう。

乗務員がノックをすれば、客は疑いもなく、ドアを開く。普通の客が、霧に濡れている以上に、厄介なのだ。

「乗務員の誰かが、霧に濡れていると思うか？」

エリアスは訊いた。

「一〇〇パーセント、間違いないでしょう。他の船が接近している、というのに、何の信号も出していませんでしたから」

普通なら、何かの明かり——懐中電灯でも、松明でも用いて、このクルーザーに信号を送っているはずなのだ。その証拠に、こちらのクルーザーでは、乗務員が、向こうの船に、S O Sを送り続けている。

それがない以上、その手段を知る乗務員が、全て殺されてしまっているか、霧に濡れてしまっているか——向こうの船に乗り移ることが出来ても、事態が変わらないことは、明らかであった。

「唯一の救いは、霧が出たのが暗い時間で、景色を見にデッキ上がつていた人間が、少ないかも知れない、ということと、客船には、船内にいくらかでも遊び場がある、ということだな」

「ええ。大抵の人間は、船の中にいたでしょうから――。もうそろそろ衝突する時間です」

客船は、そのオーギュストの言葉の通り、すぐ鼻先まで、近づいていた……。

暗い中、距離感もなく、大型客船とクルーザーが、衝突した。

互いに、船首を掠めるようにして、接触し、大きな波を、巻き起こす。

その際の衝撃は、凄まじいものであった。船が数メートルも飛び上がったのか、と思えるほどに。

その煽りと、コンクリート壁のような波を喰らい、ボートは、呆気なく転覆していた。

乗っていた者たちは、救命胴衣も付けておらず、手の届く範囲に船はなく、また、もがくことも出来ない波に囚われ、為す術もなく、浮き沈みしていた。

水、といっても、高いところから、頭上に降りかかる衝撃は、凄まじいものなのだ。

波に吞まれて姿を消す人間は、あつと言つ間に、増えていた。

その中、まだ海面に顔を出していたバーレンは、運の良い方であったのだろう。肺に入った水に噎せ返りながらも、まだ何とか、海底に引きずり込まれることなく、踏ん張っている。

「たつ、助け――」

高い波に押されながら、暗い海に、助けを求める。

人間、自分だけは死んだりしない、と思っっているものなのだ。

しかし、他人を押しつけてボートに乗り込んだ人間を、誰が助け

てくれる、というのだろうか。

反りくり返って吐いた唾は、必ず己の顔にかかるのだ。

だが、バーレンは、まだ死ぬ運命ではなかったのかも、知れない。目の前に、救命胴衣を付けた人間が、現れたのだ。暗いせいで、顔までは見えないが、オレンジ色の救命胴衣の輝きは、波の合間に、はつきりと見えた。

「助け——ゴボ……っ。助けてくれ——っ！」

水を呑み、また、吐きながら、バーレンは、その人物に救いを求めた。

その人物が、バーレンの方へと、近づいて来る。

そして、顔が、見えた。

「マルセ……」

それは、紛れもない妻の顔であつた。

「ああ、良かった、マルセ。早く助けてくれ」

波間に顔を出しながら、バーレンは、自分がその妻にどんな仕打ちをしたのかも忘れたかのように、そう言った。

きっと、彼は本当に、そんなことなど、もう忘れているのだろう。もしかすると、あんなことは、彼には、塵ほどの罪悪感にもならないことであつたのかも、知れない。

妻なら、夫の言うことを利くのが当然だ、と――。

「捜していましたのよ、あなた」

マルセは言った。

波の中でも、少しも濁っていない声であることが、不思議であつた。

もちろん、今のバーレンには、そんなことは、大した問題ではなかつたが。

「助け……っ。早く！」

「ええ、解つてしましてよ、あなた。――でも、あなたの苦しむ顔を見るのが、愉しくて」

心底、愉しげな面で、マルセは言った。

「何を……っ！ さつさと助けんか！」

マルセの表情は、変わらなかつた。波間に浮き沈みするバーレンの惨めな姿を、冷めた笑いで、観察している。時には、クツクツ、と声を立てて笑い、手を伸ばしては、引っ込めて――。

バーレンを助ける積もりなどないのだ、彼女は。

だが、それは、波に襲われているバーレンには、解らないことであつただろう。助けを求め、時には懇願し、罵倒し、思いつく限りの言葉を並べたてる。

もちろん、そんな時間が長く続くはずも、なかつた。

バーレンの力も、やがて、尽き、恨み言を最後に、波に沈んだ。

「あら、もうおしまいなの？　つまらないのね」

マルセは、不満を零すように唇を歪め、そして、さらに楽しいことを思いついたように、唇の端を持ち上げた。

「あなた、一緒に、あの船に行きましょう。あなたにも、とてもおいしいお肉を食べさせてあげるわ。だって、夫婦ですもの、私たち……。そうでしょう、あなた？」

「く……っ！」

「大丈夫か、魁？」

二人は、クラブを後にして、デッキの一つに上がって来ていた。鉄パイプで殴られた魁の傷は、時間を追うごとに痛みを増すように、落ち着きを取り戻した今、痺れていた部分は、全て痛みに変わっていた。

それでも、二人が部屋に戻らず、こうしてデッキに出て来たのは、さっきの衝撃の原因を、確かめるためであった。

もちろん、それは二人だけでなく、デッキには、大勢の人間が、押し寄せて来ていたのだが。

その内の一人に押され、今、魁が呻きを上げた、という訳である。

「部屋に戻った方が――」

「黙って船が沈むのを待つてろ、ってか？」

この性格、誰かに似ている。

「そういう、人の親切を無にする性格が嫌いなんだよ、俺は」
相変わらずの、遠慮のない龍生の言葉に、魁は、フツ、と鼻を鳴らした。

デッキの一角で悲鳴が上がったのは、その時であった。

「何だ？」

「さあな。ここからじゃ見えない」

すでに、その辺りには、大勢の人間が集まっている。

それが、内臓を喰い荒らされた日本人女性の死体を囲むものであることは、魁と龍生には知りようもなかった。

「先に、向こうへ行ってみよう。あつちは、人が集まっていて、行けそうもない」

二人は、船首の方へと、足を向けた。

このクラスの船になると、デッキの上に立つだけで海を見渡す、ということは出来ないのだ。ある程度、柵のほうへ行かないと、水平線しか見えない、ということになる。

「クルーザーだ！」

誰かがその声を上げた途端、ドン、という振動音と共に、いきなり海が明るくなった。

オレンジ色に染まった、と言ってもいい。

そして、また船が大きく、揺れ始めた。

「うわっ！」

魁と龍生は、共に床の上へと、投げ出された。——いや、感覚的には、吹き飛ばされた、という感じであった。

だが、反対側では、もっと悲惨なことが起こっていた。さっき、誰かが悲鳴を上げた一角で、蟻のように群がっていた人々が、折り重なるようにして、倒れたのだ。

そこかしこで、悲鳴や呻きが上がり、海に投げ出された者も、何人かいた。恐らく、死者も出ていただろう。怪我人は、数えていられなかったに、違いはない。

そして、折り重なるようにして倒れた数十人——或いは、数百人の客たちを、全て立ち上がらせてやることは、今の魁や龍生には、無理であった。

「……向こうに行ってたなら、今頃、あの中の一人になってたな」
龍生が言った。

「……で、いつまで、俺の上に乗ってるんだ？」
は、魁。

倒れた時、魁も、龍生の下敷きになっていたのである。

「え？ ああ、そうか。別に、犯そうと思って、上に乗った訳じゃない——」

「頼むから、そういう冗談はやめてくれ……」

再び、魁の頭に頭痛が生じていたことは、言うまでもない。

「そついや、おまえは大学時代から、男にラブレターをもらってたもんな」

「——お互い様のはずだ」

自由課題の時、互いのヌードを描き合って、提出したことから、二人の元に、そういうラブレターが来るようになったのだ。

もちろん、どれも皆、無視したが、いきなり、『抱き締めてくだ

さい』と言われることを筆頭に、その手の男に言い寄られることが、後を断たなかった。

「響子と真弓は、言い寄って来る男を退けるのに、本当に役に立ってくれたよな。——でなきゃ、俺もおまえも、今頃カマを掘られて、人生変わってたかも知れないぜ」

「……思い出したくもない」

「まあ、おまえが学内の女のヌードを描いて提出したら、もっと騒ぎになってだろーけどな。女のイヤガラセは陰湿だし、モデルになつてくれた女に何をするか、判ったもんじゃない」

「……男も似たようなものさ」

克也のように、あんな酷い殺し方をしてしまう人間もいるのだ。

二人は、それを口に出さず、明るく染まる海の方へと、足を向けた。た。

怪我をしている魁では、折り重なって倒れている人間を、助けてやることも出来ず、取り敢えず、その不審の方へと、足を向けたのだ。

龍生は——魁の松葉杖、のようなものである。

そして、二人が見下ろした海の上には、火を吹くクルーザーが、浮かんでいた。——いや、かつてはクルーザーであったものの、というべきだろうか。今は炎に包まれ、凄まじい黒煙を纏っている。

さっきの音と振動は、そのクルーザーの一角が、爆発したためのものであったのだ。恐らく、燃料に何かが引火して、こういう事態になったのだろう。

「ロープと浮輪だ、龍生！ 海に投げ出された人間がいる」

「あ、ああ」

それからは、もう他のことを考える余裕は、全くなかった。

船の一方では、折り重なって倒れる人々の救助、もう一方では、クルーザーから投げ出された人々の救助——と、それだけに時間を費やしていたのだ。

もちろん、魁や龍生だけでなく、他の人間も——。

そういう状況であつたため、裸の女と、意識のない紳士が引き上げられても、誰も不思議とは思わなかった。恐らく、風呂に入っている途中だったのか、夫婦で楽しんでいる最中だったのか、それを追及しようという者など、なかったのだ。その女が、裸でいたにも拘わらず、きちんと救命胴衣をつけていたとしても……。

そして、引き上げられたほとんどが大人であつたが、その中には一人だけ、小さな子供が混じっていた。淡い金髪と、碧い瞳をした、お人形のように愛らしい、男の子（だと思つ）である。

「可哀想に、まだ子供じゃないか。——ほーら、もう大丈夫だぞ。寒いだろ？　今、上着を貸してやるからな」

龍生は、着ている上着を脱いで、その子供の肩に、羽織らせた。そして、可愛い金髪を、くりくりと撫でる。——と、その子供は、龍生の手を、バシ——つ、と叩いて振り払った。

「失礼な奴だな。人を小さな子供みたいに。これだから、アジア人は」

スウェーデン語が解らないことだけが、龍生に取つては、救いの状況であつただろう。解っていれば、その子供を殴っていたかも、知れない。

「エリアス様！」

すぐ後から、船へと上つて来た男が、その子供——エリアスと呼んだ子供の言葉に、目を瞠った。

「その方にお謝りください、エリアス様！　助けていただいた方に、そのような態度を——」

「ふんつ。そいつが先に、ぼくに失礼な真似をしたんだ」

エリアスは、つん、と鼻を持ち上げている。

龍生には、二人の会話は解らなかったが、それでも、その子供に馬鹿にされていることだけは、雰囲気からして、解っていた。

「……この可愛げのないガキ、誰かに似てる」

見た目だけは、お人形のように可愛いのに、性格の方が、それに伴っていないのだ。

「日本の方ですか？」

不意に、流暢な日本語が、耳に届いた。少年に何かを言っていた男である。恐らく、龍生の口にした言葉を聞いて、日本人だと判断したのだろう。

「え、あ——」

龍生は慌てて、口を噤んだ。まさか、日本語が解る、とは思っていなかったため、そのガキを——いや、子供を、『可愛げのないガキ』呼ばわりしてしまったのだ。

「馬鹿な奴」

と、傍らで呟いたのは、魁である。

所謂、口は災いの元、という奴だ。

だが、男は、そのことを気にしている様子もなく——胸の内では、龍生の慌てように笑いを噛み殺していたかも知れないが、

「申し訳ございません。エリアス様は——ダールクビストは、悪気があった訳ではなく、その……子供扱いされることが嫌いで……。私は、オーギュストと申します。助けていただいて、ありがとうございます」

「い、いえ、こちらこそ失礼なことを……。仁龍生です。——こっちは、秋月魁。——日本語がお上手ですね」

子供相手に腹を立てたとあっては、さすがに少し恥ずかしいのか、龍生は、似合いもしない褒め言葉を、口にした。もちろん、実際に褒めるほど堪能な日本語でもあったのだ。

「海外へ出ることが多いので、大抵の国の言葉なら——。ダールクビストの方も、日本語は出来ませんが、十二、三カ国語くらいなら」

「十二、三……カ国？」

龍生など、日本語を入れても、英語、フランス語、ドイツ語、中国語……と、五カ国語がいいところである。しかも、その内の二つ

は、かなり、危うい。

その子供が、子供扱いされることを嫌うのも、ある意味では当然のことであつたのだらう。当人は、すっかり大人のつもりでいるはずなのだ。そして、それだけのものを持っているのだから。

「日本の第一外国語は、確か……英語でしたか？　英語なら、ダールクビストも解りますので」

一体、どういう人物だというのだろうか、この二人は。

一見して、親子のようにも見えるが、親が、子供を姓で呼ぶ、というのも、妙なものだらう。

口を開いたのは、魁であつた。

「ほら、茫としてないで、次だ」

と、素っ気なく言う。

龍生は、ムツとし、

「怪我をして役に立たないクセに、偉そうにするなよっ」

「怪我？」

その言葉に、オーギュスト、と名乗った男の、表情が、変わった。エリアス、という子供の方へと視線を向け、何やら、一言三言、言葉を交わし合っている。

だが、その理由を訊くのは、救助が一段落ついてからに、なった。その間、彼らはずっと、魁と龍生の側を離れず、何かを訊こうとするかのように、救助を手伝いながら、その場にいた……。

「さっきの……怪我、というのは、髪や服が湿って、口からは生臭い匂いをする人間に、食べ——咬みつかれようとした時に、受けたものでは……」

「え？」

四人は、デッキでの救助を終え、キャビンの、魁の部屋へと戻って来ていた。

そこで、零れ落ちたのが、そのオーギュストの言葉である。

魁と龍生は、デッキでのエリアスとオーギュストのように、互いに顔を見合わせていたが、どちらからともなく、あの時の克也の狂気を話し始めた。

そして、聞いたのである。あの克也の狂気が、蒼く仄光る、あの不気味な霧のせいであつたことを……。

もちろん、普通なら、信じはしなかつただろう。

だが、魁も龍生も、実際に、あの不気味な霧を、見ていたのだ。

二人の言葉を、馬鹿馬鹿しい、と笑い飛ばすことは、出来なかつた。それからの話は、簡潔で短いものであつた。現実を受け入れている以上、長々と説明する必要もなく、互いに、同じ出来事に打付かつた、ということを確認するだけで、良かつたのだ。

そして、その間、エリアスは、何故か、魁にだけは好意的であつた。

「子供にまでモテるのか、おまえは」

と、龍生が小声で悪態づいたのも、仕方のないことであつただろう。龍生の方は、すっかり嫌われてしまっているのだ。

そのエリアスも、今は、魁のブルブルのセーターを着せてもらつて、まるで女の子のような愛らしさで、ベッドに、ちょこん、と腰掛けている。

オーギュストの方は、筋肉の付き方が、魁とも龍生とも違つのか、

セーターはともかく、ズボンの方には、ちょっと無理があるようで、窮屈そうな印象を受ける。

魁にしても、龍生にしても、決して貧弱、という体型ではないのだが、そのオーギュストという男は、世の中年男性の常識を越えた、見事な体格をしていたのだ。それも、スポーツで鍛えた、とかいうレベルのものではなく——かといって、ボディ・ビルダーのようなグロテスクな筋肉でもなく、一切の無駄のない、そして、機敏な動きを妨げない、戦うために造られたかのような、体軀を。

何より、二人が驚いたのは、オーギュストの肩についた、傷であった。包帯が濡れてしまったため、それを解く時に見えたのだが、そこには、はつきりと、人間の歯型がついていたのだ。

「今、一番、厄介なことは、引き上げられた人間の全ての髪が濡れ、見ただけでは、誰が霧に濡れた人間なのか、解らなくなってしまう、ということですよ」

傷の話をした後、オーギュストが言った。

何故だか、その傷のことには、あまり触れてほしくはない様子で、それから話を逸らした、という風にも、見えた。

傍らでは、エリアスが、キュっ、と唇を結んでいる。

「なら、あんたたちが霧に濡れた人間でも、俺たちには解らない訳だ」

龍生は言った。

「それは……」

「馬鹿な奴。話を聞いていなかったのか？ 霧に触れた人間は、生臭い匂いがするんだよ」

生意気な口調で——しかも、龍生以上に流暢な英語で、エリアスが言った。その表情には、さっきの「いたたまれなさ」のようなものは、微塵もない。

「エリアス様！」

と、オーギュストが咎めるようにして吐いた言葉にも、
「ふんっ」

と、鼻を持ち上げている。

やはり、可愛くない。

「何で、毛も生えていない子供に、馬鹿にされなきゃならないんだ、俺は……」

龍生は、その怒りと情けなさに、ぷるぷると肩を震わせた。

エリアスは、といえば、

「毛……？」

と、大きなセーターを捲り上げ……魁は、

「余計なことを言うなよ、龍生。それでなくても、子供扱いされるのが厭みたいなのに」

と、小声の日本語で、睨みを利かせる。

大人でない部分について、反論できないらしいエリアスは、また、キュっ、と——今度は悔しげに、薄い唇を噛み締めている。

この四人、結構、いい取り合わせかも、知れない。もちろん、難しい性格の人間がまた一人増えてしまったことに、龍生が喜んでいたりたかどつかは、疑問だが。

「見ろよ。傷ついてるじゃないか。おまえが、余計なことばかりを言うから」

魁は、龍生の耳元で、チクリチクリ、と刺すように、言った。

龍生も、さすがに罪悪感が募ったのか、

「あ、あの、えーと……」

「第一外国語の英語もロクに話せない奴よりマシだから、いいや」
当のエリアスは、何とか心の整理がついたようで、セーターを降りして、満足げに言った。

もちろん、龍生は、ムツとした。

「話せない訳じゃないつ。何を言おうか考えてたんだっ」

「ほら。また、子供の言うことにカツと——」

そこまで言いかけ、魁は慌てて、口を噤んだ。

何しろ、子供扱いされることが、何より嫌いなのである、目の前の少年。
だが——。

「ホント、大人気ない奴」

エリアスは、気にも留めていない様子で、そう言った。

どうやら、都合の良い時は、子供で構わないらしい。

「……ダールクビストのガラス王国では、どんな躰をしてるんだ？」

その少年が、かのガラス王の孫——いや、今はガラス王そのものであることは、龍生も魁も、オーギュストの口から聞いていた。

「は……。私はただの秘書で、教育係ではありませんので、その辺りのことは……」

「日本人は、秘書の仕事も知らないのか？ やっぱり、馬鹿だな」

「エリアス様！」

何かと問題の多い子供のようである。

龍生は、傍らの魁へと視線を向け、

「おい、魁。おまえが馬鹿呼ばわりされてるぜ。この場で日本人は、おまえだけだからな」

「え……？」

と、眉を持ち上げたのは、エリ阿斯であつた。

「残念だつたな、ボーイ。俺の血は、メイド・イン・チャイナだよ。名前も、中国語読みにすれば、レンロンション仁龍生」

龍生としては、初めて、その子供に勝利した、瞬間である。

まあ、子供相手に、ちよつと、みつともない気もするのだが、それでも、いい気分である。

エリ阿斯は、心底悔しそうに黙っているから、これも、結構、可愛い。

「馬鹿に、馬鹿にされるのが、一番、悔しい……」

やはり、可愛くないかも、知れない。

まあ、この場合は、いい勝負であつただろう。

「オーギュスト、このベン・ジョンソンとかいう奴、囷にしたら？」

「ベン・ジョンソンじゃないっ！ レン・ロン・ションだっ」

うーん、どうも、エリ阿斯の方が、一枚も二枚も上手のようである。

「ともかく、今は、助かる道を探すことが先決だ。食人鬼だけでなく、船まで沈むとなれば、ここにずっと閉じこもっている訳にはいかない」

煙草を銜えながら、魁は言った。

エリ阿斯が、クン、と匂いを嗅ぐように、愛らしい鼻を動かした。北欧の国々は、喫煙のマナーに煩いのだ。それでなくても、子供がいる場所である。

それに、その子供、妙に、周囲の人間を、自分のペースに引き込む力を持っているのだ。視線一つ、仕草一つで、側にいる人間を動かしてしまう、というような。

それも、ガラス王の名を継ぐ者としての才能、なのだろうか。

「あつと、今すぐ消すから——」

「……別にいい」

「へ？」

思いもかけないエリアスの言葉に、魁は、ポカンと口を開けた。

「何で、魁にはそうやって甘いんだよっ」

その龍生の言葉通り、もし、煙草に火を点けていたのが龍生であつたなら、エリアスは、一言くらい文句を言っていたかも知れない。

エリアスは、つん、と横を向いている。

「まあ、今は、ミスター・秋月のおっしゃった通り、助かる道を探すのが先決で……」

オーギュストも、かなり肩身が狭そうで——いや、表情にはそんなものなど映ってはいないのだが——一応、それから話を逸らすように、

「客船の構造なら、大体、見当がつきますから、私とダールクビストで船内を見て来ます。あなた方はここで——」

「子供を——彼を連れて行くのは危険だ。船内は、ぼくと龍生が見て来ますから、あなたは、彼と一緒に、ここに」

「ですが、あなたは怪我人で……」

「お互いに」

「私は肩だけですから、不自由なく動けますが——」

「ぼく、ミスター・秋月とここにいる」

そう言つて、魁の手をつかんだのは、エリアスであつた。

「は？ あの、エリ阿斯様……」

「怪我人と子供が残るのが、当然だろ？」

「はあ、それは、まあ……」

オーギュストの顔は、不安げである。そして、疑い深げでも、ある。

何しろ、聞き分けがいい時のエリ阿斯が、一番、怖いのだ。

オーギュストの心配も、エリアスの安否、というより、エリ阿斯が、魁に何か迷惑をかけるのではないか、ということが中心であった。

「なら、早く行けよ。この客船には、車も一緒に積み込んであるはずだ。無線機を載せてる車があるかも知れない。そうでなくても、発煙筒や、赤色灯を――。霧に濡れていなければ、の話だけど――。それから、彼の傷を手当するのに必要な薬」

彼は本当には、十一、二歳の子供である、というのだろうか。

てきぱきと指示をするエリアスを横目に、今度ばかりは、龍生も、言葉なくそれを聞いていた。

何故だか、その少年と、その秘書の男の言う通りにしていれば、助かるのではないか、という気もしていた。

「かしこまりまた。ミスター・仁は危険ですから、私が一人で――」

「俺も行くよ。ここにいと、気が短くなりそうな気がする。それに、あんたんとこのお坊っちゃまも、俺に行け、って言ってるみたいだし」

龍生は、ベッドの上から、腰を上げた。

エリ阿斯が手を振って見送っていたことは、言うまでもない。

二人は部屋を、後にした……。

かくして、一人の子供の命令の元に、大の大人たちは文句も言わずに、従うことになった訳である。

「あんとこのエリアス坊っちゃま、ゲイじゃないだろうな？」

「は？」

「いや、いい。どうせ、襲われるのは、俺じゃない」

気に入られているのは、魁、である。

龍生とオーギュストは、暗く閉ざされたキャビンの階段を、下層の車輛スペースへと向かって、降りていた。

あのエリアス坊っちゃま、生意気な子供ではあるのだが、言っていることは、全て正しく、冷静な判断によって打ち出された、最良の手段であるから、龍生も文句が言えないのだ。

車のことなど、龍生は考えてもいなかったし、せいぜい、スタン・マイクを武器にする、ということをお願いしたくらいである。

これでは、どっちが子供なのか、判りもしない。

住む世界が違う、といか、レベルが違う、というか、彼が、わずか十一、二歳でガラス王の名を継いだ、というのも、うなずける。

彼は、血の繋がりだけで、ガラス王の名を継いだ訳ではなく、その才能を持ってして、ガラス王国のトップに立ったのだ。

龍生や魁が手に入れることが出来なかった、天才、という輝かしい響きを、我が物にして。

「あんだみたいな有能な人間が、何故、あの子供に支えているのか、解るような気がするよ」

龍生は言った。

心の中で、俺はごめんだけど、とも付け足した。

「……。私は、この一年、あの方の秘書となったことを、喜ばしいと思ったことは、一度もありませんでした」

「え？」

「あの方は、大奥様——お祖母様以外の人間には、決して心を開かれず、親戚方はもちろん——中でも、私を一番に嫌っておいでし

たから——。もちろん、お祖母様の前では、そんなことは顔にも口にも出されませんでした」

これほど優秀な男を嫌う理由がある、というのだろうか。——いや、龍生のような良い人間を嫌い、魁のような無愛想な人間を好んでいるのだから、有り得ることなのかも、知れない。

それでも——。

「あんたが、あの子供を嫌う理由なら、解るような気もするけど、その逆は……」

龍生は言った。

「エリアス様は、お寂しい方です。ご両親の顔も、写真でしかご存じなく、お祖父様も亡くされ……。体調を崩されたお祖母様にも、心配をかけるようなことは、何も言えず……。かといって、他に、悩みを打ち明けられるようなご友人も、お持ちではありません。あの方が、すっかり口になさった一言が、誰を通して、どこに流れないとも限らないのです。——普通の子供なら、何を言ったところで許されるでしょうが、あの方は、ダールクビストの当主で、ガラス王です。どんな些細なことでも、ダールクビストのガラス王国を潰そうとする人間には、格好の攻撃ネタになります。——あの方は、それを全て承知しておいでなのです。ですから、誰も信用なさらず、何も口にされず、他人を突き放して生きておいでです」

「だけど、あんたは、あの子の秘書で——」

「はい。これからは、秘書として努めていけると思っております。皮肉なことに、この事件を切っ掛けに……」

「んー……。今いち、よく解らないけど、まあ、やっていけるのなら、構わないさ。あのお坊っちゃまも、あんたがいれば安心だろうからな」

彼らが住んでいる世界は、一般人の常識とは掛け離れた、全く別の世界なのだ。恐らく、自由など一つもない、責任だけが覆い被さって来るような、厳しい……。

「あの方には、ダールクビストの事業に何の利害もないあなた方との時間の方が、余程、落ち着けるものだと思いますが——。言葉も選ばず、何を言うことも許される時間は、あなた方が思っておられる以上に、エリアス様には楽しい時間のはずです」

「……」

龍生や魁が思っている以上に——。

大人として振る舞わなくてはならない子供は、何より、不憫なも

のであるのかも、知れない。

そして、龍生も、あの子供の生意気さにも、少くくは目を瞑ってやるう、という気になっていた。飽くまでも、少し、だが。

何しろ、自分より頭がいい、というのが、気に入らない。

まあ、それを差し引いても、人に愛されて当然の——人に優しくされて当然の、哀しい少年なのだが。

それに、そんな話を聞いた後では、嫌でも見方が変わって来る。

一筋縄ではいかない少年、とはいえ、慣れてくれば結構……慣れるだろうか。

龍生に懐いてくれるかどうかは、向こうの意志次第である。

二人は、そんな話をしながら、下層の車輛スペースに降りていた。車特有の匂いが渦巻く中、懐中電灯を手に、足を進める。

アンテナを頼りに、無線機を載せていそうな車を捜す——が、オーギュストが足を止めたのは、新車らしきボルボの前であった。

無線のアンテナは、ついていない。

「懐中電灯を」

「え？ でも、これに無線は……」

無線はついていない、と言おうとしたが、龍生は、言われるままに、懐中電灯の明かりを、オーギュストの手元に向けた。

オーギュストは、器用な手つきで、車のキーを壊している。

巨大財閥の会長秘書になるためには、そんな才能もなくてはならないのだろうか、とも思ったが、龍生は、何も言わないことにした。実際、このオーギュストという男、一つや二つの質問を持ち出したところで、得体の知れそうにない人物なのである。

鍵は、五分と経たない内に、呆気なく開いた。

そして、その中、オーギュストが取り出したのは、ダッシュ・ボードに備えてあった、懐中電灯であった。

「明かりは、いくつあっても便利なものですから。新車なら、トラックに発煙筒や、赤色灯も備えてあるかも知れない」

本当に、同じ人間なのだろうか、彼は。

「何か……助かりそうな気がして来た」
龍生は、希望を見るように、呟いた……。

a c t 5 6 (後書き)

近日中に、完結済小説の『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは、活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

部屋の中は、静かであった。

龍生が出て行ったせいでもあるし、エリ阿斯が“いい子”にしていたせいでも、ある。

今も、エリ阿斯は、部屋の中をキョロキョロと見渡し——見渡すほどもないのだが、一応、懐中電灯を巡らせて、興味深げに、

「ぼく、《Lux Room》って初めてだ」

と、感激するように、頬を染めた。

ここは一応、下のA・B・Cルームよりも料金が高く、デラックスな部屋なのだから、褒めてもらえる、となると、魁も嬉しい。

だが——。

「いつも《Suite》ばかりだったから、こんな小さい部屋、何か、ワクワクする」

忘れていたが、この子供、大金持ちの孫——いや、今は当主なのである。庶民には高い部屋でも、この子供には、安い部屋の一つ、なのであろう。

「他の部屋って、こんな風になってるんだ」

Cランク・ルームの倍近い料金の《Lux Room》とはいえ、さらに倍近い料金の《Suite》と比べれば、見劣りもする。

「あんまり喋らないんだね、ミスター・秋月？」

碧い瞳で魁を見上げて、エリ阿斯が言った。

まあ、龍生なら文句の一つや二つ——五つくらいは言っていたかも知れないが、魁は、思ったことを何でも口にしてしまうような性格でもない。

「ん、ああ。よくそう言われる」

実際、子供の相手も、魁より、龍生の方が、うまいのだ。

今回は、なかなか苦戦しているようだが。

「ハクシュン」

と、何とも愛らしいクシヤミが、明かりを揺らした。

夏とはいえ、海に落ちた後である。

「少し眠った方がいい。大人でも、起きているのは辛い時間だ。ベッドに入れば、体も温まる」

それ以外に、気の利いた言葉もかけられないのだ、魁は。龍生なら、もっと色々世話焼いてやれたのだろうか。

エリ阿斯は素直に、ベッドに入った。

服が濡れてから、魁の着替えの中にも、エリアスのサイズに合うようなズボンがなく（当然だが）、エリ阿斯は、大きなセーターを被っただけの格好である。足元も、随分、冷えているだろう。

特に、暗い時間の海は、ひどく寒い。——そう。空はまだ、暗いまま、なのだ。

エリ阿斯が、毛布の中から、手を伸ばした。

何も言わなかったが、魁は、その手を握り返した。

それだけで安心するように、エリ阿斯が静かに、目を瞑る。

まだ本当に子供なのだ、彼は。

それに、余程、疲れていたのだろう。十分と経たない内に、スウスと寝息を立て始めた。

どれほど大人びていようと、どれほど強がっていようと、あんな目に遭って、怖がっていないなど、あり得ない。それに、大人の時間に合わせて動き、大人と同じように振る舞っていることが、小さな子供に苦痛でないはずがない。

見ている者の方が辛くなるような子供、なのだ、彼は。

「天与の才に恵まれた者の方が幸せなのか、恵まれなかった者の方が幸せなのか……」

どっちにしろ、わずか十一、二歳で、その重みを背負うのは、不憫過ぎる。

まあ、エリ阿斯には、オーギュストという秘書がついているのだから、心配ないのだろうが。

コッ、コッ、と単調な足音が廊下に響いたのは、それから、しば

らくしてのことであつた。

エリ阿斯が眠ってしまったせいか、部屋は余計に静かになり、その音は、魁の耳にもはつきりと、届いたのだ。

龍生とオーギュストが、戻って来たのだろうか。

その足音は、魁の部屋の前で、ピタリ、と止まった。

コンコン、と、足音と同じリズムのノックが、ドアに響く。

魁は、返事をしなかった。

龍生やオーギュストが戻って来たのなら、何か声をかけるはずなのだ。

そして、エリ阿斯の手が、魁の手を、ギュっ、と強く握っていた。まるで、行つてはいけない、とでもいうように――。それは、耳で聞く言葉以上に、不思議なほどはつきりと、そして、確かなものとして、魁の胸に届いていた。

a c t 57 (後書き)

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除することとなりました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

ノックの音で目を醒ましたらしいエリアスは、身動きもせず、ただ魁の手だけを、握っている。

小さな子供が、たかがノックの音で目を醒ましてしまうなど、可哀想な気もするが、それも、彼が自分で選んで決めた道なら、他人が口を挟むようなことでも、ない。

周囲の視線を気にして、自分を見失い、絵筆を折ってしまった魁とは、その強さが違うのだ。

魁は、解っている、というように、毛布の上から、エリアスの肩を、ポンポン、と叩いた。

ノックは、奇妙なほどに、同じリズムで、続いていた。苛立つて強く叩くこともなく、速く叩くこともなく、明らかに、普通でないことを示すように、単調なリズムを繰り返しているのだ。

魁は、手のひらに滲む汗を感じながら、じっと息を殺していた。

船員が霧に濡れている可能性がある、ということは、魁もオーギユストから聞いていたし、実際、他の船員の多くが姿を消していることも、知っている。

その消えた船員たちが、霧に濡れた船員に喰べられてしまった、ということは、充分、考えられるのだ。

そして、今も客室を回り、人間を喰べ続けているかも知れない、ということも。

その中、何よりも恐ろしいのは、その船員が、マスター・キーを持っているかも知れない、ということである。もちろん、内鍵はしっかりと掛けてあるのだが……。

単調なノックは、十分も続いていただろうか。想像を超える長さである。

魁とエリアスが返事を返さず、息を殺していると、向こうもやっと諦めてくれたのか、再び、単調なリズムで、歩き始めた。

「……と……さま」

エリ阿斯が、魁の手を両手で握り締め、頬に、ギュっ、と押し当てる。

「ん？ 何か言ったかい？」

聞き取れなかった薄い呟きに、魁は、静かな声で問いかけた。

返事は何も、返らなかった。

だが、何となく、優しい気持ちに、なっていた。

しかし、その安堵の時間も束の間、また、足音が近づいて来た。

今度は逆——いや、同じ方向から、というべきだろうか。さっき

の足音は、右から左へと消えて行ったのに、今度の足音も、また、右手の方から聞こえて来たのだ。

もちろん、人間の暗闇での感覚など、当てにならないものなのだろうが。

それでも、もし、それが聞き間違いでないのだとすれば、今度の足音は、さっきの足音の主とは、また別の人間、ということになる。同じ人間なら、右からではなく、去って行った方向——左から聞こえて来るのが当然なのだ。

ドアの前で、足音が、止まった。

コンコン、と単調なノックが、届く。

そして、今度は、声も届いた。

「先輩？ 秋月先輩？ いらっしゃるんでしょう？」

日本語である。

そして、魁には、聞き覚えのある声であった。もとより、魁のことを『秋月先輩』などと呼ぶ人物は、この船の中に、一人しかいない。

真弓の夫、高橋修一である。

「あ——」

「ダメっ」

腰を浮かせようとする魁の手を、エリ阿斯が、ギュっと強く、握り締めた。

「だが、彼は、ぼくの後輩で——」

「ノックの仕方が、さつきと同じだ」

「それは……」

確かに、同じノックの音のような気もするが、修一なら、そんな遠慮がちなノックをしても、少しも不思議ではない性格なのだ。

「秋月先輩？ 真弓が部屋にいないんです。響子さんも……。それで、ぼく、心配になって……」

口調も、最も、修一らしい。——いや、少し感情が見えないような気もするが、もともと、自分の思っていることを、胸の中に押さえ込んでしまうような人間なのだ。

「エリ阿斯、彼は気が弱い人間なんだ。部屋の外に放っておいて、化け物に襲われてもしたら——。それに、さつきの足音の主も、まだ近くにいるかも知れない。このまま放っておいたら、彼まで——」

「……子供の言うことは、信用できない？」

「え？」

「同じことを、オーギュストが言ったのなら、きっと、みんな、信用してくれたはずなんだ……」

「……」

何という、きつい顔をするのだろうか、彼は。

多分、彼が他人を信用しないのではなく、周りの人間が、今の魁のように、彼を子供扱いして、真剣に話を聞いてやろう、とはしなかったのではないだろうか。それでいて、彼が口にした不用意な言葉だけは、鬼の首を取ったように、取り上げて……。だから、彼は、そんな大人たちを無視して、突き放して生きるようになってしまったのでは。

そんな気が、した。

彼も、かつては、愛らしいだけの、ただ当たり前の子供であったのだ、と。

そうでなくしてしまったのは、大人たちの方であったのだ、と。そして、そんな中でも、彼はまだ、子供としての一面を、持って

いる。絶望せずに、強い心で。

「先輩？ 秋月先輩？ いらっしやるんでしょう？ 声が聞こえました」

呼び声はまだ、続いている。

そして、魁は、ふと、一つのことを思い出した。

修一は、響子も部屋にいなかった、と言ったのだ。首だけの姿になって、部屋に置き去りにされていた響子も、いなかった、と――。

修一と真弓は夫婦だが、二人は同じ部屋を取っては、いない。真弓は響子と、修一は龍生と、部屋を取っていたはずで、修一が、響子の不在を確かめるには、響子の部屋へ行き、生首だけの響子の姿を見たはずなのだ。部屋に残っていた血痕も。

それでいて、慌てもせず、響子も真弓もいない、と言っている。

もちろん、外からノックをしただけで、中の様子は確かめていない、ということも考えられるだろうが、それなら、まず、同室の龍生に、何か言いに行くのが、当前である。そして、龍生が部屋にいないければ、『龍生もいない』と、魁に言いに来るのが……。

「――おいで」

魁は、エリアスを、腕の中へと抱き寄せた。

傷がかなり、痛んだが、そうしてやらなくてはならない、という気が、していた。

「秋月先輩？ そこにいらっしやるのは、判っているんです。ドアを開けてください、先輩」

声は高くなることもなく、苛立ちを交えることもなく、まるで、愉しんでいるかのように、同じ口調で続いていた。

それは、それだけに、一層、恐ろしいものであった。

「ミスター・秋月……」

「魁でいい。――ドアは開けない。もし、無理やり入って来るようなら、ぼくが引き留めておくから、君はその隙に――」

「もつといい方法があるよ」

「え？」

「力のない子供と、怪我人は、頭を使わないとね」

a c t 58 (後書き)

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

「使えそうかい？」

無線機を手に、難しい顔をしているオーギュストに、龍生は、期待を込めて、問いかけた。

だが――。

「無理なようです」

オーギュストは言った。

「だけど、霧はこんなところまで――」

「《NEMP》をご存じですか？」

「え、あ、ああ……。確か、核爆発による《EMP（電磁パルス）》のことだったと……」

「ええ。《NEMP》は、極めて強力で、航空機の機体外板の継ぎ目からでも内部に侵入し、搭載電子機器にダメージを与えます。あの霧は、その《NEMP》のように、船の継ぎ目から入り込み、全ての通信機器を妨害しているのかも……」

「だけど、それなら霧は、船内にも入り込んでいたことになる訳だから、俺たちにも影響が出ているはずだろう？」

「人間と機械が同じだ、と思われませんか？」

「それは……」

「あの霧が、核爆発による《EMP》だとは言いませんが、例えばとしては、間違っていないと思います。通信手段は妨害を受け、船の機能は停止し――。もしかすると、船内に流れ込んで来ていた微量の霧を吸い続けている私たちも、いつかは食欲だけの人間になって行くのかも、知れません。機械のように、すぐに機能が停止する訳ではなく、ゆっくり、ゆっくりと……」

そんな恐ろしい言葉を、何故、その男は、平然と口に出来てしまっただろうか。もし、その言葉の通りなら、この船の中の人間は、何時間後か何日か後には、自分も含めて、悍ましい共喰いを始めて

しまうことになる、というのに……。いや、その男の胸の内など、考えるだけ、無駄だろう。龍生とは、生きて来た世界が違い過ぎるのだから――。第一、核爆発、などという言葉が出て来ること自体、一般人には、ついて行けない。

オーギュストも、そんな龍生の胸の内を察したのか、

「《NEMP》に関しては、エリ阿斯様の受け売りです。あの方が、ロシアの生物兵器のことや、有害物質の化学融合のことをおっしゃっていたので」

「……」

あの子供、ますます恐ろしい限りの人物である。

「なら、通信手段は、一つも使えない訳だ」

開き直って、龍生は言った。

開き直れること自体、龍生の方も、なかなかのものであると思えるのだが。

オーギュストも、軽く瞳を細めている。

「ただの可能性の一つですから、それくらい気楽に考えておいた方がいいかも知れません」

「気楽じゃないぞ」

と、龍生は抗議したが、どう見ても気楽そうである。

「あの霧によって引き出されている《食欲》の源は、人間が堪えに堪えて来た感情や欲望のようですから、その感情や欲望をあまり堪えてなさそうな、あなたのような方なら、まず大丈夫ですよ」

どう聞いても、それが褒め言葉である、とは思えない。

何でも口に出して言ってしまう、遠慮のない人間、と正面切って言われたような気も、する。――が、龍生は黙って、後に続いた。

こういう人種なのだ、と思っておけば、オーギュストの言葉も……その内、腹が立たなくなるだろう。

そして、龍生は、そう思っておける人間であった。

車輛スペースを後にして、二人は、場所も知らない医務室の方へと歩き出した。――いや、龍生は知らないが、何故か、オーギュス

トの方は知っているようである。ためらいもなく、その方向へと歩いている。

まあ、最初から、客船の構造なら判る、と言っていたのだから、それは、不思議、の内には入らないだろう。

それにしても、知れば知るほど、このオーギュストという男、大した人物である。もちろん、エリ阿斯の方も。

「＼きんぴら＼って、知ってるかい、オーギュスト？」

龍生は訊いた。

「は……？ きんぴら、ですか？」

「ああ」

「さあ……。何のことだか」

「そう。それならいいんだ」

その男にも、知らないことがあるのだ、と知って、龍生は何故か満足であった。

もちろん、そんなことを知っていたところで、別に偉くはない、と思えるのだが。

やはり、この青年、子供じみている。

その足音は、二人が医務室のある層まで来た時に、廊下の先から、近づいて来た。

a c t 59 (後書き)

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

誰かが、ずるずると壁に身を擦りつけながら、歩いて来ているのだ。

奇妙な音である。

オーギュストが、その足音の方へと、懐中電灯の明かりを、向けた。

「ヘル・バーレン……？」

それが、オーギュストの口から零れた言葉、であった。

「知っているのか？」

龍生は訊いた。

「ええ。スウェーデンの老舗ガラス・メーカーの会長です」

「商売敵か」

二人は、その紳士の方へと、足を向けた。

「ヘル・バーレン、これは……」

バーレンの口からは、凄まじい血臭が漂い、顔中——顎から首、胸にかけて、夥しい血が滴っていた。

「こいつ、人間を食べたんじゃ——」

そうとしか思えない、光景であった。近づいただけで、口の中が錆びて行くような血の匂いが鼻につき、吐き気を催すほどの、異様な匂いが漂っているのだ。

「彼は、霧に濡れた人間ではありません。それは、クーラーザーにいた時に、確認しています」

「だけど、この血は——」

龍生が言いかけた時であった。

「助け……あの女……殺され……る……」

バーレンが言った。

スウェーデン語であったため、龍生には、何を言っているのか判らなかったが、オーギュストには判ったようで、

「フリユ・マルセですか？」

と、バーレンの言葉に、問い返した。

「ああ……。あの女……。わしが海に沈んで行くのを……。楽しむように、眺めていた……。だが……。気が変わったのか……。わしを海から引き上げて……。今度……。今度は……。人間の肉を、わしの口の中に、突っ込んだんだ……」

その言葉が真実であることは、顔や首、胸に滴る血を見ただけで、容易に知り得た。

「それだけじゃない……。あいつは、わしを何度も殴って……。蹴って……。わしのペニスを、咬み千切ったんだ……。それを、わしの口の中に突っ込んで……。笑って……。君の悪い声で……。凄まじい力で、わしの口を押さえながら、笑って……。わしがペニスを飲み込むまで……。その後、何人もの男のペニスを、口の中に突っ込まれて……。あいつが、その男たちを殺したんだ……。それで……。その男たちのペニスを、わしの口へ……。ぐ……。っ！」

また、その時のことを思い出して、気分が悪くなったのか、バーレンが、血の混じった胃液を吐き出した。

肉は、全部吐き出した後なのか、吐瀉物の中には、見当たらなかった。

「助けて……。くれ……。このままでは……。わしは、あの女に殺される……。あいつが、また別の人間を襲いに行っている内に……。また……。喰わされる前に、やっと逃げ出してきたんだ……。頼む……。助けてくれ……」

血の涙を滲ませたの、懇願であつた。

だが、同情できるものでも、なかった。

そこまで、あの夫人を追い込んだのは、外ならぬバーレン自身であつたはずなのだ。

もちろん、バーレンが自業自得だとしても、他の人間にまで被害が及ぶのを、黙って見ていることは出来ないが。

「……。夫人に、今までのことを謝ってみられてはいかがですか、

ヘル・バーレン」

冷たい眼差しで、オーギュストは言った。

「そんなもの……っ。何度も謝ったんだ……っ！ 何度も……何度も……。それでも……あいつは……っ」

人間の肉を口の中に突っ込まれては、バーレンも、謝って懇願するしかなかったのだろう。——いや、その謝罪も、今までのことを悔いてのものではなかったかも、知れない。もし、夫人が、元の通りに戻ったら、バーレンは、きっと今まで以上に——この仕打ちのことも含めて、夫人を蔑ろにしようとするだろう。

「おい、さつきから何の話をしてるんだ？」

スウェーデン語の解らない龍生が、じれったそうに、口を開いた。オーギュストは、少し間を置き、

「……。自分は大丈夫だから、放っておいてくれ、と」

「え？ でも——」

「私も、医務室へ行った方がいいのでは、と言ったのですが、これは自分の受ける当然の罰だから、放っておいてくれ、と」

「罰？」

「彼は、夫人に対して、いい夫ではなかったのですよ……。私も、噂では色々と聞いていましたが、実際は、それ以上だったのでしょう。——彼の夫人は、以前は、とても美しく、誰もが焦がれるようなレディだったのですが、彼の家に嫁いだから、というものの、見る見る生気を失くして……。ヘル・バーレンは、死を前にして、その罪を償いたいそうです。癌でもう余命がなく、吐血したことで、死期を悟った、ということですから」

「……そうか」

オーギュストの淡々とした言葉に、龍生は、胸を詰まらせるようにして、うなずいた。

生きている人間を見捨てる、ということも、今のこの異常な状況の中では、以外にも、あっさりを受け入れられることであった。

「行きましょう。エリ阿斯様と、ミスター・秋月のことも心配です」

「ああ」

二人は、医務室の方へと、足を向けた。

「助け……オーギュ……。お願いだ……。あの女に……。殺される……っ！」

その言葉の意味も、龍生には知りようのないことであつた。——いや、もし知っていたとしても、バーレンが夫人にした仕打ちのことを聞けば、オーギュストと同じように、彼を見捨てていたかも知れない。

もちろん、もし、などという仮定が、何の意味もないものである、ということとは、解っていたが……。

a c t 6 0 (後書き)

近日中に、完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただくこととなりました。

詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました

「先輩？ 秋月先輩。そこにいらつしやるのは、解っているんです。真弓は、あなたのことが好きでしたから、きつと、あなたのところへ行くはずなんです。ぼくに、買い物押し付けて」

修一の言葉は、相変わらず、不気味なほどに、変わらない口調で、続いていた。

「ぼくが自分でドアを開けてもいいですか、先輩？ こう見えても、結構、力があるんですよ、ぼく。——ぼく自身、今まで知らなかったんですけど……」

クツクツ、と笑い声が、入り交じった。それも、どこか冷めた笑いであつた。

ガチャガチャ、とドアのノブが、音を立てる。それも、決して、力を入れていない、と思えるような、まるで、二人を怖がらせて愉しんでいるような、そんな動かし方であつた。

ガシャン——つ、と一際高い音を立てて、ドアノブが、外れた。

「あー、先輩、すみません。ドアを壊してしまいました」

からかいにも似た愉しげな口調で、修一は言つた。

「先輩が悪いんですよ。ドアを開けてくれないから」

人間とは、ここまで悍ましくなれるものなのであろうか。——いや、人間が、ここまで悍ましくなれるはずも、ない。

彼は、もう人間ではない、のだ。

「もう、ドアを壊しちゃってもいいですよねえ？ どうせ、いつかは壊れるんですから」

ダンっ、と体ごとドアに打付かるような音が、した。

また、同じ強さで、打付かつて来る。

今の修一の力なら、一度で充分、壊せるであらうに、それをしないで愉しんでいるのだ。

「ねえ、先輩。真弓の味はどうでした？ 何回も、あいつを喰べた

んでしょう？ あいつ、浮気なんて当然、と思っているような女でしたから。——いえ、別に先輩を責めている訳じゃないんですよ。あんな女に引っ掛かって、ぼくも先輩も可哀想だな、と思っただけで……。だって、あいつ、年中、男に喰われていないと満足できない、っていう女でしたから。ぼくも、よく我慢していたものだ、と、自分で自分が可愛くなりますよ」

ドンっ、と修一が、またドアへと打付かった。

ドアは、歪みを見せ始めている。

「あ、もう後一回くらいで、外れますよ。楽しみだなあ。真弓の好きだった先輩を喰べられるなんて」

ドンっ、という鈍い音に続いて、ドアが外れた。

カチ、っと金属質な音が響いたのは、その時であった。

ベッドの下が、オレンジ色に染まっている。

「そんなところにいるんですか、先輩」

修一は、その明かりをのぞき込むように、内側に倒れたドアの上で、身を屈めた。

刹那、バチバチバチ——と、火の弾けるような音が、導火線のように、床を張った。そして、倒れたドアの下へと潜り込むと、鼓膜を突き刺すような爆音が、響き渡った。——いや、実際には、耳がツーンとしただけで、近くにいた魁とエリアスには、音というものは、聞こえなかった。

爆音というのは、近くにいると、音としては聞こえないのだ。

「うわ——っ！」

その一瞬の衝撃に、修一の体は、廊下の向こう側の壁へと、吹き飛ばされていた。

瓦礫が飛び散り、肌を焼く爆風が、駆け抜ける。

もちろん、魁とエリアスは、ベッドの下で、小さいテーブルと毛布をバリケードに、完璧な防御を築いていたのだが。

「……ちよっと量が多かったかな。粉末だと加減が解らなくて」
爆風と砂塵が収まると、エリアスがそう言っ、ベッドの下から、

這い出した。

頭をぱりぱりと搔いている。

そして、魁は――。

「なっ……何てことをするんだ！ 俺たちまで吹っ飛ぶところだっ
たじゃないかつ。まだ耳がおかしいぞ！ こういうのは、頭を使う、
とは言わないつ。火薬を使う、と言うんだ！」

と、もう真つ蒼になっている。

「素直にライターを貸してくれたクセに」

「それはだな――ゴホッ、コボツ！」

「ほら、急いで喋ったら煙を吸い込むから」

エリ阿斯が使ったものは、綿と硝酸を使って造った、即席のダイ
ナマイトである。クルーザーの医務室で、オーギュストが造った、
例のあれだ。

ちなみに、魁は、爆竹のようなもの、と聞かされていた。

「何が「爆竹」だ。ダイナマイトそのものじゃないか……。子供に、
何てものを持たせるんだ、あの男は……」

ことは、最早、魁の理解の範囲を、越えていた。日本では――い
や、一般家庭では、子供に、危ないものを与える、などということ
は、しないものなのだ。

a c t 6 1 (後書き)

完結済小説『魔窟降臨伝』を削除させていただきました。
詳しくは活動報告をご覧くださいませ。
今までありがとうございました。

「さっきのビンを寄越せ。危なくて仕方がない」

「でも——」

「デモもストもない。寄越すんだ」

「いいけど……。もうカラだよ」

「へ……？」

懐中電灯で照らして見たビンの中身は、本当に、エリアスの言葉通り、空であった。

「でも、ドアの下での爆発だから、あの人、死んでないと……」

「当たり前だ。子供を殺人犯にする積もりはない。殺すつもりなら——俺が自分でやっている……」

その言葉に、エリアスの面が、茫とするように持ち上がった。

立ち上がった魁の足に、ピト、とくつつき、服の裾を、握り締める。

「ぼくが、あなたの友だちに怪我をさせたことを、怒ってるのかと思っただ……」

彼は、自分が怒られていることを、ちゃんと、他の子供と同じように、理解しているのだ。そして、魁が彼を心配して怒っているのだ、ということも——。いや、それは、たった今、気づいたのかも知れない。それまでの間、彼は、自分一人で、爆破の重みを背負う積もりで、魁の叱責に甘んじていたのだ。泣きもせず、それが当然である、とでもいうように。

「……。怒鳴って悪かった。龍生に言わせると、俺は口に出す言葉が足りないらしい」

魁は、エリアスの頭を、ポンポン、と撫で、

「さあ、行こう。懐中電灯を持っていてくれ。彼を縛っておく」と、修一の方へと踏み出した。

修一は、爆破の衝撃で壁に叩きつけられ、ショックで意識を失っ

ている。火傷や裂傷も、数箇所に見られるが、命に拘わるような傷でも、ない。

本当は、殺してしまった方が良かったのかも、知れない。生かしておいたところで、また、人間を喰らうだけなのだ。

だが、もし、殺すとしても、それは魁がやることであり、エリ阿斯にさせてはならない、と思っていた。

魁は、シーツを裂いて、一つに繋いだ即席のロープで、修一の手を後ろに回して、縛り始めた。

その修一の口元が、微かに微笑んでいることには、気がつかなかった。

手を縛り終え、足を縛ろうとした時――。

「危ない、カイ――っ！」

と、エリアスの声が、耳に届いた。

後ろ手に縛られ、廊下に転がっていたはずの修一が、奇妙な生き物のような動きで、跳ね起きたのだ。

普通の人間なら、両手を後ろ手に縛られて、そんな起き上がり方など出来なかっただろう。

カツ、と人の頭ほどもありそうな口を開き、魁の頭を狙って、飛び掛かって来る。

「カイ――っ！」

懐中電灯の光が、修一を照らした。

だが、それは、エリアスの持つ明かりでは、なかった。

修一の口が、魁を喰らう――そう思った刹那、一発の銃声が駆け抜けた。

「ぐああっ！」

修一が呻きを上げて、そのまま床へと吹き飛ばされる。

その脇には、瞬く間に血が広がり始めていた。

「大丈夫か、魁！」

それは、龍生の声であった。

傍らには、銃を構えるオーギュストが、いる。

「あ、ああ……」

「爆発音が聞こえて、急いで戻って来てみたら、これだ。修一まで、霧に濡れていたとは、な……」

クラブやカジノに来ていなかったのだから、デッキに出ていた可能性は、充分、考えられたのだ。

「カイっ、カイ……っ」

エリ阿斯が、泣きじゃくりながら、魁の胸に、しがみつく。

「……ヘエ。結構、可愛いことも出来るんじゃないか」

龍生はそれを見ながら、エリ阿斯の頭を、優しく撫でた。が――。
「触るなよっ、バカ！」

やはり、龍生に対しては、可愛くない。

「何で、そう待遇が違うんだっ」

とことん、相性が良くないらしい。

「とにかく、部屋を移らないと……」

四人が移ったのは、龍生と修一が取っている——取っていた、ツイン・ルームであった。

そこで、魁はオーギュストに傷の手当を受け、今さらながら、その傷の多さに、目を瞠っていた。

背中だけでも六力所、腕、肩、腰、足を入れると、十数力所にも上るほど、鉄パイプで打ち付けられた跡が、残っているのだ。

人間、追い詰められている時は、そんな傷を負っていても動けるものらしく、魁もまさに、その一人であった。

「腕はヒビが入っているかも知れませんが、痛み止めで、その痛みは引くでしょうが、後で病院で見てもらってください」

そう言つて、注射器を持つオーギュストに、

「あ、え——」

と、魁は思わず、身を引いた。

「注射は苦手ですか？　すぐに済みますよ」

「あ、いや、そうじゃなくて……医師免許……」

「持つてはいませんが、手術を要する容体でもなく、ただの注射ですから。それに、注射器もきちんと密封されていた使い捨てのものです。モルヒネも、鍵のついた戸棚に入っていたものですから、誰が打つても、病気になるようなことはありませんよ」

「そ、それはそうだろうけど……」

もう、それ以上の文句は、言えなかった。手当てしてもらった手前、ということもあるし、日本人の悪いところでも、ある。

だが、言ふなれば、そのオーギュストという男には、何でも安心して任せておくことが出来たのだ。もちろん、自分の命に拘わること、となつては、今のうちに、少々、往生際も悪くなってしまうのだが……。

何しろ、医者でさえ、薬を取り違えてしまうこともあるのだから、

人間、万能ではないはずなのだ。何より、普通の人間が、モルヒネの処方量を知っているのかどうか……。

ちなみに、魁は、医学の方は、全く、暗い。モルヒネが痛み止めである、ということくらいは知っているが、それ以上のことは、何も知らない。皮下注射でいいのか、静脈注射でなければならぬのか、も。

注射針は、慣れた手つきで腕へと沈み、処方量の間違いで死んだりすることもなく、魁も無事に生きていた。

「痛い？」

エリアスが、つつん、と腕の包帯を突っ突きながら、魁を見上げる。

このガラス王国の二人のことは、今もって、魁にも理解できない。次元を超えた金持ちと、一般庶民なのだから、当然といえば当然、なのだろうが……。

「いや……。痛みが引いて行くのが、よく判る。——誰に打つてもらっても」

パンツ一枚の、包帯だらけ、という格好で、魁は弱々しく、最後の言葉を付け足した。

体中、包帯だらけなので、ほとんどミイラ状態である。

オーギュストは、もう、自分の手当の方へと、取り掛かっている。クルーザーで手当をしたことは、魁も聞いてはいるが、海に落ちて濡れた包帯の代わりに、今まで、魁のシャツを——つけ加えておくなら、新品のシャツを裂いたものを巻き付けて、血止めをしていたのだ。

エリアスも、消毒薬を手に、傷口の消毒と、包帯を巻くのを手伝っている。

ふと、金持ちとは、何でも出来る人間のことをいうのかも知れない、と魁が思ったことも、強ち、間違いではなかっただろう。まあ、金持ちの種類にもよるだろうが。

そして、それ以上考えていても仕方がないので、魁は服を着るこ

とにした。爆破で汚れてしまった服ではなく、この部屋にある――龍生の服である。

エリアスも、今は、仕方なく、龍生のセーターを着てやりたりしている。

何しろ、二人は、顔も手足も洋服も、煤で真っ黒になっていたのだから。

そして、エリアスとオーギュストがいてことで、魁と龍生が安心できていたことも、事実であった。

企業のトップに立つ人間は、下にいる者を安心させてやれる力がないとはならない、といっても、その二人は、紛れもなく特別な存在であつただろう。

「魁、エリアス坊っちゃまに、襲われなかったかい？」

龍生が日本語で、小さく訊いた。

「え？」

「おまえに気があるみたいだからさ。皮が剥けてないからって、安心できないぜ」

「……その手の冗談はやめてくれ、と言つただろ」

頭痛。

「スウェーデンは、フリー・セックスの国だからな」

「意味が違う、意味が――。何で、フリー・セックスの意味が、子供への淫行もOK、という意味になるんだ？」

「なら、スペインに行く、とかさ。スペインじゃあ、同性愛の承諾年齢は、十二歳からだし――。十五歳になれば、フランスへも行けるし、十六歳になれば、イタリア、ベルギー、ルクセンブルク、オランダ、ポルトガル……あと、どこだったけ？ そんなことを細々と書いた『ラブレター』をもらったことがあつただろ？」

「……いつか、おまえを送り込んでやる」

この状況で、魁が固めた、堅い決意であつた……。

「ぼくの悪口？」

と、日本語の解らないエリアスが、二人を見上げて、眉を寄せる。

「龍生が、悪口を陰で言ってくれるような人間なら、頭痛もしないんだが」

「じゃあ、大人の話？」

一応、子供がのけ者にされる話は何であるのかは、知っているらしい。

「皮が剥けたら危ない、って話を――」

「龍生っ！」

魁は、横から口を挟む龍生の言葉を、睨みつけた。

傍らでは、オーギュストが、呆れるように肩を竦めていた。

まあ、その気持ちも解らないではない。

船は破損し、部屋を出れば食人鬼がうろついている状態である、というのに、この調子なのである。

「——で、何か役に立ちそうなものは、あったのか？」

エリアスが訊いた。

「いえ。あの霧は、船の内部にも侵入していたようで、通信手段は皆無です。多分、電磁パルスのようなもので、妨害しているのかと思います。発煙筒の方も役に立たず——」

「懐中電灯が使えるんだから、他にも何か使えるものがあるだろう？ この船はどうか知らないけど、バーグマン氏のクルーザーが故障したのは、霧が消えてしばらくしてからだった。それまでは、船内の照明も点いていて、船はまだ動いていたんだ。——通信系統は、確かに霧に妨害を受けたのかも知れないけど、電気系統は、誰かが人為的に故障させたのかも知れない」

そのエリアスの言葉に、オーギュスト——いや、三人の面が、瞬時に変わった。

やはり、ただ者ではないのだ、この少年。

「そういえば、この船でも、照明が消えたのは、霧が消えてしばらくしてからだった。霧に濡れた船員の誰かが、故意に壊した、とも考えられる」

船内の人間の動きを封じるために——そして、船内の人間を喰い尽くした後は、再び船を始動させて、陸まで戻るために。

「だとしたら、故障の原因さえ判れば、治せる訳だ」

龍生は言った。

「君には無理だよ。馬鹿なんだから」

「何だと——っ。俺は、毎日、コンピューター相手に、仕事をしてるんだぞっ」

「じゃあ、治せるのかい？」

「……分野が違う」

悔しい限りの状況である。

「私が行って参ります」

オーギュストが言った。そして、エリアスの手に、小さなビンを握らせる。

どうやら、また医務室で、例のダイナマイトを造って来たらしい。魁は、それに、ピクリ、と反応した。

「それは、俺が預かっておく」

と、エリアスの手から、不吉なビンを取り上げる。

「ですが……」

「いいさ、オーギュスト。四人で行けば同じだ」

「四人？ 怪我人を連れて？」

龍生が魁に、一瞥を送った。

「……それが、一番、安全かも知れません。ドアなど容易く壊せる化け物なのですから」

もう、彼らを「人間」と呼ぶことなど出来ないのだ……。

人のいないレストランの中で、バーレンはもう、抗う気力もなく、ただぐつたりと横たわっていた。

腹も口も、詰め込めるだけ詰め込まれた肉塊に、異様なほどに膨らんでいる。

周りには、性器を切り取られ、肉を殺がれた男たちの死体が、何体も積み重なるようにして、置いてあった。

「やっぱり、夫婦で食事をする、って素晴らしいことね、あなた。私、こんなに楽しい食事なんて、初めてですわ。あなたの妻になつてから」

何人もの人間を喰べている、というのに、少しも変わらない体型で、マルセは言った。

「う……う……」

「何ですか？ 聞こえませんか、あなた」

「う……」

バーレンの口は、不自然な形に、歪んでいた。——いや、縫い付けてあるのだ。肉を吐き出せないように、糸と針を使って。

鼻や、口の縫い目の隙間からは、血汁が今も、垂れ続けている。

何度も失神しては、意識を取り戻す、という状態が、さつきから長く続いているのだ。

「オーブンが使えなくて残念ですわ。あなたの丸焼きは、きっとおいしいでしょうに」

マルセは、ペロリ、と舌舐めずりを、した。

「でも、確か、ガス・バーナーがあつたわね」

と、思い出したように、腰を上げる。

バーレンにはもちろん、何を言うことも出来なかった。

マルセは厨房へと足を向け、ガス・バーナーを探している。

その間に、バーレンの意識も再び、薄れ始めていた。

ただでさえ、口の中に詰め込まれた、幾つもの性器のせいで、呼吸が困難になっているのだ。

小さな鉛弾一つで死ぬる人間もいる、というのに、これほどの責め苦を受けても死ねない人間もいる、というのは、理不尽なことではなかっただろう、今のバーレンにとっては。

こんな目に遭うくらいなら、亡きガラス王のように、ヘリの爆破で、一瞬にして命を落としていた方が、余程ましであつたに違いない。

そして、そんなことを考えるバーレンの脳裏には、亡きガラス王の姿が、甦っていた。

誰もが知る威厳高い眼差しで、じっと、バーレンの姿を見据えている。

果たして、それは、意識も朦朧としたバーレンが見た幻、であつたのだろうか。

それとも——。

それとも、呼べば助けてくれる、救い主であるのだろうか。

「た……助けてくれ、ダールクビスト……っ。あの女は、狂ってる……。私の財産を、全て、おまえの孫にやってもいい……。だから……っ」

バーレンは、今は亡き——それでも、はつきりと見えるガラス王に、懇願した。

縫い付けられた口で喋れることも、不思議とは思わなかった。

ダールクビストは、それが聞こえているのか、いないのか、何も言わずに、黙っている。

「ダールクビスト……っ。おまえのへりを爆破させたのは、私ではない……。あれは、私の部下が勝手にしたことなんだっ。本当だ。

——おまえが殺されれば、私が疑われることを知って……っ。あいつは、私に恨みを持っていたんだ。だから、おまえのへりに、爆弾を……。っ。私は、自分が疑われないように、当局に金を握らせて、爆破の証拠物を揉み消さただけで……。っ」

まくし立てるように言い訳を続けるバーレンを前に、ダールクビストがやっと、口を開いた。

「……君の部下のほとんどが、君を尊敬してはいないだろう、バーレン。そして、君が生きていては、私の孫も、私と同じ目に遭うかも知れん」

「ダールクビスト……っ」

「私の体を焼いたほどの炎ではないが、君を焼くための炎も、もうすぐそこに近づいている。——皮肉なものだな、バーレン。いつもガラスを溶かしている炎で、お互い体を焼かれることになるなど」

「ダールクビスト！」

亡きガラス王の幻影は、安堵のような笑みを残して、薄く、消えた。

そして、バーレンの目の前には、ガス・バーナーを持つ、マルセが、いた。

縫い付けられたバーレンの口は、亡きガラス王に話しかけていた

時のようには、開かず、気の狂う恐怖だけが、そこに、あった。
「さあ、あなた。調理の支度は整いましてよ……」

「まさか……」

誰もが同じ思いで、目の前の光景に、目を瞠っていた。——いや、エリ阿斯とオーギュストは、目を瞠る、というより、むしろ、難しい顔をしていたが、それでも、驚いていない訳ではなかっただろう。船の電気系統は、どれも皆、何力月も——或いは、何年も手入れされていなかったように、赤茶色い錆を浮かせていたのだ。

辺りには、錆特有の、喉まで染み込むような匂いが、漂っている。「どうということなんだ……これは？」

錆び付いて、茶色く変化した機械類を見て、龍生は言った。

「あの霧のせいだと思えませんが……」

オーギュストが言う。

その傍ら、

「霧じゃない。——いや、原因は霧かも知れないが、それなら、船の他の箇所にも、これと同じ錆が出ているはずだ。懐中電灯にしても、同じように錆びて、使えなくなっている」

エリ阿斯が言った。

「……人間、ですか？」

「ああ。多分、霧に濡れた人間が、こうしたんだ」

「でも、どうやって？」

魁や龍生には、一向に見当もつかないことである。

「まだ〃あれ〃を人間だと思ってるから、納得できないのさ。こんなことが出来る化け物なんだ、と思えば、どんな不可解なことも納得できる」

「……」

こんな状況でも、冷静に物事を考えているのだから、この少年、化け物以上に、恐ろしい。

そして、子供らしい、純粹な物の考え方には、確かに、感服せざ

るを得ないものがあつた。

魁や龍生には、「あれ」が人間を食べていても、まだ人間の基準でしか、ものを考えることが出来ていなかったのだ。

彼らにも、人間に出来ることしか、出来ないのだ、と。

だが、エリアスは、化け物なら化け物らしいことをする、と、ちやんと別の見方で考えている。

「たとえば、口から吐く、あの生臭い息――。あの息で、こんな風に機械を錆びび付かせることが出来るのかも知れない。そして、人間の肉骨さえも、腐らせてしまうことが出来るのかも――。食べやすくするために」

もう絶句するしかない、悍ましい言葉である。

「……顔が腐つてなくて良かったな、魁」

それが、龍生が魁に言つてやれる、せめてもの言葉であつた。

もちろん、魁は、睨んでいた。

「ここを錆びび付かせてしまった以上、霧に濡れた者たちも、再び船を動かす積もりはないのでしょうか」

「もしくは、船がなくても、泳いで海を渡れるだけの体力があるかだ」

もう少し、希望のある言葉を、口にしてほしい。

まあ、魁も龍生も、現実にあるものが見えなくなるほど、パニックに陥っていた訳ではないのだが。

「とにかく、ここにいるのも仕方ありません」

オーギュストが言った。

「どうするんだ？」

「決まってるだろ。こっちから行くんだよ」

エリアスが、判り切ったことを言うように、龍生の問いに、簡潔に応じた。

「それしかなさそうだな」
と、魁。

何しろ、じっとしていても船は動いてくれず、こうしている間に

も、一人、また一人、と、霧に濡れた人間の餌食になっているはずなのだ。

加えて、クルーザーとの衝突で受けた損傷で、船は沈没の危機にさらされている。大型船であるため、すぐに沈む、ということはないだろうが、何時間か後には、確実に海の底へと引きずり込まれているはずなのだ。

「ボートに乗って逃げる、ってのは、どうだい？」

龍生が言った。

「そんなことは、他の乗客だって考えてるさ。——いや、まだ船が沈むとも思っていないくて、考えてないかな」

取り敢えず、四人は、客室のカテゴリールへと足を向けた。

乗客に、ボートでの避難と、救命胴衣の着用を呼びかけた方がいいか、とも思ったが、その必要はなかった。デッキでは、クルーザーから乗り移った船員と、この船の残りの船員たちが、すでに、船の危機を察して、その支度を始めていた。

恐らく、クルーザーから乗り移ったスウェーデンの金持ちたちが、そうせつついたこともあるのだろう。

「この船には、家族連れや、小さなお子さんたちも乗っておられるんです！ それに、怪我人も――。あなた方だけを優先する訳には――」

「ボートは、これ一つではないだろう？ 子供や怪我人は、次のボートに乗せればいい」

耳にも入れたくないような、傲慢な言葉が飛び交っている。

エリアスは、オーギュストを見上げ、

「こっちは、先に行ってるから、少し脅して来いよ」

と、冷ややかに言った。

「かしこまりました」

と、オーギュストも、同じように冷ややかな面で、その声の方へと、歩き出す。

魁は、それを見て、

「脅かす、といつても、彼一人じゃ、あの金持ちたちは言うことを聞いてくれないだろう？」

普通、秘書ごときの話に耳を傾けてくれる金持ちなど、いない。特に、こういう場合は。

「大丈夫だよ。二、三発撃てば、おとなしくなるさ」

「……なるほど」

確かに、銃とは怖いものである。

「――で、こっちは、どうするんだ？」

龍生が訊いた。

小さな子供に指示を仰ぐ、というのも妙なものだが、その子供に限っては、実際の年齢など関係ないのだ。

「取り敢えず、調理場、かな」

「調理場？」

「ああ。武器になるものがたくさんあるし、タイマーがあれば、制限装置も造れ——」

「もう爆弾はやめてくれ……」

魁の痛切な願いであった。

あれほど心臓に悪いものも、この世には、ない。

という訳で、三人は、充分に警戒をしながら、レストランの方へと、足を向けた。

背後で、何やら、銃声のようなものが聞こえていたが、それは、三人を不安にさせるようなものではなく、逆に、楽しくさせてくれるものであった。

そして、三人は、暗い中を懐中電灯で照らしながら、レストランの前へと、辿り着いた。

ここには、包丁を初めとする、さまざまな武器が揃っている。

もちろん、今でも、殴れば痛い、という程度の武器なら持っているのだが、それでは少し、心もとない。

そして――。

「何だ、この匂いは？」

レストランへと足を入れよう、としたその時、先頭に立つ龍生が、そう言つて、訝しげに眉を寄せた。

小さなエリアスを先頭にする訳にもいかず、かといって、怪我人の魁を先頭に立てることも出来ず、仕方なく――当然の成り行き、として、龍生が先頭に立っているのである。

そして、その匂いを、一番早く、嗅ぎ付けた。

もちろん、次の瞬間には、魁もエリアスも、同じ匂いを嗅いでいた。

「焦げ臭いな……」

クン、と鼻を動かしながら、魁は言った。

レストランの中からは、確かに、何かを焦がしたような匂いが、漂って来ていた。

そして、その匂いのせいで、同じ場所に漂っている血臭の方には、関心が向かなかった、といってもいい。

「誰か、人間でも焼いて食べたかな」

その軽い口調は、言わずと知れた、エリアスのものである。

「——おい、魁。一回、このお坊っちゃまに、注意してやれよ。俺だって、そんなこと思っただけで、喉の奥に酸っぱいものが込み上げて来る。」

「まあ、子供の内は、大人の勝手で、言いたいことを我慢させるよ

うなこと……」

「次に、レアだとしても言われたら、吐くぞ、俺は」

龍生の言いたいことも、解らないでは、ない。

「電気が来てないから、オーブンは使えないはずだし、生焼け——」

「エリアス——。ほらっ、危ないから勝手に入っちゃいけない。ち

やんと、龍生の後を歩くんだ」

何とか、言葉は止めることが、出来た。

しかし——。

「……やっぱり、俺が一番か」

龍生の苦悩は変わらないのであった。

左手に懐中電灯、右手に大きめのスパナを持ち、大きく肩を落としながら、レストランへと入る。

スパナ、といっても、油断している相手の頭を背後から殴る、という状況でもない限り、あまり期待の出来る武器ではない。

もちろん、魁が手にしている小型の消火器にしても、同じである。まあ、目潰しにはなるが。

とにかく、力で来られる前に、その消火器で、相手の動きを封じ

てしまうことが、大切なのである。

そして、それは、数歩と行かない内に、すぐに、床の上に目についた。

「……血だな」

テーブルの向こうから広がって来ている赤黒い染みを見て、魁は言った。——いや、まだ染みではなく、液体のまま、床を広く濡らしている。

堪えようのない吐き気が込み上げていたが、それよりもまだ、恐怖の方が、強かった。

ここに、確かに、あの怪物がいたのだ。

龍生が懐中電灯で、レストランの中を、端から端まで、照らし出す。といっても、テーブルの陰までは、見通せない。

しかし、それでも、見渡す限りの状況では、人がいるようには見えなかった。

「気をつけるよ、まだ血が流れてから、そう時間が経っていない。鉢合わせ、っていうこともあるからな」

「そういつて、人を心配するフリをして、怖がらせるおまえの性格が嫌いなんだよ。そのプレッシャーのせいで、学生時代、何回の賞を逃したと思ってるんだ」

随分、繊細な台詞である。

「賞？ 何の賞？」

エリアスが、興味深げに、魁を見上げた。

もちろん、「賞」という言葉を口にしたのは龍生であるが、エリアスが話しかけるのは、魁である。

「……美大生だったのさ。昔は、二人とも絵を描いていた」
「へエ……」

その感嘆が零れた刹那、ガタン、っと奥の方で、テーブルの動く音がした。

三人は、ハッ、と息を殺したが、何かが飛び出して来る、というような気配は、なかった。

「オーギュストを待った方が……」

「もう来ています」

と、いきなり言われて、

「うわああっ！」

と、龍生は、ちょっと情けない声を上げてしまった。

ここで、彼の名誉のために、少し説明をしておくが、先頭に立っていた龍生には、オーギュストが追いついて来たことなど、知る由もなかったのである。

「恥ずかしい奴」

と、魁は言った。

この日、龍生が、もう二度とスウェーデン人とは付き合いを持たない、と堅く誓ったのも、無理のないことであっただろう。

「今の音は、どの辺りから？」

オーギュストの方は、もう、普段通りの口調で、自分の懐中電灯を持ち上げている。

「あのテーブルの陰だよ。今、確かめに行こうと思ってただけど、こいつが怖がつて、行かなくて」

エリアスの言う、こいつ、とは、もちろん、龍生のことである。

「いちいち、カンに障ることを——」

この場合、龍生が怖がつていたことは本当であるから、あまり強いことも、言えない。

「それが賢明な判断です」

そのオーギュストの言葉に、やはり彼はいい人だ、と龍生が思い直したことも、付け加えておこう。

オーギュストは、もう銃を抜いて、テーブルの方へと歩き出している。

彼には、怖いものなどないのかも、知れない。

そして、不意に、テーブルの陰から、何かがゆっくりと——本当にゆっくりと、立ち上がった。

エリアスと、オーギュストの表情が、ハッ、と変わった——が、

それは、魁と龍生には、判らないことであつた。

四人の視線は、懐中電灯の明かりの中に浮かび上がった、全裸の貴婦人に、向いていたのだ。

ブロンドの、かつては優しげな面貌をしていたであろう、と思わせる貴婦人である。

今は――いや、今も、優しげな面貌をしてはいるが、それは、霧に濡れた人間特有の、薄ら寒さをもたらすものであつた。

オーギュストが、エリアスの方を、垣間見る。

銃を持っている、というのに、その貴婦人を撃とうともせず、指示を待つよう、ためらっているのだ。

その雰囲気は、魁にも龍生にも、伝わって来た。

いきなり、貴婦人が、オーギュストへと向かって、跳躍した。獣のように、高く、素早く。

そのスピードなら、周りに何人いようと、数分で全員を片付けてしまうことが出来ただろう。

だが、今は違う。

今は、オーギュストの手には銃があり、引金を引くだけで、その貴婦人を倒してしまえる状況なのだ。

オーギュストの手の中の、コルト・パイソンが火を噴いた。

「ぐあっ！」

貴婦人が、肩を押さえて、蹲る。

肩――。

外した、のだ。あのオーギュストが、狙いを外した。飛び掛かれる前に、充分、狙いを定める時間があつたというのに、まるで、わざとそうしたように――。

修一を倒した時でさえ、あつと言う間に狙いを定めて、引金を引いた、というのに――。

貴婦人は、すぐに身を起こし、再び、オーギュストへと襲い掛かった。

しかし、オーギュストは、もう引金を引くこともせず、テーブルを飛び越えるようにして、攻撃を躲しているだけである。

「何をしているんだ、オーギュスト！ もうその女は人間じゃないんだ！」

龍生が、堪り兼ねたように、声を上げた。

オーギュストは、攻撃を躲しているだけで、何とか貴婦人を生かしたまま捕らえよう、とするかのように、時折、当て身を食らわせている。

持久戦になれば、オーギュストの方が先に疲れるであろうことは、

判り切っている。その貴婦人は、肩を撃たれても、まるでダメージを受けていないように、平坦な表情で、オーギュストに攻撃を続けているのだ。

「銃を使え、オーギュスト！ 早く死なせてやった方がいいんだ！」
龍生は再び、声を上げた。

その傍ら、魁は、黙って立ち尽くすだけのエリ阿斯の方を、垣間見ていた。

エリ阿斯は、震えるようにしながら、碧い瞳をじっと見開き、指をきつく結んでいる。

彼は——彼らは、その貴婦人のことを知っているのだ。——そんな気が、した。——いや、それは、事実だったのだろう。多分、さつき、オーギュストがエリ阿斯の方を見たのも、エリ阿斯が、その貴婦人の死に傷つくかも知れない、と思ったからに違いないのだ。

どんな事情があるのかは判らないが、魁はそう、思っていた。

だからこそ、オーギュストも、その貴婦人を倒せずにいるのだ、と。もう何人も人を喰い殺して来たであろう、その貴婦人を。

もちろん、だからといって、魁が何をしてやれる、という訳ではない。武器もなく、体中、傷だらけの状態なのだ。

だが——。

だが、オーギュストが、その貴婦人の生死を、エリ阿斯に決めさせよう、としていることは、間違っているのではないだろうか、という思いはあった。その貴婦人を生かすか殺すかを、わずか十一、二歳の子供に決めさせてしまうなど、あまりにも残酷で、辛すぎる。彼に、そんなことを決めさせては、ならないのだ。オーギュストは、エリ阿斯の出す結論を待っていては、いけない。

そう思った時、魁は咄嗟に、駆け出していた。

「おい、魁！ どこに行くんだ！」

その龍生の言葉にも、振り返らずに、調理場へと向かう。

エリ阿斯も、ハッ、としたように顔を上げていたが、魁は、レストランの奥の厨房に入り、並べ掛けられた包丁の一本を、手に取っ

た。

不思議に手は、震えなかった。——いや、まだ人を殺す、などという実感がなかったからかも、知れない。レストランへと足を踏み入れた時よりも、ずっと冷静であることにも、気がついていた。

魁は、その包丁を手にも、レストランへと、翻った。

レストランの中では、相変わらず、オーギュストと貴婦人が、息の詰まるような攻防を、続けていた。

貴婦人は涎を垂らし、カッと大きく口を開き、悍ましいばかりの形相で、オーギュストに襲い掛かっている。

オーギュストはそれを躲し、何とか、貴婦人を取り押さえようとしていたが、床の染みに足を取られ、バランスを崩して、傍らのテーブルに、腕をついた。

床に広がっている血を踏み付け、足を滑らせたのだ。

貴婦人の口が、無防備になったオーギュストの顔へと、カッ、と開いた。

魁の立つ位置からでは、間に合う距離ではなかった。

もう貴婦人は、その口で、オーギュストの頭を喰らおうとしている。

あと数センチ——そう思った時、

「フリユ・マルセ！」

突然、エリアスの声が、高く上がった。オーギュストの名を呼ぶのではなく、その貴婦人の名を呼んだことでも、彼が、貴婦人の死ではなく、この狂気を止めることだけを願っていることは、容易に知れた。

だが、もう間に合わないことも、歴然としていた。

貴婦人は、顎を閉じるだけで、オーギュストの頭を喰らえる位置にいるのだ。

それなのに——。

それなのに、レストランの中には、深い沈黙だけが、続いていた。マルセ、と呼ばれた貴婦人は、オーギュストを喰らうこともせず、エリアスの呼びかけに反応するように、優しげな瞳を揺らしている。そして、その貴婦人の姿は、何故か、普通に見えた。

オーギュストが、パツ、とその場から、身を翻す。

マルセの表情が変わつたのも、その時であつた。再び、あの薄ら寒い表情に戻り、カツと大きく口を開く。

そして、魁の方へと、襲い掛かつて来た。

恐らく、正面で懷中電灯を持つ魁の姿は、暗闇に翻つてしまったオーギュストの姿よりも、目につき易いものであつたのだろう。

「逃げるんだ、魁！」

「フリユ・マルセ！」

龍生の言葉に交じつて、再びエリアスの声が飛んだが、マルセの足は、止まらなかつた。

そして、魁もその場から、逃げなかつた。

魁は、マルセの顔を、はつきりと見ていた。

懷中電灯に照らし出されるマルセの瞳には、何かが小さく、輝いていた。

それに戸惑つた刹那、マルセの体が、魁の体に、打付かつた。――そう。それは本当に、打付かる、という言い方こそ、相応しいものであつたのだ。

そして、魁が握つてた包丁は、マルセの腹に、深々とその刃を埋めていた。

「魁！」

「大丈夫ですか、ミスター・秋月！」

しばらくは、何が起こつたのか、判らなかつた。

足元に倒れている貴婦人を見ても、何故倒れているのかすら、理解できなかった。

その貴婦人は、口を開いていたというのに、魁を喰らおうとはしなかつたのだ。

それに、懷中電灯の明かりの中で見た、あの涙――。

魁には何故か、その貴婦人が、自分から包丁に刺し貫かれるために、魁に打付かつて来たのだ、と思えなかつた。

もちろん、魁自身が、人を殺した、と思いたくなかつたから、そ

んな風に考えたのかも、知れない。その貴婦人が、勝手に飛び込んで来て、自殺したのだと――。

それに、エリ阿斯が呼びかけた時の、あの表情――。あの一瞬、彼女は確かに、正気の人間の、優しいな面貌をしていたのだ。

「魁？ 大丈夫か、魁？」

その龍生の言葉に、

「……ああ」

魁はやつと、顔を上げた。

「ミスター・秋月――」

「二度とエリ阿斯に、人を殺すか生かすかの指示を仰ぐような真似をしたら、許さない」

魁は、きつい視線で、オーギュストを見据えた。

多分、そんな風に、心のままの言葉を口にしたのは、初めてだった。

オーギュストは、神妙な顔付きで、黙っている。

口を開いたのは、エリ阿斯であった。

「……いいんだ、魁」

「え？」

「秘書は、命令通りに動くのが、仕事なんだ。秘書が勝手なことをしたら、困るだろ？」

「それは、また別の――」

「ぼくが、この道を選んだんだ。すべてを自分で決める道を――。

誰にやらされている訳でもない。ぼくは、どんなことでも自分で決めて行く」

「……」

これほどまでに強い少年なのだ、彼は。

自分の言葉が引き起こすであろう結果のことも、その責任のことも、常に考えて行動している。

「この夫人……死んだのか、オーギュスト？」

「はい。苦しまれるようなことはなかった、と思いますが」

「そう……。行くぞ」

傷ついていない訳では、ないだろう。

人の死に、何も感じていない訳では、ないだろう。

それでも、彼が涙を零さないのなら、周りの人間も、彼に何も言うてはいけないのだ。

そして、エリ阿斯はきつと、解っている。

その貴婦人が、エリアスの言葉に応えたことを。

人を喰らい続けて生きることより、この場で死ぬことを選んだことを。

彼女は、エリアスの呼びかけに救われたのだ。だからこそ、優しさに打たれたように、涙を零し、確かに、普通の人間として、死んで逝った……。

「……殺してやった方が、いいんだよな」

調理場で手にした武器を片手に、キャビンの中を歩く中、龍生が神妙な日本語で、魁に言った。――いや、それは、自分自身への問いかけであつたのかも、知らない。

「もし、正氣に戻れたとしても、自分が人間を喰らっていたことを背負つて、この先ずっと、生きていかなきゃならないんだ。そんな思いをさせるくらいなら、克也も修一も、さっきの婦人も……」

「考え方は、人それぞれさ。どんな場合でも人殺しはいけない、と考える人間もいる」

「そういうおまえの言い方が氣に食わない、つて言つただろ。少しは、人の忠告を聞いて、その厭な性格を直せよ」

「……そうだな」

「へ？」

えらく素直である。

こういう時の魁には、あまり近づかないでおこう、と龍生が思ったのも、天変地異の前に、動物たちが逃げる本能のためであつたかも、知らない。

前の方では、エリ阿斯とオーギュストが、二人には解らないスウエーデン語で、話をしていた。

「……さつき、ふと、彼の――ヘル・秋月の言葉の方が正しかったのではないか、という氣がしました」

オーギュストが言った。

「――で、これからは、ぼくの命令を無視する、つて？」

「いえ。それが正しいことであれ、間違つたことであれ、私の仕事は、あなたの命令に従うことです。ことの正しさに関係なく」

「当然だ」

エリ阿斯は、言つた。

彼はやはり、人の上に立つべくして生まれて来た人間なのだ。

「彼に……何もおっしゃらなくて宜しいのですか？」

チラッ、と後ろへ視線を向けて、オーギュストが言った。

「厭な性格だな」

「フッ」

と、笑い、

「彼は、私の目から見ても、父君によく似ておいでです。容姿そのもの、というより、雰囲気……。最初は、黒髪の日本人、ということで、全く気がつきませんでした。一旦、そう思い始めると、本当によく……。実際、父君を知っている私の目から見ても……きつと、あなたも気づいておられる、と思っております」

写真でしか知らなくても、エリアスなら――。

「……話相手が出来て、嬉しかったんだ」

おや、こちら素直である。

「承知しております」

「でも、もう一人の奴は、馴れ馴れしくて嫌いだ」

うーん、根本的には、変わっていない。

「はあ……。あちらも嫌っておいでかと……」

あれだけ、あからさまな態度を取っていれば、当然である。

まあ、エリアスが人に懐かないのは、今に始まったことでもなく、懐かれる人間の方が珍しいのだが。

それに、やっと、好感を持てる人物を見つけた、というのに、その人物の側に、自分より親しげにしている人間がいれば、嫉妬して当然のことであろう。今のエリアスは、父親を他人に取られてしまいかも知れない、と心配している子供と同じなのだ。

まあ、最初の出逢いも悪かったのだが――。

不意に、目の前が、ポウ、と明るくなった。

前を歩いていたエリアスやオーギュストはもちろん、魁も龍生も、その明るさに気づいて、顔を上げた。

客室のドアの一つが開いており、そこから、廊下に、その光が洩

れ出しているのだ。——いや、たった今、洩れ出した。

しかし、それは、懐中電灯のような光ではなく、もっと白い——
言うなれば、朝靄のような光であった。

四人は、ハッ、とし、オーギュストが銃を構える中、その明かり
の洩れる部屋へと、息を殺して、近づいた。

ドアの脇まで来ると、オーギュストがそこで三人を制し、部屋の中を覗き込んだ。

その面が、不思議なものを見るように、刹那、変わった。

「どうしたんだ？」

銃を降ろしてしまうオーギュストを見て、エリ阿斯が訊いた。

部屋は、普通のツイン・ルームで、一目で見渡せる広さ——狭さである。

「陽が……」

「陽？」

三人は、オーギュストの言葉に、部屋の中を覗き込んだ。

そこには——。

そこには、朝、と呼べる光景が、あった。

窓の外の空は、姿を見せた太陽の光に白く染まり、新しい朝を浮かべていたのだ。

「……夜が明けたのか？」

これで全てが終わったのだ、という気がしていた。

もう、闇に怯える必要はないのだと——。

「デッキに出てみよう」

四人は、すぐさまデッキへと駆け出した。

そこには本当に、朝、があった。

何もかもを、希望に変えてくれる朝である。

幻想的な白さも、海面にきらめく黄金色の光も、全てが美しく色づいている。

「長い夜だったな……」

きつと、北欧の夏に、こんな長い夜を経験した者など、他には誰もいなかっただろう。

今、確かに、夜が明けた、のだ。

もちろん、ここが沈み行く船の上であり、樂觀できる状態ではない、といことは解っていたが、それでも、陽の覗いた白い空は、その全てを忘れさせてくれるほどに、穏やかなものであったのだ。

誰もが、その朝陽の美しさに、感嘆していた。

そして、それに、気がついた。

デッキの片隅に、青いビニール・シートが掛けてあるのだ。

それは、人が少なくなつたデッキの上では、派手なほどに、よく目立った。——いや、目立ったのは、そのシートの膨らみが、ちょうど人間の大きさくらいであったからかも、知れない。引き取り手のない遺体に、ビニール・シートを被せているような、そんな雰囲気であつたのだ。

四人がそこへ足を向けるのにも、そう時間は掛からなかった。

そして、ビニール・シートを捲つた、その下には——。

「真弓……？」

酷く変わり果てた、日本人女性の姿が、あつた。

エリアスも、オーギュストも、何も言わなかった。

魁も龍生も、同じであつた。

奇妙に凹んだ腹部も、顔中にこびりついた血痕も、その死に際の凄惨さを、何よりも生々しく表していたのだ。

オーギュストが再び、シートを掛ける。

誰もがそのことに、安堵していた。

その死を否定しなかった訳ではなく、その死体を、朝の光の中にさらすことに、強い抵抗があつたのだ。

そして、悍ましい死体のまま人の目にさらしておくこともなく、シートを掛けておいてくれた誰かに、感謝もしていた。

「察していたのか？」

声すら上げなかった魁を見て、龍生が訊いた。

「……ああ。旦那の言葉を聞いた時から、な」

真弓は、夫である修一に殺されたのだ。

あの時のデッキでの騒ぎも、この真弓の死体を見つけたためであったのだろう。

「——さて、これからどうするか、だな。大部分はボートで脱出できたみだいけど」

気を取り直すように、龍生が言った。

その明るい口調は、誰もの心を和らげてくれる。

たとえ、大勢の人間が殺されたことで、ボートの奪い合いが少なくて済んだのだとしても——。

それに、殺された、といっても、死体もないのだから、誰もが釈然としない思いを抱えていただろう。

消えた人間が、食べられてしまったなど、誰も考えていないはずなのである。

「あれも、朝陽を浴びたら灰になってくれる、なんてことはないかな？」

「吸血鬼じゃあるまいに」

「でも、あれって、共喰いするのかな？」

ふと、龍生が口にしたその言葉に、エリ阿斯とオーギュストが、ハッ、としたように、目を見合わせた。

そして――。

「我々も、脱出の準備をしましょう。船が沈む前に」

と、急に、逃げる算段を持ち出した。

「え？ だけど、あいつらを倒してからでないと、陸に上がられでもしたら――」

「あれは共喰いします。船内の人間がほとんどいなくなった今、もう共喰いを始めているかも知れません。我々は、その間に脱出の準備をし、一人残ったあれが、我々が喰べに来たところを倒せば、それで事は片付きます。この広い船内を探し回るより、遥かに安全な方法です」

確かに、この広い船内を探し歩いていては、何時間も掛かるだろう。しかも、船内は、まだ暗いままなのだ。

だが――。

「それにしても、何時間掛かるか解らないさ。その前に船が沈むかも知れない。それに、そいつが最後の一人かどうか、判らない」

エリ阿斯が言った。

「しかし、他に方法も――」

「あるさ。皆が脱出したら、船を爆破してしまえばいい。燃料は充分にあるんだからな」

どこまでも過激な少年なのである。

「それが一番いい方法かもしれません」

うなずく秘書も、秘書である。

「何か異議は？」

「……ありません」

魁と龍生も、素直にうなずくしか、ないのである。

「じゃあ、時限装置を造ろう。ダイナマイトもあることだし、燃料タンクくらい、吹き飛ばせる。

かくして、四人はまた、レストランへと戻って行くのであった……。

「これでいい」

船の燃料タンクに、時限爆弾をセットして、四人は、暗い船内を、再び、デッキの方へと戻り始めた。

もちろん、その時限爆弾を造ったのは、エリアスとオーギュストである。

何故、そんなことまで出来るのかは、判らないが、もう追及する気も、起こらない。

「何か……絵を描くことだけに拘り続けて来た俺たちが、馬鹿馬鹿しくなるよな」

その龍生の言葉も、桁外れの二人のとの出逢いが、思わせたものであっただろう。

魁も、フツ、と笑っていた。

誰もが、この悪夢の終わりを、確信していたのだ。

結局、あの霧が何であったのかは、判らなかったが、これで全てが終わったのだ、と。

時間が来て、船が爆破すれば、それで全てが終わるのだ、と。

最初に、その音に気づいて足を止めたのは、エリアスであった。続いて三人も足を止め、同じように、息を殺す。

その音は、廊下の両側に並ぶ部屋の一つから、聞こえていた。

骨を齧る音、である。

肉を引き千切る音、である。

すぐ近くに、あれがいるのだ。

四人は階段を離れ、音のする部屋の方へと、足を向けた。

もちろん、どうせこの船は爆破するのだから、放っておいても良かったのかも、知れない。それに、霧に濡れた人間を、殺してやりたい、と思うほどに憎んでいた訳でも、ない。

ただ、早くそれをやめさせてやりたかったただけなのだ。もうこれ以上、人間を喰らう前に、その悍ましい行為を止めてやりたかった。ドアは半分、開いていた。

この層には、もう誰もいないらしく、静かである。

朝陽が昇ったことで、闇に怯えていた人々も、全てデッキに出ているのだ。あの朝陽は、そのためのものでもあったのだろう。――

いや、皮肉な人々は、朝陽がそんなことを考えながら昇るはずがない、というかも知れないが。

暗い船内は、静かである。

その中、人を喰らう音は、時々、血汁を啜るようにしながら、耳を塞ぎたくなるほどの悍ましさと、続いていた。

例によって、オーギュストが、銃を片手に、部屋の中を覗き込む。その表情が、ハッ、と変わった。驚く、というよりも、戸惑うように。

朝陽の差し込む部屋の中で、人間を喰らっているのは、黒髪の一——どう見ても、アジア系の女性であった。

だからこそ、オーギュストも、戸惑ったのだ。

その女性も、魁や龍生の友人ではないのか、と。

そして、その戸惑いと躊躇が、引金を引くタイミングを、遅らせた。

女が、オーギュストの方を、振り返る。

まだ血を拭っていない口や顎は、べったりと血で濡れ染まっている。手には、食べかけの腕を、持っている。

身なりは、いい。上品なデザインのタイト・スーツを纏い、理的に整った美貌を、気品に満ちたものとして、色付けている。

アジアの金持ちの令嬢ではないか、という気がしていた。

女は、薄ら笑いを浮かべて、立ち上がった。

オーギュストは、ハッとしたが、それでも、引金を引くことはせず、魁と龍生の方を、振り返った。——いや、本当は、そんなことをしてはならなかったのかも、知れない。知り合いであったにせよ、なかったにせよ、自分の判断で殺していれば、よかったのだ。

だが、オーギュストの視線を見た二人は、部屋の中を覗き込んでいた。

大きく表情を変えたのは、龍生であった。

魁も表情を変えてはいたが、それは、血塗れの悍ましい姿を見た

ための、当然の変化であつた。

「……沙織？」

龍生が言った。

その声は、信じられないものを見た時のように、震えていた。

そして、魁の表情も、ハッ、と変わった。

魁も、その女性を知っているのだ。——いや、顔は知らなくても、沙織、という名前だけは、知っている。

オーギュストは、自らの失態を悔いるように、薄い唇を噛み締めた。そして、銃口を持ち上げ、引金に掛ける指に、力を込めた。

「撃つな——っ！」

龍生が、そのオーギュストの腕を、払い落とした。

「くっ！」

ガン、と腕がドアに打付き、オーギュストの手から、銃が零れる。

「龍生——」

「彼女は化け物なんかじゃない！ 俺の婚約者なんだ！」

龍生の言葉に、血塗れの女が、優しげに、笑った。

誰もが、思いがけないこの状況に、声と息を詰まらせていた。

「……見間違いないのか、龍生？ 彼女は日本にいるんだろう？」

「それは……」

確かに、今回の旅行は、大学時代の仲間だけで来たもので、沙織は同行せず、日本で待っていたはずなのだ。

「だけど……こんなに似て……」

目の前にいる女性は、双子の姉妹でもいなければ、これほど似るはずがない、と思えるほどに、龍生の婚約者、大庭沙織に似ていた。「いやだわ、龍生さん。私のことが判らなくて？」

ゆづりとした口調で、女が言った。

誰もが、ハッ、と目を睜った。

「沙織……なのか？」

龍生が訊いた。

クスクス、と愉しげな笑みが、零れ落ちる。

「そうよ。あなたを驚かせようと思って、追いかけて来たの。——大丈夫。ちゃんと、お父様にも、お許しをもらって来たから。——本当は、ホテルで合流できるはずだったんだけど、飛行機が遅れてしまつて……。やつと、この船に乗れたのに、船内は広すぎて、あなたがどこにいるか判らないし……。デッキに出ていれば、あなたに逢えるかと思つたけど、あなたは出て来なくて……。随分、捜したのよ」

「沙織……」

「怒らないでね。あなたのことが心配だったの。だって、あなたの大学時代のお友だちの女性は、みんなきれいで、私の知らないあなたを知つていて……。私なんて、絵のこともよく判らないし、あなたも、絵のことは私には話してくれないし……。不安だったの。あなたにはやつぱり、絵のことを理解してくれる女性でなければ駄目なんじゃないか、って」

「そんなことは——っ。ぼくは、もう絵を捨てたんだ。——いや、

挫折した。だから、何も話さなかっただけで——」

「もう別に、そんなことは構わないのよ」

「え……？」

余りにも、さつぱりとした沙織の言葉に、龍生は戸惑いながら、疑問符を置いた。

「私、もう何の心配もしていないんですもの。だって、絵が好きだ、つていう人は、みんな食べてしまったし——。こうすれば、あなたと絵の話が出来る人が、いなくなるでしょう？——この人もね、私が『絵は好きですか？』つて訊いたら、『好きだ』つて言うから今、食べてたのよ。——その人たちも、絵は好きなのかしら？」

生暖かい、狂気に満ちた瞳が、持ち上がった。

こんなことがあってもいい、というのだろうか。

蒼冷める龍生と、霧に濡れた婚約者の姿を垣間見ながら、魁は、何も言つてやれない辛さを、噛み締めていた。

つい、昨日、無邪気にその婚約者の話をしていたばかりなのだ、龍生は。

美人で上品だと自慢し、幸福そうな顔をしていた。

それが――。

それが、次の日には、こんな残酷なことが起こってしまうなど……。

「沙織……」

龍生の声は、震えていた。

彼は、性格的にも、もちろん、屈託のない青年だが、それは、今が幸せであるからこそ、滲み出ていた明るさでも、あったのだ。その幸せの要因たる女性の、こんな姿を見せつけられて、平静でいられるはずも、ないだろう。

「日本へ帰ろう、沙織……。一緒に、日本へ……」

と、部屋の中へと、足を踏み出す。

「龍生――」

魁は、咄嗟に龍生を引き留めようとしたが、それを制するように、小さな手が、魁の手を握り締めた。

エリ阿斯である。

エリ阿斯は、静か、としか言いようのない眼差しで、じっと龍生を見据えている。

「彼が決めることだ」

その言葉は、正しいものでもあったのだろう。他の誰が何を言つても、何をしても――彼女を殺しても、生かしておいても、龍生に後悔させることしか出来ないのなら、他人が口を挟んだりしてはな

らないのだ。

龍生は、婚約者——沙織の元へと、真つすぐに足を進めている。生臭い血臭の漂う中、窓からの光に照らされる女性の元へと。

「あなたを食べたいわ、龍生さん。そうすれば、あなたはずっと、私のものですもの」

カツ、と沙織の口が、大きく開いた。

何も決めていた訳では、ない。

殺そう、とか、殺されよう、とか、そんなことは、少しも考えてはいなかった。

ただ龍生は、沙織が口を開き、襲い掛かって来るのを、幻のように見つめていたのだ。

彼女が別のものになん変わっているなど、今、こうして目の前で見ていても、決して信じてはいなかった。——いや、実感がなかった、というべきだろうか。

龍生にとっては、いつもと同じ、大庭沙織に過ぎなかったのだ。

ただ一つ、脳裏に過っていたこと、といえば、エリ阿斯が「マルセ」と呼んだあの婦人が、魁の元へと、真つすぐに打付かって行った、あの時の光景であった。

彼女は、エリアスの呼びかけに反応するように、オーギュストを襲うのをやめ、魁の方へと駆け出したのだ。

もちろん——。

もちろん、だからどうだ、という訳では、ない。

沙織が正気に戻るとか、戻らないとか、そんなことを考えていた訳でも、ない。

ただ、思っていたことがあるとすれば、彼女が人間を食べてしまったことを、これからも決して責めないであげよう、ということと、それを思い出させるようなことはしないでおこう、ということであ

った。

そんなことを、いつもの沙織が知ったら、とても正気でいられるはずがないのだ。

生臭い息が、顔にかかった。

糸を引く涎が、赤く開いた口から、零れている。

こんな彼女の姿を、誰にも見せたくない、と思っていた。美しく、気品に満ち溢れた彼女の姿だけを、人には見ていて欲しい、と――。

「龍生！」

魁の声が、背後から、飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8572v/>

喰らう霧

2011年10月26日14時58分発行